
死の都市

LION

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死の都市

【Nコード】

N0098U

【作者名】

LION

【あらすじ】

はつきりした目標もなく平凡な毎日を過ごす女子大学生、伊東皐月。退屈な授業中いつものように居眠りをしていたその日、世界は急変した。人を食らう化け物が蔓延る地獄と化した大都市東京。死が身近に迫った混乱の中、皐月は謹厳実直な剣道男子佐伯義崇や不良青年須藤英雄など仲間たちに出会い、協力しながら大切な家族とまた共に生きるため街を駆け巡る。かつて存在した平和は再び訪れるのか。

只今不定期更新で頑張ってます。一人でも多くの方に楽しんでいただけたら嬉しい限りです。ご意見感想ございましたらお待ちしております。趣味で書かせていただいている初心者なので厳しいお言葉はご容赦ください（^^;）よろしく願います。

- ・番外編清見千香子前編を第三章の終わりに加えました。
- ・挿絵つきの登場人物紹介を序章から各章の最後に移動しました。

プロローグ（前書き）

初めまして、L I O Nと申します。小説を投稿するのは初めてで、表現や話の運びなど拙い文章だとは思いますが、一人でも多くの方に楽しんで読んでいただけたら嬉しいです。

この小説はいわゆるゾンビものです。私はダークでシリアスな話が好きなので、苦手な方はご注意ください。

プロローグ

「うぎゃあああつ！」

「いやっ……いや、やめて……こないで、こないでええー！」

「や、やめっ……ぎゃっ！」

私、伊東皐月は、悲鳴が響き渡る廊下を全速力で走っている。信じられないことだが、私の通う大学で今、大規模な殺戮が行われているのだ。それも、普通の殺人とは違う。人が人を食い散らす、カニバリズムのお祭りだ。

こんな非常事態だ——当然同じ大学の仲のよい友達の安否が心配だが、他の人の身を案じてもらえない。少しの気の緩みが、死につながる。

死をこんなに身近に感じるようになるとは。平和だった日常が嘘のようだ。いや、十数分前までは確かに平和だったのだ。退屈な授業、いつものように居眠りをしたあの時まででは。

第一話 異変 ★（前書き）

プロローグを加えたり、ちょっとしたところで加筆したりしました。絵を描くのが好きなので扉絵を入れてみました。見たくない方は挿絵OFFでお願いします。すみません；

第一話 異変 ★

> i 2 7 4 5 6 — 3 5 7 0 <

停滞した空気が漂う大教室。離れた位置から無気力な教授の声が聞こえる。

ふうと静かに息を吐く。頭が麻酔をかけられたように、ずっしりと重い。あと少し気を緩めれば忽ち夢の世界だろう。

この大学に通いはじめてはや1年と3ヶ月。仲のよい友人もでき、それなりに楽しくやってきたが、充実してるかと言われれば疑問を抱かずにはいられなかった。

自分が今していることは本当に意味があるのか？ 明るい将来のためには必要なことなのか？

母子家庭で弟ひとり、都営住宅に三人暮らし。とても裕福とは言えなかったが、まあまあ地頭が良かったらしい。高校受験では進学校に合格し、国立大には落ちたものの、現役で第二志望だった有名私大に入学した。

……だけれども。未来が何も見えてこない。私は何のためにここににいるのだろうか？ 何やら堅苦しい用語を交え、ぼそぼそと話し続ける教授の姿をぼんやりと見つめ、ふと虚しく思った。

と、その時だった。ガタンと大きな音をたて、私の席から右斜め前の方向にいた女子学生が椅子から転がり落ちた。四方八方から、

わっと一瞬どよめきが沸き起こる。数列隔たっていたので（学生は疎らで空席が目立っていた）よくは見えなかったが、床に倒れた彼女の長い黒髪が通路に広がっていた。

教授が急ぎ足で女子学生に近寄り、容態を尋ねる。幸い意識はあるようで、少し休みたい、と教授に伝えたようだ。

彼女が椅子に座り直すとき一瞬見えたその横顔は、恐ろしいほど蒼白だった。よほど体調が悪いのだろう。女子学生はそのまま机に突っ伏してしまった。

意識を保つのに精一杯で気づかなかったが、回りを見渡してみると今日は寝ている学生が多い。しかも大胆に机に頭を預けて。

母親が汗水流して稼いだ学費を無駄にしたくはない。とはいってもそんなにできのよい孝行娘ではないので、気がつけば意識が飛んでいた、なんてことはよくある。そして今日もその例に漏れなかった。

目が覚めた時にはホワイトボードに全く覚えのない板書がしてあって、最後に時計を見てからもう30分近く経っているのに気づく。ああ、やってしまった。何だかとても申し訳ない気持ちになる。

姿勢を正し、目を大きく見開いた。最後に熱心な学生を演じよう。

そう思った矢先、視界の隅で何かが動いた。あの女子学生だった。あれからずっと眠っていたのだろうか。

彼女の様子に変なものにはすぐ気づいた。上半身を左右にふらふらと揺らしている。まだ調子が悪いのだろうと視線を教授に戻そうと

した。

その時。彼女が横を向いた。同時に揺れがぴたりと止まる。私の体に瞬時に緊張が走った。横を向く彼女の目は虚ろで膜が張ったように白く濁り、口は弛緩してだらしなく開き涎が垂れていた。

そしてその目の先には……真面目にノートをとる女子学生。何故だかわからないがその時叫ばなければいけないと思った。そして私の勘は正しかったのだと思う。

それはゆっくりと私の目に映った。長い黒髪その女が、女子学生の首に……噛みつくのは。

私が噛んだと認識してからしばらく間があったように思えたが、実際は一瞬だったかもしれない。耳をつんざくような女子学生の悲鳴。彼女の細い首は大きくえぐれて血が大量に吹き出していた。そこから僅かに覗く白いモノは首の骨だろうか。

目の前の出来事に訳がわからず呆然としていたが、はっとして辺りを見渡す。驚いたことにこんな状況下でも顔を伏せて眠り続けている人もいたが、回りのほとんどの学生は立ち上がって困惑している様子だった。声が上擦り、ちよつとしたパニック状態になっている人もいる。

黒い長髪の女子学生は背の高い男子学生に拘束されていた。口の周りを真っ赤に染めて、剥き出しの歯にはピンク色のモノがこびりついている。そして顔は能面のような無表情で、眉ひとつ動かさない。噛まれた女子学生は痛みと精神的ショックで倒れてしまい、ピクピクと痙攣している。これは、普通じゃない。

なんとも言えない悪寒が走った。目の前の出来事も信じられないくらい恐ろしいが、もっとおぞましい事態が起きる。そんな気がした。

家に帰らなきゃ……

私は机に広がるペンケースなどをそのままに、上着と鞆だけ手にして席をたった。そして急ぎ足で出口に向かおうとしたが、数歩踏み出したところで体がものすごい勢いで傾いた。

「あっ！」

情けない声をあげバランスを崩し、机に手をつく。鞆を引っ張られたということはすぐにわかった。体勢を整えまた歩き出そうと顔をあげた私と、そこに座る男子学生の目があった。私の前の席でさっきまで寝ていたはずの彼の目は――白く濁っていた。

「いやあああああっ！！！」

それが自分の声だとすぐにはわからなかった。理性より恐怖が先立ち、私は鞆を手放すと全速力で駆け出した。

やばい、やばい、やばい！！

扉に手をかけたその時、背後で悲鳴が上がった。第一声を皮切りに、続々と悲鳴が上がる。

振り返ると、教室の至るところで学生同士が取っ組み合いになっ

ていた。本能に突き動かされるように大口を開け、相手に噛みつくうとしている。

私のすぐ側には茶髪的女子学生を必死に押さえつけている男子学生がいた。

「あ、ああ……や、やめろっ、やめろっ……」

馬乗りになって襲いかかる女子学生の手首を掴む男子学生の腕は震えている。女の子なのすごい力だ。大丈夫だろうと思っていたが、危ないかもしれない。

怖い気持ちを抑え、助けにいかうと数歩近づいた時、女子学生が大きく前へのりだし、男子学生の頬へ噛みついた。

「ひぎゃああああっ！」

悲痛な叫び声をあげ、男子学生の力が抜けた。追い討ちをかけるように首へと食らいつく。

ビシュウウウ……

鮮血が、お気に入りの青いワンピースの右肩部分を真っ赤に染め上げる。鉄の臭い。男子学生に目を移すと、首もとをえぐられ泡を吹いて気絶した彼に、新たに数人が近付いていた。

駄目だ、私も殺される……！

私は教室を飛び出した。

教室から廊下に飛び出してどちらへ行くべきか悩み、下へ続く階段のある右を選ぶまでの数秒間。私の目に、さっきまでいた教室の様子が写った。

白い机に、壁に、血、血、血。最後に見たのは、年老いた教授の恐怖に歪んだ顔。さっきまで自分の話を聞いていた生徒に捉えられ、今にも襲われようとしていた。

「一体、何が、起きてるの……？」

無意識的につぶやいたその声は、自分のものではないような気がした。すぐに我に返り、私は階段の方向に走り出した。

第二話 出会い（前書き）

もう読んでくださった方がいて感激です！ありがとうございます。
休日中心の不定期更新になると思いますが、頑張りますのでよろ
しく願います。

第二話 出会い

外に出るにはエレベーターという選択もあったが、階段と逆方向の廊下の突き当たりにあるため、待っている間にあの人達に追い付かれてしまう危険性が高かった。

階段は既に人でごった返していた。私を追い抜いたさっきの教室の学生以外にも、隣の教室から人が続々と出てくる。中には衣服が破れ腕や足が露出し、生々しい傷口を覗かせる人もいる。あのおかしくなった人達にやられたに違いないだろう。だとしたら、隣の教室でも同じことが起きているということになる。

「おいっどけよ!」

「早く! 早く行って!」

悲鳴と怒声が絶え間なく飛び交い、鼓膜がビリビリと震えるのを感じる。このパニックを起こした状況を見ると、もう終わりなんじゃないだろうか、と絶望的な気持ちになる。

背後で呻き声が聞こえた。あの人達が出てきたんだ! 振り返るとやはり、いた。目が白く濁り、赤黒いモノで汚れた口をだらしなく開け、服は返り血で真っ赤に染まっている。逃げなくちゃ……。

下へ続く階段は使えない。あの人達が追い付いてきたのを知った学生たちは、悲鳴をあげ、我先にと押し合いながら階段を下る。あれではドミノ倒しになるのは時間の問題だ。彼らはすぐそこまで迫ってきている。足を引き摺るように、ゆっくり、ゆっくり。

考えている時間はなかった。上り階段に足をかけたその時、下の

方で悲鳴があがった。

階下にもいるのだろうか！ 思わず下り階段の方を覗く。学生が学生を襲っていた。信じられないことに、それは人混みの中心で起きている。ということは、逃げる学生の中にあれが混じっていたことになる。そんなことがあるのか……。よく見ると、襲っている学生の首筋にはつけられたばかりであろう深い傷があった。

引き返そうとする学生を、教室から出てきたあの人達——いや、もう人と言っているのかわからない——あれらが待ち構えていた。焦りと恐怖とで痛いほど体内で鼓動する心臓の音を感じながら、私は上り階段をかけあがった。

先程の大教室があったのは三階だった。この大学の五号館は七階建てで高いかわりに、各階の部屋数が二、三しかない。そして中央の階である四階は、隣接する六号館へと続く渡り廊下がある。私はそこから脱出するつもりだった。

足元から聞こえる何十もの絶叫が私の身体を突き抜け、芯から震える。力が入らない身体に鞭打ち、やっとの思いで階段を上りきり四階に着いた。

四階は学生専用のP Cルームがあるだけで、授業を受ける教室はない。そして今日は授業の少ない土曜日だけあって利用者もあまりいないようだ。廊下にいる人といえば、私と同じように三階から上がってきた人達で、一目散に渡り廊下を走り抜けていった。

鳴り止まぬ悲鳴に突き動かされるように、私も渡り廊下へと向かう。緊張と日頃の運動不足で足がガタガタと震え、思うように動かない。

「……君？」

「ひゃああーっ！」

腕に触れる背後から伸びてきた手に、私はまたしても情けない悲鳴を上げた。逃げなきゃ！ 逃げなきゃ！ 振り切って走り出そうとするが、その手は離れない。

「落ち着いて。何が起きているんだ？」

はっとして顔を声のする方に向ける。私の腕を掴んでいたのは、見知らぬ男子学生だった。背が高く、小柄な私を陰しい顔で見下ろしている。この人はおかしくなっていないようだ。

「……！ 肩をどうした？ すごい出血じゃないか」

彼は真っ赤に染まった私の肩を見て、驚いた声をあげた。とりあえず簡単な手当てを、と手にした鞆から何やら探し始めた彼に私は焦って弁解した。

「あ、いや、これは大丈夫です。それよりもっ！ 早く、早く逃げなきゃ！」

ヒギィィィ……

……グギャアッ

悠長に話してはいられなかった。いつあれがここに来るかわからない。それにいつの間にかやら階下から聞こえる悲鳴が弱々しく、途切れ途切れになっている。とても人間のものとは思えない、獣染みた甲高い声だった。

彼も事態の異常さを悟ったようだ。眉をひそめ、意識を集中させて階下の様子を探っている。

「少し見てくる。君は先に行っていてもいいよ」

「だ、だめっ、絶対に危ないから！ 逃げよう！」

実際に見なければ信じがたい現実だが、彼を行かせるわけにはいかない。名前も知らない人だが、このような状況下で話せる存在がいるのはありがたい。いなくなってほしくなかった。

さっきから誰も階段から上がってきていない。あんなにたくさんいた人が全員下り階段から逃げられたとは思えなかった。逃げそびれた人がどうなったか……すっかり静かになった階下のことは考えたくなかった。

アア……アアアア……

微かだが聞こえてくる地の底から轟くような呻き声。あれに違いない。そのうちこちらに近付いてくるだろう。

「……確かに、逃げた方がよさそうだ」

彼も迫り来る危険を感じたようだ。私に目を向けた彼に、私は領き返した。

渡り廊下を二人で駆け抜ける。不気味なくらい静かな空間に足音が響く。窓から地上の様子を確認すると、門を目指して走る学生がちらほら見えた。そして、地面に倒れた誰かに群がる……あれの集団。嘘でしょう、外にもいるなんて。それよりも、あれは、人を……

…。

「何だあれは……喰らってるのか、人を」

隣で彼が呟いた。信じられないといった様子で、固唾を吞んで状況を伺っている。

そう。あれは、人を食べている。生で、噛みついて、食いちぎっているんだ。

「や、やばいよね？ これ……」

「そうだな。幸い奴らはまだこの階に上がってきていないようだが、急ごう」

私達は再び走り出した。先程の光景からこの建物を出ても安全ではないことはわかっているが、狭いここは危険だ。

渡り廊下の反対側に着いた。六号館は比較的小さな教室がたくさんある五階建ての校舎だ。今日はこの階で授業は行われていなかったらしく、人の気配を感じない。

「挟み撃ちにあつたらまずい。階の安全を確認しながら出来るだけ下に降りよう。あいつらがこっちに渡ってこないうちに……」

彼は冷静だった。もと来た方向に注意を向ける横顔は凛々しく、頼もしい。彼に出会うことなく一人だったらと思うと、ぞっとする。

私達は階の安全を注意深く確認しながら下の階を目指した。

第三話 遭遇（前書き）

こんな私の小説を、読んでくださっている方、お気に入り登録してくださった方、感想を書いてくださった方、本当にありがとうございます！

これから先は人と人との関係を重視して丁寧に描写していきたいですし、もっとスピード感のある展開を目指そうと思っています。

本格的に文章を書いたのが初めてなのでわからないことだらけですが、温かく見守ってくださいると嬉しいですよ。

長々と失礼いたしました。よろしく願いいたします。

第三話 遭遇

幸い三階までの間にあれの姿は見えなかった。しかし安心したのも束の間、二階へ下り長い廊下の直線上に來た時私達は絶句した。

「……っ!!」

白い廊下を汚す赤黒い血溜まり。生々しいそれは、つい先ほどまでここで殺戮が行われていたことを証明していた。強烈な生臭さが鼻をつく。

「うぷっ……!!」

血の海の中にピンクの肉片やテカテカした臓物が見えた。魚の内臓を見ただけでも気持ち悪くなるのに、こんなものを見せられては堪えられない。

「あまり視界に入れない方がいい」

彼が背中を擦ってくれた。おかげで吐き気も少しおさまったようだ。

「ありがとう……」

私は彼に礼を言うと、目の前の異常な光景から逃れるため、もと來た階段の方を向いた。あんなにぐちゃぐちゃになっているんだ。あれらの持ち主が無事な訳がない。

「こんなの、普通じゃないよね……?」

「そうだな……俺たちが知っている殺人事件や戦争とは違う。人間性、理性というものがまるで感じられない。そっくり抜け落ちてしまっているようだ」

あまり動じた素振りを見せずに淡々と見解を述べる彼だが、その表情は重々しく、内心かなり動揺しているようだった。

ふつう人を殺す時は――憎むべき相手にしろ国家の敵にしろ――その人間の存在を消すことが目標であり、人を殺すという意思を持ち、様々な感情が付きまとう。しかしあれらにはそれが感じられない。その人を殺すことに対して何の心の動きもないのだ。電車に乗り遅れまいと急いで走り、その途中の道で蹴り飛ばした小石程度の感覚。その人が生きようが死のうが考えも及ばない。どうでもいいのだ、ただ血と肉にありつければ。

私が落ち着いたのを確認すると、彼はより緊張した面持ちで私の耳元で囁いた。

「聞こえるか？ 階段の下だ」

耳をすますと、下り階段の方から不気味な呻き声が聞こえる。

アアア……ウアアア……

喉の奥から絞り出すような、低い声。あれに違いない。階段を下りたすぐ近くにいますようだ。

「この階段は使えない……ね」

「ああ。あっちのを使う必要があるな」

彼は血塗られた廊下の奥、こちらと反対側の突き当たりを指差す。
この建物は長い廊下の両端にそれぞれ一つずつ階段がある。

「奴らはまだこの階に潜んでいる可能性が高い。注意して進もう」

そう言うとは彼は手にしていた荷物を降ろした。状況が状況なので
今まで気付かなかったが、彼は鞆の他にも渋いえんじ色の大きな袋
と、同色の布で包まれた私の肩までほどの長さの棒状のものを持っ
ていた。

「竹刀？」

「ああ、剣道部なんだ。今日も午前中は練習だった」

袋の紐を解き、竹刀を構える。シャツから覗く逞しい腕と全身か
ら放たれるその気迫が、彼の剣の実力を物語っていた。

「殺傷力は低いが、丸腰よりはましだな。四肢を打って動きを封じ
るくらいはできるだろう」

彼を先頭に、血溜まりを避けながら廊下を進む。両手が竹刀で塞
がった彼の荷物は私が持つことにした。ドアが開け放たれた教室を
恐る恐る覗くと、授業中に惨事が起きたようだ――ノートや筆記用
具など持ち物がそのまま残っており、血にまみれて床に散乱してい
る。

幾つか教室の中を確認したが、あれの姿はなかった。逃げる人々
を追って一階へ行ってしまったのだろうか。

あと少しで階段にたどり着く、という時。もうこの階にはいないのだろうと少し安心していった私の耳が、聞きなれない物音をとらえた。

クチャ……クチャ……

静かに響く湿った音。断続的に聞こえてくる。階段の向かいにある端の教室からだ。嫌な予感がする。

「ねえ……聞こえる？」

「ああ。おそらく、奴らだろうな」

彼の竹刀を握る手に力が入ったのがわかった。……どうする？

気付かれなければそのまま素通りしたいところだが、一階がもっと危険で引き返さなきゃいけなかったら。挟み撃ちになるのだけは避けたい。

私達は音をたてないようにドアに近付き、そつとその教室の中の様子を伺った。

あれがいた。私達の正面に。心臓がドキンと一際大きく鼓動し、その衝撃で短く悲鳴をあげそうになったが、堪えた。元々ホラーが好きだったのである程度耐性があるとは思うが、実際目にするのは違う。

あれは、人を食べている最中だった。目の前にある肉の塊を、犬のように這いつくばり顔を近づけてむしゃむしゃと頬張り咀嚼している。それが人だということは、何も状況を知らずに今この光景を見た人にはわからないだろう。何故なら、それはもはや原型をとどめていなかったからだ。白い骨にこびりついた僅かな肉を、あれは

貪っていた。

「うぐっ……」

あまりの気持ち悪さに戻しそうになって慌てて口をおさえる。こちらの存在がバレやしないかと背筋が凍る思いだったが、あれはこちらを気にも留めず食事を続けている。

音をたてなくとも、視界に入っているはずなのに。何故？

その時。教室の開け放たれた窓から風が入り込んだ。机の上に放置してあった空き缶が転がり落ちる。

カラン……カッカラカラカラ……

乾いた音をたてて私の足元へ転がってきた空き缶を見つめ、視線をまた正面に戻す。

あれが、ゆっくりと顔をあげた。少々長めの茶髪でラフな格好をした男子学生だった。新鮮な血でぐっしり濡れた半開きの口から赤黒く染まった歯が覗く。白く濁った瞳はピクピクと動き、焦点が定まらない。

「下がって、廊下の様子を見ていてくれ」

彼が正面を見据えたまま私に言う。本当に大丈夫なのだろうか。あれの力は……強い。言われるがまま二三歩下がったが、気が気じゃない。

あれが緩慢な動作でのっそりと立ち上がった。

ウ
ア
ア
ア
…

こちらに手を伸ばし、前のめりの体勢になりながら、あれが不安定な足取りでふらふらと彼の方に近付いてくる！

第四話 戦闘（前書き）

読んでくださっている皆様、ありがとうございます。

初の戦闘？場面です！色々突っ込みどころ満載かもしれません…
…。これからもっと激しくなる予定です。とは言っても完全に民間
人視点のお話なので、そんなに迫力はないかもですが（へーへ；

第四話 戦闘

ふらふらと不安定な足取りで近付いてくるあれを、彼はじっと凝視していた。あれの手が彼の身体に触れるまで、あと二メートルちよつと。あれが大きく一步を踏み出した時、彼が動いた。

バシイイイツ……！！

鋭い、大きな音が教室中に響き渡る。目にも止まらぬ早さで、彼の竹刀があれの伸ばしてきた腕に強烈な一打を放ったのだ。ものすごい迫力だった。

衝撃で数歩下がったあれの腕は変なところで折れ曲がり、彼に掴みかかろうとしてもビクンビクンと震えるだけだった。骨は折れているどころか、もろに打撃を受けたところは粉々に砕けちっているはずだ。しかし、あれは表情一つ崩さず何事もなかったかのように前進を再開した。

「……！ 化け物か」

彼が低い声で呟く。そうだ、あれは化け物なのだ。人を生きながらにして喰らうなんて……まるで映画に出てくるゾンビじゃないか。

ウウウアアア……

くぐもったおぞましい声をあげながら、もう一方の手を伸ばしてくる。すごい執着だ。

「……っ！」

意図的に掛け声を押し殺しているのがわかった。しかし威力は変わらず凄まじい。大きく竹刀を振り上げ、彼があれの額に一撃をお見舞いした。

ドガッガガガガッ

長机や椅子などにぶつかり、あれが激しく転倒する。受け身をとらなかった上に足や腕が変な位置にあったため、ゴキィッと嫌な音をたてておかしい体勢で背面から倒れこんだ。最後には頭も強く打ち付けたようだ。

普通なら痛みでのたうち回るところだ。しかしあれは動かない手足をピクピクと痙攣させ、やがて無理だと悟ったのか、横に転がるとうつ伏せになり、そのまま地面を這って近付いてきた。

「……こいつっ」

彼が狼狽える。私も言われた通り周りに気を張り巡らせながらも、その光景から目を離せずにいた。

「むこうを向いていてくれ」

彼が竹刀を構えながら背後の私に言った。あれは片足で床を蹴って少しずつ少しずつ近付いてくる。首をもたげ口を大きく開き、目の前の佐伯くんに噛みつきようともがいているのがわかった。

……これは、人間ではない。人間の姿をしているだけで、中の人間は死んでしまっている。私は静かに後ろを向いた。

バキィツッ！

すぐに何かが折れる音が聞こえ、呻き声が途絶えた。

「……行こう」

手が私の肩にポンと置かれ、反射的にビクンと震える。見上げると、彼がどこか悲しげな笑顔で微笑んでいた。

彼の後ろには、動かなくなったあれがいた。ほっとした反面、いたたまれない気持ちになる。

「首の骨を折ったんだ。……そうするしかなかった」

そう言う彼の腕は僅かに震えていた。おかしくなったといえども、あれは元々人間だったはずなのだ。人を殺してしまったという自責の念に駆られているのだろうか。何か言わなくては、と思った。

「ありがとう」

彼が伏せた目を見開く。

「ああしなきゃ、私達もやられてた。……正当防衛だよ！ それに……」

私は彼の背後、息絶えたあれと人の残骸を見つめた。彼も首だけ動かして同じ方向を見る。

「あれは……化け物だった。普通の人間が、あんなことするわけないよ。絶対そんなことあるわけない」

気付けば私も小刻みに震えていた。緊張の糸が切れたのか。しかしすぐに思い直した。まだ、終わっていない。早くここから出て家に帰ろう。もし万が一出れなくてもこんな非常事態だ、大ニュースになって救助がすぐに来るはず。それまで生き延びるんだ、必ず。

「化け物……か。そんなこともあるのか、な。まあ細かいことは後で考えようか。今は脱出することが先決だ」

少し顔に明るさを取り戻した彼に私は笑いかけた。こんな時だからこそ笑顔が大切なのだ、と実感する。そうでもしなきゃ……精神がおかしくなる。

私達は二階が安全になったのを確認し、ついに一階へ降りることに決めた。

一階へ続く下り階段を前に、私達は立ち尽くしていた。

……ウウ……アアアア

微かだが、声が聞こえる。割りと近くにあれがいる。それも二、三体。

「こっちにもいるなんて……。ど、どうする？」

「行こう」

まさかの即答だった。

「え、本当に行くの?!」

「……ああ。ここにいても同じだ。それに、少し奴らのことがわか

った気がする」

彼が考えるには、あれは極端に視力が悪く、ものがぼんやりとしか見えず、主に音を頼りに行動していると言う。そして動きは鈍い。確かに思い当たる節はある。しかし、彼が信じられない訳ではないが、憶測を過信してよいものか。……でも、彼の言う通りだ。行くしかない。

「どうだ、行けそうか？」

彼が尋ねる。私は決心がつかず数秒口ごもったが、ついにはつきりと返事した。

「うん、行こう」

彼は力強く頷き、階段の方に歩き出した。

「……ねえっ」

私は彼を呼び止めた。さっきからずっと聞こうと思っていたことがあったのだ。こんな時に能天気な奴だと思われかねないが、聞いてしまえ。

「私、伊東臯月っていうんだ。……あなたは？」

彼は一瞬ぼかんとしたが、すぐにはにかんだ優しげな笑顔で答えた。

「佐伯義崇^{さえぎよしとか}。よろしく、伊東さん」

佐伯君、か。よし、絶対に二人で生きてここから出るんだ。私達は下り階段の一步を踏み出した。

第五話 脱出（前書き）

この小説は主に電車の中で書いています。今のところ筆がスムーズに進んでいますが、いつ止まるかと思うと今から心配で心配で……汗

書き始めてから今まで常にどんよりとしたかなり暗い作風ですが、今回出てくる日々の大学生活の回想シーンではちよつと明るめに描写してみました。これからもちよこちよこ織り混ぜようかな〜と思います。

第五話 脱出

一步。また一步。音をたてないように慎重に階段を下りる。緊張で玉のような汗がこめかみから頬を伝う。そしてようやく到達した階段の曲がり角からそつと一階の様子を覗く。

……いた。階段を降りてすぐの廊下。あれがゆらゆらと揺れている。こちらに背を向けているので顔は見えなかったが、十中八九その顔は血で汚れているだろう。鼻につく濃厚な鉄の臭い、何かを引き摺ったかのような血のあと。少し前にここで何が起きていたか容易に想像できる。

佐伯くんは私に待っているよう手振りで伝え、後ろを向いたあれの正面に位置するこの階段をゆっくりと下り始めた。あと二段であれのいる一階の廊下に足がつく。あれが彼に気付きませんように……。

佐伯くんが一階の廊下に一步を踏み出した。あれは依然としてぼーっとあらぬ方向を眺めている。その時気付いた。彼は竹刀を持つ右手と別に、左手に何かを持っている。……さっきあれに遭遇した時に転がってきた空き缶だ。

廊下に出た彼はあれのすぐ近くにいても関わらず、冷静に左右にのびる廊下の様子を確認していた。そして、意を決したように空き缶を左の方向に、投げた。

カーーン……ツカラカラカラッ……

軽やかな音が静かな廊下に響いた。佐伯くんが思い切り投げた空

き缶は階段にいる私の視界から消え、左にのびる廊下のずっと奥の方で落ちたようだ。

……ウアアアア

あれが左を向き、視界の隅に入っているであろう彼には目もくれず、ずるずると足を引き摺るように歩きだした。やがてあれの姿が消え、佐伯くんは空き缶を投げてからずっと構えていた竹刀を下ろす。

「伊東さん」

佐伯くんが小声で手招きをする。私は大きな音を出さないようそっと階段を下り、廊下の直線上に立った。

彼が空き缶を投げた左側を見ると、十メートル以上離れたところ、空き缶が丁度落ちた地点にあれがいた。その数ざっと十以上。

「こっちだ」

佐伯くんが耳元で囁く。彼の指差す右側の廊下の先には、開け放たれた扉が見えた。私は走りたい気持ちを抑え、忍び足で扉へ歩き出した。

やっとここから出れる！　しかし油断などできない。閉じた環境から出ることはできたが、あれは外にもいるのだ。とはいえ、今頃警察が到着してあれを取り締まっている……はずだ。

……早くお母さんに会いたい。誠はもう学校から帰ってきてるかな？

私は一見適当でサバサバしているけど本当は心配性な母親と、ちよつとひねくれてて生意気な弟の姿を思い浮かべた。帰ったらきつとお母さんの胸で年甲斐もなく泣いてしまうだろう。誠のやつ、だせえって笑うだろうな。そしたらこの右肩の血を見せつけてやる。

誠の怯えた顔を想像したら自然と笑みがこぼれた。こんな状況なのに、人が死んでいるのに、私って変かも。やはり今起きている非日常をどこか信じきれないのだと思う。

そうこう考えているうちに無事扉の前に着いた。後ろを振り返ると、あれは階段のずっと向こう、空き缶の周囲で右往左往していた。

「さあ、出よう」

佐伯くんの声にはっとして、また扉に向き直った。……やっと出れる。私は佐伯くんの後に続き扉をくぐった。

外はやけに静かだった。学生一人いない。授業の少ない土曜日ではあるが、いつもそれなりに人がいる。この短時間で皆この大学の外に逃げ出したのか。食べられてしまったとは考えたくない。辺りを見渡し何気なく視線をすぐ横に向けると――

「いやあああつ！」

さっきまでいた六号館の校舎の壁にもたれかかるように、それはあつた。髪を明るい茶色に染めた女の子。

濃いアイラインで縁取られた両の目を大きく見開き、口は苦痛に歪んでいる。ピンクのチークを施していたであろう頬はかじりとり

れ、生々しい傷となり今も血を流し続けていた。

衝撃的なのは、彼女の身体が……首から下が、ないこと。いや、あるにはあるのだが肉という肉が食いつくされ、露出した肋骨の間には内臓は一つも残っていないかった。無残にも骨だけになった彼女は壁に背を預け静かに座っていた。

「あ……ああ……」

私は彼女を知っていた。あの教室でいつも一緒に授業を受けていたのだ。友達、というほど親しくなかったが、あれは1ヶ月程前の、5月に入ってすぐだったか。

いつものように開始ギリギリで席に着き、慌ただしく筆記具などの用意をしていた時。

（ないっ……）

ファイルに挟んでいたはずの先週貰ったプリントが見つからなかった。今回の授業で必要だから持ってくるよう言われていたのに。

（なんで、絶対入れたのに）

諦めきれずにファイルの中の書類を一枚一枚確認する。八割見終わったところでもまだ見つからない。残り二割を紙と紙の間を覗きこみながら確認している時。

バサバサバサーッ

本当にそんな音がしたのだ。ファイルから製造業者が想定してい

た容量をはるかに越えているであろう、大量のプリント類がなだれ落ちた。

クスクスクス……

笑い声が聞こえ、顔がかーっと熱くなる。高校のクラスならまだいい。しかし学年ごちゃ混ぜ、見知らぬ人ばかりの大学の授業では恥ずかしい以外の何でもなかった。

整理しておけばよかった。激しく後悔しつつ書類をかき集める。図々しくも隣に座る人の足元まで私のプリント達は勢力を広げていた。

「あっ……すみませんっ」

謝罪しながら隣に座る誰かの顔を見上げると――派手な赤いハイヒールの靴から想像はしていたが――今風のお化粧バッチリのお姉さんが座っていらっしまった。私を見下ろす目が……怖い。位置関係的に仕方がないのだが。

すると、彼女はふと目を細め、優しい笑顔をつくった。

「いいよ、こっち私がやるから」

「えっ……あっ」

彼女は手際よく書類を拾い上げ、あっという間に丁寧に揃えて私に差し出した。

「あ、ありがとうございます！」

「プリント忘れたんでしょ？ 見なよ」

さらに彼女は探していたプリントを私との間に置いて見るよう言ってくれたのだ。（余談だが、あのプリントは弟がメモ用紙に使っていた。無論、後に叩きのめした）

彼女と話したのはその時が最初で……最後だった。ただあの教室内でも大学内で偶然すれ違った時でも、目が合うと彼女は必ずニツと笑いかけてくれた。

周りからしたら小さなことかもしれないが、あの時から私は心の中で彼女のことを――同じ年、あるいは年下の可能性もあったが――「お姉さま」と呼び、こっそり慕っていた。大人びた彼女が時に見せる子供っぽい笑顔が、好きだった。

「……伊東さん！ 伊東さん」

肩を激しく揺られ、我に返った。佐伯くんが必死の形相で私の顔を覗きこんでいる。私の頬を熱いモノがボロボロ流れ落ちていた。

「今ので中の奴らが気付いたみたいだ！ 周りのも集まってくるかもしれない。気を確かに持つんだ！」

「……ちよつとだけ待って！」

私が持っていた佐伯くんの鞆を竹刀を持つ方の肩にかけ、私の手を引き走り出そうとする彼を制止し、私は地面に転がる彼女のものらしき鞆を掴んだ。血で汚れていたが、手に付こうとどうでもよかった。

「ごめん、行こう」

涙を拭き、彼の目を見て言う。今は、感傷に浸る時じゃない。もうこれ以上佐伯くんに迷惑かけちゃ駄目だ……。

私達はこの地獄から逃れるため、門に向けて走り出した。

第六話 予感（前書き）

多くの方に読んでいただけて感謝しています。趣味で始めた小説ですが、少しでも皆さんに楽しんでもただけるよう向上心を持って勉強していきたいと思います。

なかなか大学から外に出れません。街に出るのはもうちょっとかかりそうです（^^；

第六話 予感

私達がこのキャンパスの中央通りに出た時、先程のパニック状態はだいぶ落ち着いていた。血溜まりがポツポツと点在するこの通りをこのまま真っ直ぐ進めば正門がある。しかしここから見る限り、私たちのいる位置から門の付近にかけて誰もいないようだ。

「なんだか、嫌な予感がする……」

思っていたことが自然と声に出てしまった。

「ああ……何だ、この静けさは」

やはり佐伯くんも同じように感じているようだ。事態が収束に向かっているのなら、武装した男たちが門前にバリケードを作り、救助に走り回っているはず。しかし、誰一人この大学のメイン通りに姿が確認できないのだ。

「とりあえず、行ってみようか」

私達は歩き出したが、胸中に膨れ上がる言い知れぬ不安に突き動かされ、やがて走り出した。

門が近付いてきた。それに従い、徐々に断片的な音が聞こえてくる。

——あああ——！

誰かの、叫び声？ おそらく門の外、商店が建ち並ぶ大通りから

だ。そして、救急車やパトカーのサイレンの音。一つや二つじゃない。幾つものサイレンが重なり、不協和音となってじんじんと耳にまわりついてくる。まるで、戦争のようだ。

「銃声が聞こえるぞ！」

佐伯くんが興奮した様子で呟く。確かに、パンパンと乾いた音が街の奥の方から聞こえる。私は息が切れ、足が軋むのを忘れて走り続けた。

門の外、商店が連なる大通りに出ると、信じられない光景が広がっていた。

横転した乗用車、立ち上る黒い煙。車が衝突したのだろうか、商店の窓ガラスは粉々に割れ、周囲に飛散している。コンクリートの地面に転がる鞆とその中身……そして人間の残骸。車のフロントガラスにも建物の壁にも、どこもかしこもべっとりと血がついていた。

大学内だけだと思っていた——いや、そう信じていたかった——地獄が外の世界を侵食していた。

しばらく啞然と立ち尽くしていた。佐伯くんも同様だった。風が地面に散らばる紙類を巻き上げる。

バサ……バサバサ……

夢じゃない。これは、現実に起きている。この大学の学生を襲ったあれは、新たな獲物を求めて外に出て行ったのだ。——では、あれは今どこに？ 疑問に思い、左右に広がる通りの奥の方に目を向ける。

「佐伯くん、あれ！」

門から道路を挟んで向かいにある学生御用達の食堂のガラス戸が血飛沫で真っ赤なのをぼんやりと見ていた佐伯くんは、私の言葉で目を見開いた。

「……奴らか！！」

いつもなら車が活発に行き来している大通り上に、のそりのそりところらに近付くあれの姿が見えた。煙でよく見えないが、目を凝らすと煙の奥でいくつもの影が蠢いているのが確認できる。もう一方も同じだ。囲まれている。

「だ、大学に戻ろう！」

咄嗟にそれが浮かんた。このまま街に飛び出すより、構造をよく把握している場所に逃げる方がいい。

「そうだな……部室だ。剣道部の部室に行こう」

さあ、と私を促し走り出す彼を追う。

剣道部や柔道部といった部活の活動する畳の大部屋や、トレーニング機器を備え、いくつかの部室が入った体育館がこのキャンパスの端にあった。バスケットボール部やバレーボール部などが活動する体育館とは別にある、少々古い建物だ。とはいえ空調が壊れていることに加え鬱蒼と茂る木々に囲まれているため虫が多いことから、利用する団体は少なく、大学の外の施設を使っているようだった。

確かにあそこには人はあまりいない。したがって生者を狙うあれも少ないはずだ。

生い茂る木々の間から体育館の緑の屋根が見えた。もうすぐだ。精神も身体も限界に近かった。早く休みたい。

「……止まって」

急に佐伯くんが立ち止まり、私の進路を塞いだ。

「ぎゃっ」

可愛さの欠片もない短い叫び声をあげ、彼に激突した。一見細身だが鍛え上げられがちりとしたとした彼の背中が私を身体を受け止める。

「どうしたの……？」

小声で佐伯くんに尋ねる。あれが出たのだろうか。佐伯くんは立てた人差し指を口元にあて、静かにするよう私に伝えた。

……あぁっ……あ、あっ……助けてくれええー……

若い男の声、生存者だ！しかし、辺りを見渡してもそれらしき姿は確認できない。と、私達の少し先、校舎に囲まれた細い道に、男子学生が飛び出してきた。

後ろを何度も振り返り、疲労して重くなった下半身を鞭打つように小走りで移動している。彼がこちらに気付いたようだ。

「あつ生きてる！ た、助けてっ助けてくれー！」

「声を出しちやいけない！」

佐伯くんが叫んだ。その時、こちらへ走り寄ってくる彼の背後、建物の影からあれが数体現れた。生きている男子学生と比較してみてもよくわかった。あれの肌は水死体のようにまっ白なのだ。

「あーよかったああ……あああっ！？」

私達のいる場所まであと数メートルのところで彼の足がもつれ、前から派手に転倒した。急いで立ち上がろうとするが、足を挫いたようだ、バランスを崩して膝をついてしまった。あれがもうすぐそこまで迫ってきている。

「……っ！」

佐伯くんが肩にかけた荷物を放り出し走り出す。そして竹刀を構え、地面に伏せる彼に覆い被さろうとするあれに鋭い突きを食らわせた。あれが仰け反り、後ろにいた一体を巻き添えにして後ろ向きに倒れる。突きを受けた一体は咽喉部がやられたらしい。息ができずに身をよじらせて悶えている。

また他の二体が近付いてきていた。あれは対象を佐伯くんに変えたようだ。不気味な呻き声を漏らしながら彼ににじり寄ってくる。

佐伯くんはすぐにそのうちの一体に肩から胸にかけて強烈な一撃をお見舞いしたが、先ほど巻き添えを食らって倒れたあれが這いつくばって彼の足を掴み、もう一体への反応が遅れてしまった。あれが彼のすぐ近くに迫ってきていた。間合いを取ろうとするが、足にまわりつくあれのせいでうまく動けない。

足下にせまるあれをどうにかしなくては。気が付くと私は駆け出していた。

第七話 休息（前書き）

多くの方が読んでくださり感謝、感謝です。そろそろ新しい登場人物を出していきたいなあと思う今日この頃。

第七話 休息

「くそっ、寄るな！」

佐伯くんは前方のあれの腹部を蹴りあげるが、足下に気をとられ威力は低く、あれはよろめいただけでまた前進を再開した。さっき一撃を食らったあれも近付いてきている。

佐伯くんが殺されてしまう！ ……そんなの、絶対にいやだ！

無我夢中で、恐怖を感じなかった。三体のあれに襲われる佐伯くんのすぐ側まで来ると、足下のあれの側頭部を——サッカーボールのように——勢いよく蹴りあげた。

ゴキッという嫌な音と感触。おそろおそろ見下ろすと、あれの首は変な方向に折れ曲がり、彼の足首を掴んでいた手は力なく地面に落ちた。

その瞬間を待っていたと言わんばかりに、佐伯くんの技が炸裂した。十秒も経たないうちに彼の竹刀が二体のあれの首をとらえ、地面には計四体の屍が転がった。

終わった……。私も彼も、生きている。男子生徒も無事だ。

「……助けてもらっちゃったな。ありがとう、伊東さん」

「そんな……私だけ助けてもらってばかりは申し訳ないもん」

彼にじっと目を見つめて真剣に礼を言われなんだか気恥ずかしく感じ、ぱっと顔を背けると、屈んだ男子学生の後ろ姿が目に入った。

「あっ、大丈夫ですか？」

「……………」

彼は何も答えず俯いている。あれだけ追いかけて回されていたのだ、心身共に疲れきっているのだろう。

「えっと、結構大きな声出しちゃったんで、あれがまた来るかもしれないんですね。近くに安全な場所があるので、一緒に……」

「近付いちゃだめだ！」

男子学生の肩に手を伸ばそうとした私を佐伯くんが力強く引き寄せたと同時だった。男子学生が勢いよく振り返り、飛びかかってきたのだ。

ズシャアアア……

数秒前まで私がいた丁度その場所に、男子学生が倒れこんだ。どうしたのか？ 何があったのだろうか？ 啞然と私は地面に伏せる男子学生を眺めた。

「彼はもうだめだ！ 行こう、伊東さん！」

佐伯くんは投げ捨ててあった剣道用具はそのままに、鞆だけ拾い上げて私の背を押した。私も慌てて血塗れの鞆を持ち直し、走り出す。

「なんで？ なんで？ あの人、さっきまで『助けて』って……」
「わからない！ ただ、彼は……」

彼は腕に噛まれた痕があった――。

私と佐伯くんは後ろを振り返ることなく走り続けた。

大きな音をたてて勢いよく扉が閉められた。窓から射し込む夕日の淡い光が薄暗い空間をぼんやり照らしている。

あれから私達は脇目もふらず走り続けた。予想通り体育館の付近には誰もおらず、扉を開けて中に入っても人の気配はなかった。一番安心したのは、今や大学内のどこにいても目に飛び込んでくる死体や血が見られないことだ。ここだけいつもの時間が流れている。そう感じた。

私は部屋に入った途端膝の力が抜け、よく磨かれツヤツヤ光る木の床になだれ込むように倒れた。

「大丈夫か!？」

佐伯くんが驚いて私の身体を支える。背中に回された腕が温かく、逞しく、心地よい。

「平気、平気……。だけどやっぱり、疲れちゃった。ごめんね、私だけ甘えて……」

そうだ。佐伯くんと出会ってから今までの数時間、私が恐怖や不安を口にして感情をぶつけてきたのに対し、彼は感情を抑制して冷静に状況に対応している。私は迷惑をかけてばかりだ。

「佐伯くんがいなかったら、私今頃死んでただろうな……」

私は重たい身体を起こし、彼に向き合う。今初めて佐伯くんを見た気がした。

男性にしてはほんの少し長めの真っ直ぐな黒髪に、切れ長な奥二重の涼しげな目許。すっと通った鼻筋。唇は固く結ばれて意思の強さを感じさせる。少し強面な表情からは、生真面目な性格が滲み出ている。若い子達に人気なアイドルのような華やかさはないが、日本人的で端正な顔立ちだ。

じーっと顔を見つめる私の視線が恥ずかしかったのか彼は目を逸らした。

「俺も伊東さんと出会わなかったら死んでた。あの時俺、階段下りて様子見ようとしてたからな」

そう言うと佐伯くんは苦々しい表情を見せた。そして私に向き直ると柔らかく微笑んだ。

「どっちがどれだけ助けたとか考えるな。こんな非常事態だ、お互い生き残るために自分に出来ることをするまでだ」

——いい人。佐伯くんの言い方はぶっきらぼうで時々突き放すような冷たい印象を与えるが、言葉自体や表情はとても温かい。少し不器用だが、誠実なこの人ならこの先何があっても信じられる気がする。

「これからどうしようか……」

私は佐伯くんに尋ねた。彼は少し考え、口を開いた。

「……日も落ちてきたし、今外に出るのは危険だ。すぐに救助が来るかはわからないが、とりあえず朝まで待つべきだろうな」

確かに、今無闇に動き回るのは危ない。私は彼の言葉に頷いた。

「今すべきことは……情報収集だな。一体何が起きているのか、把握する必要がある」

佐伯くんはそう言うと言った。靴の中から丈夫なケースに入ったノートパソコンを取り出した。持った時に随分と大きくて重い靴だと思ったが、そういうことだったのか。彼はそのままパソコンを起動させようと電源に指を伸ばしたが、直前で止めた。

「その前に腹ごしらえをしようか」

彼は靴からカロリーメイトなどの栄養食品を出すと、私に差し出した。私は礼を言うとともに包装を破り、かじりつく。恐怖で空腹を忘れていた。

「本当に非常食として食べる時が来るとはな」

佐伯くんが呟いた。

この束の間の休息が過ぎ去った時、私達はどうなってしまうのだろうか？ 今から知る現実に対し希望を抱く反面、抑えがたい胸騒ぎを感じた。

第八話 現実（前書き）

今回は新しい登場人物を出しました！ これから展開はダークな中にも活気が出せるといいなあーと思います。

第八話 現実

私達はパソコンの画面の前で愕然とした。インターネットに接続しトップページの最新ニュース一覧に並ぶのは衝撃的な見出しの数々。

「都内各地で大規模な暴動発生――死傷者多数。人が人を食べる――精神病の一種か？ 首都圏全域及び日本国内各地で同現象確認……アメリカ、中国、ヨーロッパなど世界各地で……」

「う、嘘……世界中で同じことが起きてるっていうの？」

佐伯くんが読み上げる記事には、にわかには信じがたい事実がこれでもかという程書かれていた。ネット上の記事を読みふける佐伯くんの動作が止まった。そして彼の目が私をまっすぐとらえる。

「伊東さん、……そういえばその腕はどうしたんだ？」

「え？ ……ああ、これはね、襲われてた男子学生の血が……」

あの時の光景が脳内で蘇る。痛みで顔をくしゃくしゃにした男子学生。近くにいたのに助けられなかった。教授もだ。いつも寝ている授業だったが私はあの年老いた教授が好きだった。エレベーターで一緒になると「今日は暑いね」とか、こんな私にいつも話しかけてくれたのだ。

「……わかった、ありがとう。こうして無事でいるんだから杞憂だったな」

私はよほど悲痛な顔をしていたのだろう。彼は申し訳なさそうにすると話を続けた。

「噛まれるなどして、唾液などやつらの体液に含まれる何らかが体内に入り脳に達すると、噛まれた人間もやつらと同じようになるそうだ。……一度死んでからな」

「死んで……生き返る？」

そんな馬鹿な。それじゃあまるで……

「やつらは映画にちなんでゾンビと呼ばれているようだ。もともと人間としての心が死ぬだけで、単純な思考をするのに必要な脳の一部と身体は死なない。むしろリミッターが外れて筋力は格段に強くなる。あと脳がほとんど機能してないから動きも緩慢。何故死人のような肌をしているのかは不明だそうだが」

……ゾンビ！ 本当に現実に現れるなんて誰が想像しただろう。ゾンビが人を襲って内臓を引きずり出しぐちゃぐちゃにする映画だつて、心の底では存在しないとわかっていたから楽しめた。いつかテレビで放映されていたのを見たときは、まだ小さかった誠はすっかり怯えていたが。

……日本中で、起きている？ 誠。お母さんは無事なのだろうか？ 急激にすーっと血の気が引いていくのを感じた。

私は上着のポケットから携帯電話を取り出した。弟が修学旅行のお土産で買ってくれた、鹿の全身をかたどった妙にリアルな木彫りのキーホルダーがついた携帯。震える手で着信履歴から家の番号を探し出す。――発信。

……トウルルルル……トウルルルル

耳に膜を張ったようにコール音がこもって聞こえる。早く、早く。コール音がいつまでも続くように感じたその時、プツツという音とともに聞こえる音がクリアになった。

『こちらはNTTです。ただいま回線が非常に込み合っております。暫く経ってからおかけ直してください』

冷たい無機質な女の人の声。家族の時だけに聞かせる母親の面倒くさそうだけれども温か味のある声とはかけ離れすぎていた。電話は、つながらない。次にどうするべきかは心の中でもう決まっていた。

「私、帰らなきゃ……」

居ても立ってもいられなかった。あれが、ゾンビが二人を襲うところを想像したら。心臓が爆発しそうだ。ドアノブに手をかける私を佐伯くんが引き止める。

「気持ちわかる。でも今は動くべきじゃない」

「だって！　こうしてる間も弟が、お母さんが襲われてるかもしれないのに！」

手を押し退けて無理矢理出ていこうとする私の肩を彼が強く掴み、正面に向き合わせる。

「痛っ……」

「冷静になれ。こんな暗闇の中家族の元に向かったって無駄だ。一時間もしないうちにやつらの餌食だろう。それに……自分一人で行

ったところで何ができる？ 今家族のためにできることは、安全な場所で生き延びていることを祈るだけじゃないのか？」

頭をガンと強く打ちつけられたようだった。彼の言うことはわかってる。わかってるけど。無力感に苛まれ涙が込み上げる。と、私の両肩を掴む彼の手が震えているのに気付いた。

「……すまない」

佐伯くんがそっと手を離した。その顔は悲痛で、とても苦しそうだった。

「とにかく、夜は危険だ。出来る限りの準備はして明日の朝出発しよう」

何かを堪えているかのような声で彼が言う。佐伯くんだって家族がいるのだ、一刻も早く帰りたいはずだ。しかし彼は理性を失わず、安全かつ少しでも確実な方法をとろうとしている。なのに私は……

「ごめっ……ごめんなさい。また私、何も考えずに感情に任せて……」

「……………」

佐伯くんは何も言わず、私の頭にぼんとその大きな手を置いた。優しさが心に染みて、頬をつうつと涙が伝う。それからしばらくの間私も佐伯くんも何も喋ることなく、ゆっくりと時間だけ過ぎた。

壁に背を預け何も考えずにぼんやりしていると、彼が話を切り出した。

「伊東さんは、どこに住んでいるんだ？」

「……西東京市の都営住宅だよ」

「そうか、結構遠いな……」

ここではつとした。私達は途中で自転車など移動手段が見つからない限り、家まで歩いて向かわなければならぬ。公共交通機関が機能している可能性は低いからだ。だとすれば……家が近くない限り、佐伯さんと別れて徒歩で行かなければならぬ。佐伯くんの家はどこにあるのだろうか。聞くのが怖い。

「……あのっ」

「黙って」

驚いて口をつぐむと、扉の向こうから廊下を歩く音がかすかに聞こえてくる。

「……！ ゾンビ？」

「いや、違うと思う。やつらはあんな俊敏な動きはできない。……まあどちらにしても見逃すわけにはいかないな」

佐伯くんは竹刀を手に取り、扉に向かう。私も心配になり着いていくことにした。

ギィッ……

万が一あれだった時のことを考え、慎重に扉を開く。そっと廊下に出ると、大きめのスポーツバッグを担いで出口へ向かう男子学生の姿が目に入った。

「待て！」

佐伯くんが彼を呼び止める。リズムカルに歩いていた男子学生はピタッと動きを止め、ゆっくりと振り返った。逆立った色素の薄い金髪に――いや銀髪というのだろうか――日に焼けた褐色の肌。シヤツは胸元を大きくはだけ、シルバーのアクセサリーが鈍く光っている。大抵日本人がすると無理のある格好だが、彫りの深い顔立ちのこの男にはよく似合っていた。

――生存者だ。全身にぴんと張りつめていた緊張が抜け、安堵感を覚えた。見ず知らずの人の存在がこれほどまでに大きいだなんて。

「ん？ 誰だあんたら」

怪訝そうな顔をして彼が尋ねる。ギョロリとつり上がった目はどこか危なっかしい光をたたえ、まるで獲物を狙う猛獣のようだ。

「……俺は佐伯義嵩、こっちは伊東臯月さん。見ての通りこの学生だ。君はここで何をしていた？」

「何って、俺は地下のトレーニングルームでいつものように一人筋トレしてたんだがよ。まあ人気ないしな、ここ。変わり者に見られて仕方ないか」

彼は肩を竦めてニヤリと笑うと言葉を続けた。

「あ、自分は名乗ってなかったな。俺は須藤……須藤英雄だ。もう会うことはないと思うが一応よろしく言うておこう。……で、佐伯さんだっけ？ あんたらはこんなとこで何してるんだ。逢い引きか？」

軽い調子で話すこの須藤と名乗る男子生徒は、私達を見て何か勘違いをしているようだ。私はそのダイレクトな物言いに何となく頬がカーッと熱くなり、佐伯くんは半ば呆れたように眉間に皺を寄せている。

「君は何も知らないようだな」

「……あ？」

本当に今何が起きているかわかっていないらしい。須藤くんは片眉を上げ、何が言いたいんだ？　と言いたげな顔をしている。

「来てくれ。今何が起きているか教えるから」

「あ？　俺これからバイトだから無理」

「だめだよ！　本当に危ないんだから」

「……ま、話聞いただけならいいけどよ」

この須藤くんからはまだ私たちがいた日常が感じられた。……それもうすぐ失われることになるのだろうけども。私達は訝しがる彼をとりあえずさっきの部屋に連れて行くことにした。

第九話 計画（前書き）

読んでくださっている皆様、本当にありがとうございます！ 一人でもアクセスしてくださる方がいると思うとほんと頑張ろうと思えます。

今回からやっと動き出したという感じです！ 次話で大学を舞台としたお話は終わりになると思います。

第九話 計画

「……なるほどな。話はわかったぜ」

真剣な表情で画面を凝視していた須藤くんは私と佐伯くんに視線を移した。

「だがよ。ニュースで報道されてるにしてもだ……こんな作りものみてえな話、やっぱり実際に目に見してみなきゃ納得できなえな。何せバイトの責任がある」

「まあそれも当然か。俺も同じだったからな」

そう言う佐伯くんは慣れた手つきで何やら検索し始めた。画面には大手動画投稿サイトのトップページが表示された。注目の動画一覧にある動画を適当に一つ選択する。

「マジかよ……」

須藤くんが目を大きく見開き呟いた。そこには、まさに私達が今まで目にしてきた惨状が映し出されていた。二階からズームで撮られたものらしい、道路であれが寄って集って人を貪り食う様を撮影した動画だ。撮影者は狼狽した様子で緊張した息遣いが聞こえてくる。動画はブレが激しく画質もよくはなかったが再生回数は投稿してから一日も経っていないにも関わらず100万回を超えようとしていた。

——映画か何かの撮影ですか？

——この世の終わりだ

——何これ、ゾンビ!?

コメント欄は驚き、疑い、絶望する人々で溢れかえっている。

「……ん？ おいつ、その肩はどうした！？」

驚いた声で須藤君が私に問いかけた。彼の視線の先は、返り血を浴びて今はどす黒く変色しパリパリになったワンピースの肩の部分。

「目の前で噛み殺された人の血が……ついたの」

「……………」

「これでわかったか？ 本当は直接見てもらうのがいいんだが、俺達は疲れている……。かと言って君一人に見に行かせて危険に晒すのも嫌なんだ。悪いが朝まで待ってくれ」

「……ああ」

須藤くんは納得したようだ。その後佐伯くんがゾンビの特徴を話しはじめた。あれの外見上の特徴、習性などだ。須藤くんは黙って聞いていた。

「君は何か武術の心得はあるのか？」

「ガキの頃空手をちよつとばかりかじったが……今はボクシング一筋だな。実戦も結構積んでるぜ？」

そう言うと彼はニヤツと笑った。須藤くんは真実を知っても余裕のある態度で、うろたえることもなく、家族の心配もしない。まだ実感がわかないのか、それとも強がって振る舞っているのか。おそらくどちらだろう。

「須藤くんも佐伯くんも家族はどうしてるの？ 私にはお母さんと弟が一人いるんだけど、こうなった時には二人とも家にいたと思うんだ……」

少しの沈黙の後、佐伯くんが答えた。

「俺は両親は仕事で海外にいて、一人暮らしなんだ。あと姉が一人いるが、数年前両親の反対を押しきって結婚してな、勘当されて出ていったきり……だ。後で連絡を取ろうと思うんだが」

「そうなんだ……」

この状況下、海外にいるご両親に会いに行くのは難しいだろう。無事を祈るしかないというこの状況を恨めしく思っているに違いない。彼は感情をあまり外には出さないけど、すごく辛いだろうな……。

でも、行かなければいけないところがないのなら。

……私は一体何を考えているのだろう。彼に同情する反面、少し安心してしまった自分がいた。最悪だ。

「あ、須藤くんは？」

須藤くんがまだ何も話していないのに気付き、汚い考えを頭から追い出すように彼に話をふる。須藤くんが話し始めるまでの少しの間、その目が一瞬冷たい光を宿したのを私は見逃さなかった。

「ま、大丈夫なんじゃねーの？」

大きく伸びをしながらおどけた調子で答える。そしてふーっと溜

め息をつくと話が続けた。

「あいつらなら上手くどうにかやってるさ。ただどうだろうと俺が知ったこっちゃねえし、連絡しようなんて気も起きねえ」

私も佐伯くんも口ごもってしまった。どうやら複雑な家庭環境のようだ。出会ったばかりの人に込み入ったことを詳しく聞くのも悪い気がして、私は別の質問をした。

「……お家は都内なの？」

「ああ。結構近いぜ、中野区だ。俺は別のところに一人で住んでるけどな」

「で、どうするんだ？　これから……」

佐伯くんが須藤くんに尋ねる。須藤くんは少し考え、わかんねえ、と答えた。佐伯くんは、どうするのだろう。聞きたいような、聞きたくないような。受験の合格発表よりも格段に強い緊張が私を襲う。そして彼が口を開いた。

「俺はこれから伊東さんと行動するつもりだ。日本国内至る所でこんなことが起きているのなら、救助が来る可能性は低い。何もせずにじっとしていたら飢え死にするだけだからな」

「……えっ？」

びっくりして聞き返してしまった。会って数時間しか経っていないよくわからない人間に付き合ってくれるというのか。そうであればいいなと私も望んでいたことだが、実際にそうなるととても信じ

られなかった。

「家族の無事を確認して、皆で安全な場所に行こう。それまでに何かいい考えが見つかるはずだ」

「ありがとう！……本当に！」

「じゃ、俺も一緒に行かせてもらうぜ。どうせ行くところねーしな」

その様子を眺めていた須藤くんも彼に続く。嬉しくて泣きだしてしまいそうだ。

「須藤くんもいいの？……ありがとう！……あ、私の家は西東京市だから、途中で須藤くんの家に寄れるよ……？」

提案すべきか迷ったがおそろる言ってみた。ちらりと彼の様子を伺うと、困惑しているような微妙な表情で何か考えているようだった。

「んー……本当に俺のことは気にしないでいいんだが。まあ途中で通りかかることがあったらちょっと寄ってくかな」

よし、なんとかして須藤くんを家に連れていこう。どんなことがあったって、家族は家族だもの。私は心に決めた。

「あ、二人とも、住んでる部屋には寄らなくていいの？」

「俺は大丈夫だ。寮暮らしなんだが……辺鄙へんぴな場所にあるし、たいしたもの置いてねーからな」

須藤くんがどうでもよさげに答えた。……寮はおそらく危険だろう。土曜だからほとんどの学生が部屋にいたに違いない。

「じゃあ俺のアパートに寄ってくれないか」

少しの間の後、意を決したように佐伯くんが言った。

「ここから自転車で三十分くらいで着くところにあるんだ。徒歩だとやつらの心配もあるし、一、二時間……てところか。非常用の食料もあるし、個人的に剣の練習に使っている木刀もある」

「私は賛成。休憩もできるし。須藤くんは？」

「俺は何でも構わないぜ」

これからの方向性が決まった。大学を出て佐伯くんの家に向かい、食料や武器を調達。そこで休憩の後は――どうにかして――須藤くんの家を経由して、私の家に行く。

きっと危険な旅になるだろう。二人を付き合わせてしまうのは申し訳ない。その道程で何か有力な情報が手に入ればよいのだが。

どうか、お母さん、誠、無事でいて……。家族のことを考えると、また涙が込み上げてきた。

第十話 出発（前書き）

次話でやっと外に出れます！ 長かった……。登場人物も段々増えてくると思います。

今まではほぼ毎日のように更新することができましたが、これからは色々状況が変わってくるのでスムーズに筆が進むか私自身も少し不安ですが、頑張りますのでよろしくお願いします。

第十話 出発

ゾンビが現れてからすっかり時間を忘れていたが、腕時計を見るともう十時になるところだった。窓の外は真っ暗で、夜の闇が部屋に溢れだしてきそうだ。耳を澄ますと、あれの呻き声が聞こえてくる気がする。

三人で今後のことを話し合った後、私達は体育館の中を探索した。何か使えるものを探すためだ。二時間ほど探し回って見つかったのは倉庫にあった鉄パイプ一本と、鍵の空いた部屋に蓄えてあった菓子類、そしてビニール一杯につめた空き缶くらいだった。

鉄パイプは須藤くんが武器として使うことになり、武器のない私はゾンビを欺く音を鳴らすための空き缶を持ち運ぶことになった。

そして今、私達は見つけてきたお菓子をつまんでいる。盗み同然の行為だが、こんな状況だ。仮に許されなかったとしても罰金を払ったり牢屋に入る方がずっとましだ。何せ私達は現在命が危ぶまれているのだから。命は何にも替えられない。

私と佐伯くんはさっきも食べたのであまり手が進まなかったが、須藤くんはトレーニングをする前から何も口にしていなかったらしい。物凄い勢いでポテトチップスや煎餅を平らげていった。

「悪いな、俺だけこんなに食べちゃって。腹が減ってどうしようもねえんだ。何せトレーニング後はいつも特盛の牛丼食いに行くんだぜ。非常時とはいえ堪えられねーよ」

さっきから須藤くんしか話してない気がする……。佐伯くんはじ

つと一点を見て何か考えこんでいるし、私は時々話しかけてくる須藤くんに曖昧な相槌しか返すことができない状態だった。そんな私達を見かねたのか、須藤くんは軽く溜め息をついた。

「佐伯も伊東も、もう寝た方がいい。俺は直接見たわけじゃねえから想像もつかないが、酷い場面をたくさん見てきたんだろう。今無理して起きてても悪い考えしか浮かばねえぞ」

「そうだな……」

「うん……」

須藤くんが口にしたのは予想外に優しい言葉だった。外見があれだしちょっと怖い人だと思っていたけれど、彼なりに気遣ってくれているようだ。

「でも三人一遍に寝るのは危険だね？」

先程から幻聴かどうか分からないが、さっきからずっとあれの呻き声がひっきりなしに聞こえてくるのだ。無防備に寝てなんかいられない。

「そうだな、誰か一人見張りを置こう」

私も須藤くんも佐伯くんの提案に賛成し、須藤くん、佐伯くん、私の順で三時間おきに見張りを担当することになった。

「仮眠用の毛布が確かここに……あった」

佐伯くんがロッカーから毛布を二枚取り出して一枚私にくれた。私は礼を言っただけとすると、冷たい床に横になる。やはり心身共に限界だったようだ。段々と意識が遠退いていく。

このまま、何事もなかったかのように平穏な日々が戻ってくればいいのに……。そんなことをぼんやりと考えながら意識が途切れた。身体をゆさゆさと揺らす振動で目が醒めた。

「……伊東さん。ああ、起きたか。起こすのが可哀想になってきたところだったよ」

ずっしりと重い上半身を無理矢理起こし声ができる方を見ると、見知らぬ青年がいた。心配そうな顔でこちらを見ている。うーん、結構カッコイイかも……。？

「あれ、……佐伯くん？」

段々と状況を把握してきた。そうだ、私は……。夢心地な気分にとす黒いものが入り込んでくる。しかし、昨日の寝る前よりは大幅落ち着いていた。

「見張りお疲れ様。後は私に任せて」

力なく微笑み扉に向かう。その時視界に入ってきたのは、彼女——お姉さま——の鞆。はっと思い出し、血が染み付いた鞆を掴んで廊下に出た。佐伯くんは申し訳なさそうによろしく、と私に言う。床についたようだ。

時計を見るともう5時だった。佐伯くんは一時間長く見張りをしてくれていたみたいだ。彼の優しさをありがたく思う反面、自分の不甲斐なさに腹がたった。

よし、あと二時間しっかり見張ろう。少しの異変も見逃さないんだから！

私は拳に力を入れ意気込み、出入り口の様子を見に仄暗い廊下を歩き出した。

この体育館は出入り口が正面の一つしかない。二階建てのそんなに大きくない建物で、各階に幾つかの大部屋と小さな部室が並んでいるシンプルな構造だ。

私が今いるのは一階。この階は入り口から入ってすぐ二つの廊下に分かれ、それぞれの廊下の両側に部室が並び、突き当たりに畳の大部屋がある。寝泊まりしているのは入り口に近い位置にある剣道部部室だ。

というわけですぐに出入り口に着いた。両開きの扉はガラスでできており外の様子が透けて見える。もう日が出てきておりだいぶ明るい。

通りの奥、校舎が密集したところに黒い影が蠢いているのが見えた。ゾンビは音には敏感だが視力は悪いので向こうが私の存在に気付くことはないだろう。

私はこの小さなロビーに幾つか並ぶ錆び付いたベンチの一つに腰を掛けた。

昨日は色々あった。想像の産物であったはずのゾンビに似た化け物が現れ、多くの人が殺された。それも食い殺されるという、日常の生活では考えられない殺し方で。

きっと昨日一日の間に仲のよい友達の何人かは死んでしまっているだろう。正直、未だに信じられない。だって、数日前まで一緒に楽しく笑いあっていたのだから。何の兆候もなかった。あれは本当に突然現れたのだ。

一晩寝てあの惨劇の現実感が薄れてしまったようだ。全て悪い夢だったような気がしてきた。

私は部屋から一緒に持ってきた血塗れの鞆を眺めた。何故これを拾ってきたのか、それは至って簡単な理由だった。彼女の名前が知りたかったのだ。

私はそつと鞆に触れる。持ち主である彼女の赤黒い血がついた、お洒落なピンクのエナメルバッグ。パチッと留め具を外すと、綺麗に整頓された中身が見えた。

インデックスできちんと科目ごとにプリントが分けられたファイル。ずっしりと重い大きめの化粧ポーチ。色とりどりの付箋がたくさん貼られた使い古された憲法、刑法の教科書。彼女は法学部だったんだな……。

私は学生手帳を取り出した。パラパラと捲り、学生情報の記された最後のページを見る。予想通り、几帳面な彼女は欄をしっかりと埋めていた。

法学部四年 植村 智子……

「うえむら、ともこ、さん。やっぱりお姉さまだったんだあ……」

私はぼそつと独り言をこぼし、今は亡き憧れの植村さんを想った。頬をつうつと涙が伝う。

これは、現実だ。そしてこれからも私が好きだった人達が死んでいく。覚悟はしているが、きつと私はその時取り乱して泣いてしまおうだろう。でも、もう外の世界に出る決心はついている。絶対に生きてもう一度家族に会うんだ。

ガラスの扉越しに外を様子をじっと見続け、気がつけば日が上っていた。出発の朝がきた。

番外編 佐伯義崇（前書き）

休日中心の更新と書いていましたが、土日の方が時間がとれないことに気づきました；

そして今回は今までの流れと関係のない番外編です。十話でぱっと考え事をしていた佐伯目線のお話です。ゾンビ出てきませんしつまらないかもしれません。

剣道に関する描写がたくさん出てくるので、これから修正をたくさん入れる可能性大です（^^；）

番外編 佐伯義崇

見慣れた剣道部の部室が全く別の空間に感じられる。それは、ここにいるのがいつもの部員たちではないからか。それとも、この非現実的な状況がそう見せているのか。

俺は極度の緊張で疲労しきった身体を壁にもたれかけ、立てた片膝の上で腕を組み、目の前の二人を観察していた。

「湿気てやがるぜ……。おい、これもしかして賞味期限切れてないだろうな？」

そう言って眉間に皺を寄せながら菓子箱の裏を覗くのはさつき出会ったばかりの須藤英雄という男子学生。派手な容貌をしており軽いノリでよく喋る、普段あまりつるむことのないタイプだ。根は真面目なようで悪い人間ではなさそうだが、よくわからないところが多く、信用できるかどうかはまだ判断できない。

「大丈夫だよ、持ってくる時確認したから」

困った笑顔で須藤に応じるのは同じく今日出会ったばかりの伊東皐月さん。パツチリとした印象深い目をした娘だ。表情や動作が可愛らしい小動物のようで、彼女の挙動を見ると、このような状況にあるにも関わらずどうも微笑ましく思えてしまう。

彼女は恐ろしい思いをたくさんしたにも関わらず、人を気遣う気持ちは忘れない。そんな性格を見込んで、俺は彼女に付いていくことを決めたのだ。

これから徒歩で伊東さんの家に向かう。長く険しい旅になるだろう。こんなこと彼女の前ではとても言えないが、家族が生きているかどうかは正直疑問だ。何せよ世界中がこの大学のような状況なのだ。自分の大切な人達が全員生き残っている確率は至極低いだろう。俺の海外の両親も、出ていった姉も、今頃食い殺されているかもしれない。

無論そんなことはあってほしくない。しかし……どうしようもないのだ。家族が生きているかどうか。この考え始めたら止むことのない負の思考を捨ててしまうことが今必要なことだ、と俺は考えた。とにかく今は生き延びて、家族へとつながる僅かなチャンスを見つけてだすことが最善であるはずだ。

……世界は一体どうなってしまったのか。ここに来るまでそんなこと考える余裕もなかったし、考えたところで所詮は学生の憶測――答えが見つかる訳がないことは十分わかっているが、真実への手掛かりは俺の周りで起きた事象にも隠されているかもしれない。俺は重く鈍った頭で記憶の糸を手繰り寄せ始めた。

――そうだ、この異常な騒動が起きたとき、俺は……

目の前の相手の姿をじっと見据える。相手の剣先は小刻みに揺れ、俺の面に一本叩きこもうと機会を伺っていた。触れる剣先を軽くいなし、すっと軽く息を吸う。その時、相手の気が大きく乱れ、迷いが見えた。……今だ。

大きく一步を踏み出すと、予想通り相手は前に伸ばした竹刀を引きながら身を後退させる素振りを見せる。すかさず俺は相手の竹刀に打ち込み、そのまま押し出すように掛け声と共に面にもう一打を

放った。

「……一本！」

練習が終わり、汗まみれの剣道部員たちは続々と部室へ向かっていった。ロッカーの前、中に熱がこもった防具を外してタオルで火照った手足を撫で付ける。

「本当に流石だよ、山城さんからまた一本取るなんてさ。あの人五段だぜ？」

面を布で磨きながら話しかけてきたのは、同学年の友人、河辺だ。

「山城さんと一戦交える時は本当に集中力を使うんだ。ほんの一瞬の間の取り方で勝負が決まる。今度はわからないさ」

「……とはいってもお前絶対五段以上の実力あるよな。何で受審条件なんてあるのかねえ」

剣道の段位の取得審査を受けるには、今持っている段位に合格した時から決められた一定の年数を経ていることが条件だ。俺の場合次の五段の審査を受けるにはあと二年修行を積む必要がある。

「段位は単なる実力を測る物差しじゃあない。経験だとか、成熟した精神の強さだとか人間としてのあり方を問われるんだ」

「へーい、へい。やっぱ大先生の言うことは違うねえ。中高帰宅部、大学デビューで剣道始めた俺は何もわかっていませんぜ」

おどけた口調で河辺が言った。小学校に上がる前から竹刀を握ってきた俺と違い、大学から剣道を始めた河辺は、休憩中こそこんな

調子だが、いざ練習が始まると別人のような真っ直ぐな目で真剣に竹刀を振るっているのを俺は知っている。

「佐伯」

着替え終わり、道具を担いで河辺と廊下に出た俺を師範が呼んだ。

「おっ、師範のあの顔はいい知らせかもよー。俺、今日バイトだから先急ぐぜ！ またな」

「ああ」

河辺と別れ師範と向き合う。この人は月に一回この剣道部に指導に来ている錬士の称号を持つ大先生だ。嘗て数々の大きな大会で名を轟かせたという師範の顔は深い皺が刻まれ威厳があり、身体中から常に隙を見せない張りつめた気を放っている。もし今俺がここで先生に切りかかったとしてもそれより速く切り返されてしまうだろう。

「何のご用ですか、師範」

「先月の関東学生剣道選手権大会、首位で全国大会出場を決めたそうだな」

五月に開催された学生の地区大会を俺は一位で通過していた。そして七月には全国大会が控えている。

「……よくやったな」

「ありがとうございます」

初めて聞く師範からの誉め言葉だった。師範の表情はいつもの厳めしさが抜けていなかったが、目は優しく細められていた。

「お前なら卒業までに全日本剣道選手権大会でいい成績を残せるかもしれない」

課題を終わらせるためPＣルームへ向かう俺の頭の中を師範の言葉が何度も木霊する。全日本剣道選手権大会。今俺が目指せる一番大きな大会であり、幼少の頃からずっと憧れてきた場だ。足早に目的の校舎を目指しながら自然と口許が緩むのを感じた。

門の付近まで来たとき、外の大通りをパトカーが数台連なって走り去っていくのが目に入った。パトカーのサイレンに混じって救急車のそれも聞き取ることが出来る。――何か近くで事故でもあったのだろうか。しかし野次馬根性が沸くことはなく、俺は歩みを止めることはしなかった。

思えば、あれは異変の始まりだったのかもしれない。しかしあの時の俺はそんなことに気を止める神経の細かさなど持ち合わせていなかった。まさか刻一刻と世界が破滅に向かっていているだなんて考えもつかなかった。

目的の六号館に着き、誰もいない教室が並ぶ静かな廊下を渡り、PＣルームの厚い金属の扉を開いた。

――それから間もなく外の騒がしさに気付き、彼女と出会ったわけだが。

再び意識が今いる剣道部室に戻る。今日一日を思い返してもやはり何の手がかりもつかめなかった。唯一わかることといえば、俺が

竹刀を振るっていた時には既に悪夢は始まっていたということくらいか。

いや、悪夢——夢なんかじゃない。俺は、人を殺してしまった。人間性を失っていても、化け物のようでも、あれは人だった。幼い頃から毎日のように厳しい練習を積んできた——全ては優れた精神と技術を併せ持つ理想の剣道を完成させるため。それなのに。その剣で人を殺めてしまった。

「佐伯も伊東も、もう寝た方がいい。俺は直接見たわけじゃねえから想像もつかないが、酷い場面をたくさん見てきたんだろう。今無理して起きてても悪い考えしか浮かばねえぞ」

須藤が言った。その通りだ。俺は曖昧な返事を返し、現実へと戻っていった……。

もう日常に戻ることはないだろう。俺の直感がそう告げている。俺の剣道は、もしかしたらこの運命のためにあったのかもしれない。それならば、俺はこの地獄を切り抜けるために剣を振ろう。もう後悔はしない。生き延びる。生き延びてみせる。俺は密かに思いを固めた。

登場人物紹介 1

■第一章の登場人物

・伊東 皐月いとう かくつき

> i 2 9 4 5 2 — 3 5 7 0 <

大学二年生 1 5 3 ?

物語のヒロイン。母子家庭で弟が一人いる。
性格は優しくおっとりしている。

・佐伯 義崇さへき よしたか

> i 3 1 6 5 2 — 3 5 7 0 <

大学三年生 1 8 1 ?

騒動の最中に会った男子学生。剣道部。
くそがつくほど真面目でお堅い。両親は海外にいる。

・須藤 英雄すどう ひでお

> i 2 9 4 5 4 — 3 5 7 0 <

大学二年生 1 7 6 ?

ボクシングに打ち込む青年。複雑な家庭事情を抱える。
軽いノリで斜に構えた態度をとることしばしば。

第十一話 覚悟（前書き）

私の小説を読んでくださりありがとうございます。

今回からようやく街に舞台がかわりました！ 新しい登場人物も続々増やしていきたいと思います。ただ人数が増える分鬱展開注意です（^^;）

第十一話 覚悟

私はそつと剣道部室の扉を開けた。廊下から漏れでた淡い光が薄暗い室内を照らし出す。佐伯くんはそれに気付いたのか、辛そうに額に手を当てながら上半身を起こした。

「……朝、か」

「うん……。おはよう」

「おはよう」

挨拶を交わしあい、佐伯くんは大きく伸びをすると立ち上がった。佐伯くんから少し離れたところにいた須藤くんも目が覚めたようだ。

「皆起きたな」

「おう」

「……お菓子ちょっとしか残ってないけど、食べていいっか」

私達は昨日の残りのチョコレートやクッキーを朝食にした。元々大した量ではなかったので全て食べきってしまった、持って行く分はない。途中で調達しながら進む必要がある。危険は増すが逃げる際荷物にならないので、それはそれでいいのかもしれない。

昨日もう既に用意しておいていた荷物は中身を最小限に抑えている。私が持つことになっている須藤くんのスポーツバッグには重く感じない程度に空き缶が詰め込まれており、佐伯くんは自分の鞆にパソコンを入れて持ち運ぶことになった。武器は佐伯くんの竹刀と須藤くんの鉄パイプ。出来れば空き缶であれを欺きながら戦うことなく移動したいものだが。

荷物を手にし立ち上がったその時、須藤くんが口を開いた。

「で、俺はこの鉄パイプでそのゾンビとやらと戦うと?」

「そうだ。いくらボクシングの腕前が優れていたって、一撃でも当たったら――噛まれたら終わりなんだ。一発もパンチを食らわない試合なんてないだろう?」

「ま、そうだけどよ。俺が言いたいのは……そのゾンビをこれで撲殺するのかってことだ」

佐伯くんの瞳の奥が揺らいた。少し押し黙ってしまったが、やがてはつきりとした口調で言った。

「そうだ。躊躇ったら終わりだ。俺達が殺られる」

須藤くんはやはり覚悟が決まっていないうだ。まあ当然だ。私は既に一体殺してはいるが、次に何の戸惑いもなくあれの息の根を止められるかと聞かれたら自信はない。佐伯くんだって色々悩んだ上の決断だ。武器を持つ二人にだけ任せるのは心苦しいが、確かにこの先あの化け物を相手に戦うことは避けられないだろう。迷いが悪いことを引き起こさなければいいのだが。

「わかった。じゃあ遠慮なく殺るぜ?」

「ああ、よろしく頼む」

そして私達三人は、部室の扉を開いた。

静まり返った廊下に三人の足跡が響く。誰も一言も喋らない。出入り口のあるロビーに出ると、先頭を歩いていた佐伯くんが私と須藤くんの方を振り返った。

「……行くぞ」

「うん」

「おう」

体育館の硝子の扉が佐伯くんの手で開かれた。どうやら周囲にゾンビはいないようだ。目を凝らして通りの向こう、校舎が集まっている辺りを見渡しても、姿はない。

「もう人がいないと知って街へ出ていったのかな」

「そうかもしれない。だが油断は禁物だ」

私達は足音をたてないよう慎重に門を目指した。何も知らない鳥たちが可愛らしい鳴き声で囀っている。動物たちには影響がないのだろうか。

中央通りが見えてきた。やはり何もいない。平日休日問わずいつも人で賑わうキャンパスが……。もうこの大学は、日常は死んでしまったのだと否応なしに実感させられる光景だ。

中央通りに出て周囲を確認すると、門と逆の方向、連立した校舎の陰で動くものを見つけた。怪我人のようにおぼつかない足取り。死人のような真っ白な肌。ゾンビだ。

「あれが……」

須藤くんが呟いた。初めて実物を目の当たりにしてやはり驚きが隠せないようだ。唾を飲む音がゴクンと鳴り、喉仏が上下に動く。

「確かに、普通じゃねえな……」

「わかっただろう。手加減なんてする必要ない。……行くぞ」

佐伯くんに促され、私達は再び門に向けて歩き出した。開け放たれた門から通りの様子がよく伺える。何体かのゾンビが通りをうろついているのがわかった。

「物音をたてずに静かに近付くぞ。通りに出て視界内にいるやつらの数が多かったら缶の音で道をつくる。少ないようなら殺す」

私はスポーツバッグのジッパーを下ろし、空き缶を一つ手にした。……門が近付いてきた。

通りに足を踏み出す。ゾンビとの距離、約五メートル。あれの虚ろな濁った瞳は私の肩のあたりを捉えているはずだが、全く気付く様子はない。素早く左右の通りの状況を確認する。遠くの方であれがゆらゆらと揺れていたが、門の近くには先程から見えていた――三体しかないようだ。竹刀を構えた佐伯くんを見て、私は缶をスポーツバッグに戻した。

「……殺るぞ」

そう言うと同時に佐伯くんは鞆を地面に下ろし、あれに向かって走り出した。足音に気付きゆっくりと首をこちらに向ける一体の顔面に竹刀を降り下ろし、続けざまに首に突きを放つ。

鼻が曲がり歯が折れ、首の中心に窪みができたあれがスローモーションのように地面に倒れる。呼吸が出来なくなり苦しそうに身をよじらせ、やがて動かなくなった。

呆然と一部始終を眺めていた須藤くんがはっと顔を上げる。一体

が倒れた音に気付いた二体がよろよろと近付いてきていた。

ウウ……アアアアア……

獲物を見つけて嬉しいのだろうか、だらだらと涎を垂らし、手の前に突き出すようにして歩み寄ってくる。

「す、須藤くん、来たよ」

「……わかってる」

あれの異様さに歯を食い縛って固まってしまった須藤くん、佐伯くんが殺れと目で訴えかけている。今、戦いに慣れてもらわなければいけないと考えているようだ。

須藤くんが鉄パイプを握り直し、両手に力を入れるのがわかった。目を大きく見開き、あれを見据える。

「殺るぞ……殺るぞ！」

須藤くんはそう叫ぶと、手前の一体の腹部に鉄パイプの先端を勢いよく突き刺した。ズブリと先端があれの肉に埋もれる。しかしあれは平然と呻き声を上げながらこちらに手を伸ばしてくる。

「なんだこいつ！」

突き刺さった鉄パイプの存在を無視して何事もなかったかのように前進し、自ら鉄パイプを腹に深く飲み込ませていく。

ウアアアア……

「くそっ」

「首を、頭を狙え！」

佐伯くんの声を聞いた須藤くんは鉄パイプを勢いよく引き、ぐんと近付いてきたあれを思い切り前に蹴り飛ばした。グプツという音をたて鉄パイプが引き抜かれる。血が道路に大量に零れ落ち須藤くんのズボンにも飛び散るが、彼は間髪入れずに大きくよろめいて体勢を立て直したあれの頭部に鉄パイプを力一杯降り下ろした。

ズガッ……

頭がボコッとへこんで鉄パイプが食い込み、衝撃に耐えきれなかった首の骨が変な方向に曲がっていた。あれはふらふらとその場でぐらつき、そのまま倒れた。頭蓋骨は割れ、白いドロドロとした脳髓が流れ出てきていた。

「……殺ったぞ」

須藤くんはゾンビの死骸の前、ぼんやりと立ち尽くしていた。もう一体が接近してきているのも忘れているようだ。佐伯くんの叫び声にも気付かない。

その間にも私と須藤くんの方にゾンビが着々と近付いてきている！

「須藤くん！」

反応はない。武器がない私は焦って辺りを見渡すと、コンクリートの地面に転がった誰かの鞆が目に残った。すぐさまそれに駆け

寄り掴み上げると、ゾンビに向かって思い切り投げつける。大きな音をたてて顔面にぶつかったが、あれが歩みを止めることはなかった。

佐伯くんが須藤くんの異変に気付いてこちらに走り出したが、ゾンビは私達のもうすぐそこまで来ていた。

第十二話 遠回り（前書き）

人間のいいところも悪いところもたくさん描いていきたいと思っています。シリアスばかりでギャグ要素が全くないのが悩みの種ですが……。。

第十二話 遠回り

「須藤くんっ……須藤くんってば！」

私はその場に固まってしまった彼の腕を掴み、引っ張ろうとするが彼は動こうとしない。

「須藤くん？」

「……ふふふ、ははははっ！」

突然笑い出した彼に一瞬呆気にとられたのと同時。彼は私の手をぱっと払い、次の瞬間、鈍い音と共に目の前で今にも私たちに襲いかかろうとしていたゾンビが大きく仰け反った。

「……………！」

私も、ゾンビを背後から攻撃しようと竹刀を大きく振りかざしていた佐伯くんも何が起きたのかすぐに把握できないでいた。

ゾンビが後ろ向きに派手に転倒する。顎を鉄パイプで強く突き上げられたようだ。自分の歯で噛みきった舌がベロンと垂れ下がっていたが、それでもなお頭をもたげようとするゾンビの眉間に、突如鉄の棒が生えた。

振り返ると、口を大きく歪ませて悲しんでいるのか笑っているのかわからない表情をした須藤くんがいた。ゾンビの頭に打ち込まれた鉄パイプをズルリと引き抜く。

私達の目の前の通りには、三体のゾンビが無残に転がっていた。

よく見ると、髪を染め流行モノの服に身を包んだそれらは、この大学の元学生のようなだ。露出した腕や足には紫色に変色した生々しい噛み傷がいくつもあり、肉がえぐれ骨が見えている箇所もあった。須藤くんが鉄パイプで撲殺したゾンビの頭部から漏れ出た脳味噌を見て私は吐きそうになった。血も骨も日常生活で見かけることはあるが、脳味噌は動物のものでも滅多にないだろう。

「くっくくく……。おっかしいよなあー！ 俺は今まで色んな悪事に手を染めてきたがよ、一番荒れてた時だって殺しまではしなかったぜ！」

狂ったように笑い続ける須藤くんをどうすればいいのか対応に困り、佐伯くんと顔を見合わせる。

「須藤くん……」

「おい須藤、大丈夫か？」

私達の声が届いたのか、須藤くんは堪えるように笑いを止めると口を開いた。

「悪い悪い。ちょっと自分でも驚いちゃってよ。もう大丈夫だ、奴らの相手は任せな」

「……気が触れたのかと思ったぞ」

どうやら正気を取り戻したらしい須藤くんに安心したのかゆっくりした足取りで近付いてくる佐伯くんの肩越しに、何かが見えた気がした。

「……！ ねえ、ヤバイよ！ いっぱいこっちに向かってきてるよ……！」

二人が慌てて私の指差す方向を見る。通りの奥、横転した車を避けながらゾンビの大群が迫り来ていた。

「マジかよ……!」

「あっちだ、行くぞ!」

いつの間にか鞆を拾いあげ準備を整えていた佐伯くんに従ってゾンビの大群とは反対方向に走り出した。

「佐伯くんの家にはどうやって行くの?」

走りながら喋るため声が揺れる。通りには食い散らかされた死体が散乱しているため、それらを避けながら走らなければならない。

「本当は奴らがいた駅の方が近道だったんだが……回り道するしかないな。駅の向こうの住宅街だ」

「はっ、駅つつたら常に人がわんさか集まってんじゃねえか。今頃ゾンビの巣窟なんじゃねーの?」

「ああ、だから駅に近付くのはなるべく避けて大きく回りながら向かおうと思う」

通りに沿って並ぶ商店はいやに静かだ。血塗られた硝子の自動ドアの向こうには複数の影が動いている。そういえば、サイレンや銃の音が聞こえない。もしかして、この付近はもう……。

「おいっ、前見ろよ。何体かうろついてるぜ」

足元の血溜まりや肉片に気をとられていた私ははっと顔を上げる。

真っ直ぐ続く大通り、十メートル以上離れたところに数体のゾンビがいた。

「本当だ、どうしょ……あつ、そこに道があるよ」

私は立ち並ぶ民家の間に細い道を見つけた。どうやらこの大通りと並行に通る向こう側の通りにつながっているらしい。

「……少し狭いな。挟み撃ちをされたら危険だ。もう少し先に十字路がある。そこを右に曲がってから向こう側の通りに出て駅に向かうと思うているんだが」

「OK、突破だな！」

ゾンビに近付いてきた。広い道路のあちこちで生者を求め徘徊している。須藤くんが血のこびりついた鉄パイプを構えると、佐伯くんがそれを制止した。

「なんだよ」

「何でもかんでも殺せばいいってものじゃあない。奴らは目がほとんど見えないんだ。静かに通り過ぎれば無駄な体力を消費せずに済む」

「……まあ、ごもつともだな」

須藤くんは納得したようで静かに鉄パイプを下ろした。私達はゾンビと出来る限り距離を置きながらその場を通過した。

駅から離れたこの辺りは民家が多い。二階建ての古い造りの家屋

を見上げると、窓から老夫婦がこちらを見ているのに気付いた。お婆さんが心配そうな顔でお爺さんに何やら話しかけている。

そうか、皆ゾンビにやられた訳じゃあないんだ。テレビやインターネットで情報を得て多くの人がひっそりと家に隠れているのかもしれない。

すると、頭上からガラガラとスライド式の窓を開く音が聞こえた。さっきのお婆さんたちだ。

「あなたたち、そこは危ないよ！　ここは安全だから上がってらっしゃい！」

お婆さんが私達に向けて声を張り上げていた。一階に視線を移すと、お爺さんがドアを開けて手招きしていた。

「……ヤバイんじゃないの」

須藤くんがぼそつと呟いた。周りを見ると案の定ゾンビが近付いてきている。

「ほら、早くおいで！」

「ご親切感謝します！　でも俺達は大丈夫です！　それよりも、声を出さないでください！　奴らは音に反応するんです！」

佐伯くんがお婆さんに向けて叫んだ。お婆さんは声をあげることの危険性を理解したようで慌てて口を手で押さえた。

「君たち、本当に大丈夫なのかい？」

お爺さんが心配そうに尋ねた。私は危険を冒してまで私達を助けてようとしてくれた優しい夫婦に胸が熱くなりつつも、早く施錠して二階に上がるよう伝えた。

須藤くんが迫りくるゾンビたちの真横に向けて空き缶を投げつける。空き缶は綺麗な弧を描いてコンクリートの道路に着地した。ゾンビは地面を転がる甲高い音に興味を引かれ、方向を変えた。

「もう大丈夫だろう」

佐伯くんがほっと溜め息をつく。私達は二階の老夫婦に手を振って別れを告げ、再び歩き始めた。あの二人が無事に生き残れるといいなあ。心からそう思った。

ゾンビが闊歩する通りの奥に、十字路が見えてきた。数台の車が放置されており、そのうちいくつかの窓ガラスが血飛沫で汚れていた。車が衝突したのか、民家を囲むブロック塀の一部が崩れ落ちている。

私達は歩いてきた大通りに交差する比較的細い車道を右に曲がり、この大通りと並行に通る道に出て私達が来た駅の方角に戻るつもりでいた。

車の中に注意を払い、慎重に交差点の中央に出る。右の方角を見ると、やはり何体かのゾンビがうろついていたが通ることはできそうだ。今通ってきた大通りと比べ細いため、囲まれないよう気を付けなければいけない。

私は通りに沿って並ぶ建物の中に見知った看板を見つけた。

「あれは……コンビニだね」

「奴らがいる可能性は高いが……まあ大丈夫だろう。様子を見て慎重に進もう」

私達はコンビニのある方に向けて歩き始めた。

第十三話 仲間（前書き）

キャラが皆まじめというか固すぎる気がしますね……。何かご意見感想ございましたらお待ちしております。

第十三話 仲間

通りは狭いため、一度ゾンビに気付かれたらその息の根を止めなければ前に進めない。私達は極力ゾンビの目を掻い潜りながら歩いていったが、あまりに接近すると目の悪いあれも流石にこちらの存在に気付くため、少しずつ倒しながら進む必要があった。

狭い道に元から散乱していた人間の体の破片に、私達が殺したゾンビのグロテスクな死骸が加わる。気持ち悪い道……。腐ったら悪臭がひどいだろうな……。しかしそう思いながらも最初と比べ徐々にその光景に慣れつつあるのを私も自覚し始めていた。

コンビニの前を通りかかった時、須藤くんがひよいと身を屈め私の耳元で囁いた。

「おい、中見てみるよ。案外奴ら少ないぜ」

「あ、本当だ……。コンビニで食べ物とか色々手に入るかもしれないね」

勿論お金を払うつもりなんて更々ない。なんて犯罪意識が低いのだろうと思われるかもしれないが、今のこの世界に秩序など存在するのかどうかも最早疑問だ。部屋でお菓子を食べた時も同じように思ったが、もし仮にいつも通りの日常が戻ってきて窃盗の罪にかけられても私は自分の行動を後悔しないだろう。

短い話し合いの結果、私達は少しコンビニに寄ることにした。食べ物漁っていたらゾンビに囲まれていた……。なんてことを防ぐため須藤くんが外で見張りをし、私と佐伯くんが中へ入ることになった。

「まずは店内の奴らを一扫するぞ。見たところ……二体か」

「制服着てないね。どちらもお客だったみたい。店員さんは逃げたのかな？」

「そうだな……しかし店の奥からゾンビになってコンニチワなんてことも考えられる。確認できる個体の数は少ないが油断せずに行こう」

私達が正面に立つと自動ドアが開き――聞き慣れた軽やかな音楽が店内に流れた。二体のゾンビがこちらを向く。うち一体は頬を噛まれたらしい、パツクリと割れた肉の間から白い頬骨にピンク色の筋がこびりついているのが見えた。

「あまり店の物を汚したくないな……カウンターにおびき寄せるか」

そう言う佐伯くんはレジカウンターを竹刀で思い切り叩いた。パシィツという小気味良い音が鳴り響き、それにつられて手前の一体がふらふらと近付いてくる。そしてカウンターのすぐ脇にやって来たあれの側頭部を――思い切り竹刀で打った。ゾンビが派手な音をたてカウンターの上に俯せで倒れこんだ。すかさずカウンターの店員側にはみ出た頭に一撃をお見舞いしようとしたその時。

「ぎゃあああああつ」

「……!？」

「え？」

思わぬ叫び声が聞こえた。まさかゾンビが？ いや、今のはカウンターの下から聞こえてきたような。身を乗り出してカウンターの

陰を覗き込むと、カウンターの端から頭を出したゾンビの視線の先に人がいた。それも二人。制服を着ていることからするとこの店員のようだ。

ゾンビが至近距離にいる二人の存在に気付いて手を伸ばすが、途端ゴキンという鈍い音とともに全身を大きく震わせて動かなくなつた。ゾンビの首には佐伯くんの腕が回されていた。

「伊東さん、その人たちを頼んだ！ 俺はもう一体を始末してくる」

そう言い残し店の奥へ走っていく佐伯くんを見送り視線を戻す。真っ先に目に入つたのはカウンターの上、首が何かのホラー映画のように180度回転して恐ろしい形相で固まっているゾンビ。

「あの、大丈夫……ですか？ 怖かったですよね」

自分でもびっくりするほど優しい声が出た。このような状況でまだ他の人を気遣える余裕が自分にあつたのかと少し驚いてしまう。

ひどく怯えた表情でがくがくと震えていた二人は私が普通の人間だと知って少しばかり安心したようだ。一人は長い黒髪を後ろで一つにまとめている真面目そうな女の子だ。うちの大学の学生かもしれない。もう一人は幼さを残した男の子——高校生くらいに見える——で、ダークブラウンに染めた某有名アイドル事務所のタレントのような髪型をしている。

「こっちは終わったぞ」

突然頭上から降ってきた男の声に驚いて飛び上がる二人。男の子は後ろへ振り返りすぎて頭を壁に勢いよくぶつけてしまった。ばつ

が悪そうに頭をかく佐伯くんを二人に紹介し、自分の仲間であることを伝える。

「奥へ続くカウンター内には二人がいたわけだし……店内にはもうゾンビはいないみたいだね」

「そうだな。用件を手早く済ませるか」

「あ、あの……」

ゆっくりする談話をするわけにもいかず、安全と用件の確認を始めた私と佐伯くん、女の子が声をかけてきた。

「今、何が起きているのでしょうか……？ 私も寺崎くんもずっとここでレジを打っていて、そしたらあの人たちが入ってきたんです……！ 店長は外へ様子を見に行っただけ……」

「そ、そうだ。あいつら何者なんだよ！ だっ、だってあいつら、人に思い切り食いついて……意味分かんねえよ！」

緊張の糸が切れ、溜まっていた恐怖感が一気に解放されたようだ。彼らのことを思うときちんと事態を説明したいところだが、外で待っていてくれる須藤くんのこともあるし、日が暮れる前に佐伯くんのアパートに着きたい。それにこれから何があるかわからないので出来る限り時間の消費は避けたかった。

「詳しい説明は後でいいか？ 今言えることは、奴らは化け物。それだけだ。君たちはこれからどうする？」

二人は顔を見合わせ、それから佐伯くんの手に行っている先端が血に染まった竹刀に目を移した。

「……一緒に付いて言ってもいいですか？」

「お、俺も頼むっ」

「わかった。俺は佐伯義崇、こちらは伊東臯月さん。君たちの事情も後で聞こう。今は名前だけ教えてくれるか？」

二人同時に声を発し、気まずそうに顔を見合わせて譲り合っていたが、結局女の子の方から話し出した。

「私は清見千香子です。よろしくお願いします」

「俺は寺崎海斗。よろしく」

仲間が二人増えた。皆知らない人たちばかりだが心強い。こんなに人のありがたみを感じることがするのは、日常から離れたからなのか。私達は日持ちする食品や水などを必要最低限の分だけ鞆に詰め込みコンビ二を出た。

第十四話 団結（前書き）

今回は主人公が色々大活躍？ な回です。いつもは佐伯が目立ってますからね。

主人公が環境に適応してきたせいか、私が夜中に書いたせいか、ほんのちよつとテンションがおかしいかもです。比較的明るめ？
……いや、そうでもないですね。

第十四話 団結

「随分長かったじゃねえか。まったくこんな気味悪い道に一人——ん？　なんだこいつら」

コンビニからぞろぞろと出てきた私達を須藤くんがぼかんと見つめる。

「あ、えっと、生存者がいたの！　こちら須藤英雄くん」

とりあえず二人に須藤くんを紹介する。無駄に怖い目付きで見ているいかにも不良の形なりをした男にビビった様子の二人だったが、おそろおそろ名前を告げた。

「清見さんに……寺崎ね。ところでお前ら大掃除でも始めるつもりか？」

私と清見さんの手には長箒、寺崎くんの手にはモップ。五人のうち二人しか武器がないのはあまりにも危険なので、店の清掃用具箱から拝借してきたのだ。頼りない武器だがあれを突いて転倒させるのには役立ちそうだ。そして私が持ち運んでいた須藤くんのスポーツバッグは今寺崎くんが持ってくれている。正直大きいバッグを運ぶのに疲れてきたところだったのでごく助かった。

「のんびり話している場合じゃないぞ。二人ともよく聞いてくれ。今から俺達が相手にするのはゾンビ、化け物だ。映画のように少しでも噛まれたら奴らの仲間入り。でもこれだけは覚えておいてほしい。奴らは目がほとんど見えず、聴覚を頼りに行動している。だから音をたてずに奴らの目を掻い潜るようにして移動するんだ」

佐伯くんが生き残るために最低限必要な情報を掻い摘んで説明する。二人はまだ気の昂りが収まらない様子で話を聞いていた。

「もういいだろ、行こうぜ」

待ち疲れた須藤くんがそう言って歩き出した。私たちはその後を続く。ぞろぞろと一列になって歩く様子は――なんか遠足みたい。陳腐な表現だと我ながら呆れたが、気持ちに余裕ができたというところでいい傾向かもしれない。いや、この状況に余裕なんて言葉はとても似つかわしくないのだが。身に迫る危険から逃れるのに精一杯で深く考えることはできないだけで、家族のことがある。

私はふと思いついて上着のポケットから携帯を取り出した。授業中に音が鳴るのを防ぐために携帯をずっとマナーモードにしていたのだ。

期待を込めて半開きにして覗きこむ（カチッという音が鳴るのを防ぐためだ）しかし、友達と撮ったプリクラの見慣れた壁紙が表示されているだけで新着メールや着信の知らせは無かった。仲の良い友達はどうしているのだろうか。――昭子……由美……。私は特に仲の良かった二人の友人の顔を思い浮かべた。

先頭を歩く須藤くんの存在に安心しきって自分の世界に飛んでいたが、気を持ち直して正面の様子を確認する。細い道の終わりが見えてきた。大学前の大通りと同じくらい広い通りに繋がっているようだ。しかしその途中にはゾンビの姿があった。一番手前の一体はこちらに背を向けるようにして道の端に佇んでいた。脇腹はくり抜

かれたように大きく穴が開いており、肋骨や内臓が覗いていた。あんなに肉体が破損していても平気な顔をして生きていられるんだ、ゾンビは。

そのゾンビの横を慎重に通り過ぎる。――須藤くん、佐伯くん、寺崎くん……そして私が通り越そうとした時、ゾンビが緩慢な動作でこちらを振り向いた。あまりにひどい顔に悲鳴を上げそうになり、^{すんで}既のところで堪える。ゾンビの顔の表面は食いつくされ真っ赤になり、筋肉が丸見えだったのだ。

「て、店長……」

後ろの清見さんが呟いた。すぐにはつとしたようで口を押さえたがもう遅かった。その店長だったらしい男性のゾンビはほとんど骨だけになった片足を引き摺り、こちらに歩み寄ってくる。普通のあれに比べても動作は遅かったが、極度の恐怖とショックのせいかな。清見さんは金縛りにあったかのように動かない。

「し、しっかり。逃げようっ」

私は清見さんの肩を軽く揺するが反応がなかったので力づくで引っ張って逃げようとする。前の三人も気付いたようで、いつでも攻撃できるように武器を構えこちらの様子を覗いていた。清見さんも落ち着きを幾分か取り戻したようでよろよろと歩き始めた。そのままゾンビに接触することなく通過できると思ったその時。

「きゃああっ」

ゾンビが手を伸ばし清見さんの服の端を掴んだのだ。私は咄嗟にゾンビの手を払いのけ、彼女を前に押し出す。

「行こっ」

私達は走り出した。出口の近くのゾンビ達はさっきの叫び声でこちらの存在に気付いてしまったようだ。しかしそんなに距離は長くないしゾンビは疎らなので全力で走り抜ければ問題ないはず。それに須藤くんが鉄パイプで近寄ってきたゾンビを転倒させてくれた。

須藤くんに続き佐伯くんも大通りに出れたようだ。そのまま無事に全員辿り着けると思った。が。

「うわあああっ」

寺崎くんが大声をあげた。周囲にはゾンビの姿がない。不思議に思っただけの足元に目をやると……いた。須藤くんが転倒させられたゾンビが寺崎くんの足首を掴んでいたのだ。ゾンビは驚異的な力でもって足を引き寄せ、彼は仰向けに転倒する。身体を曲げることなくまっすぐ倒れこみ、ガツンと勢いよく頭を地面にぶつけてしまった。コンクリートの地面に頭をぶつけ朦朧とした寺崎くんがゾンビが覆いかぶさる。

「うぐっ……やめろおお……」

寺崎くんが必死にゾンビの肩を押さえつける。しかし、徐々にゾンビの口が彼の首元に近付いてきていた。私と清見さんは彼を助けようと走り出す。脳内にあの時の光景が蘇る。大教室、女子学生に押し倒され私の前で命を失った悲痛な男子学生の姿。もう、殺させない。助けるんだ。手にした箒を背後に投げ捨てる。

「えいやああーっ！」

気合いを入れるために発された格好悪い叫び声。間に合ったのかどうかかわからなかった。とにかく私はゾンビを思い切り蹴ったのだ。（必死になった時私は相手を蹴る傾向にあるようだ）ゾンビはバランスを崩しゴロンと横に転がった。

「寺崎くんっ」

清見さんが彼が起きあがるのを手助けする。ふらふらになりながらも寺崎くんは立ち上がり、清見さんの肩を借りながら小走りで佐伯くんたちの方へ向かった。私は転がっていたモップとスポーツバッグを拾い上げ、起き上がろうとするゾンビの背中にモップで一撃を加え、皆の後を追った。

細い道を抜け大通りに出た。周囲を見渡すとやはり道路は横転した車や死体であふれていたが、付近にゾンビの姿は見えない。さっきのゾンビがこちらに来ないように、私はバッグから空き缶を取り出し元来た道の奥の方へ投げた。カーンと遠くで缶の転がる音が聞こえた……本当にそう聞こえたのだ。

「寺崎くん、大丈夫？」

私の渾身の蹴りは彼を救えたのだろうか。少しでも噛まれていたら……息が詰まる思いで彼に尋ねる。

「だ、大丈夫だと……思う。危なかったけど」

真っ蒼な顔をしているが無事だったようだ。ほっと胸を撫で下ろす。

「伊東、やるじゃねえか」

声のした方を向くと須藤くんが私にニッと笑いかけていた。

「ああ、二人を危険から救ったのは伊東さんだ。男として情けないな、須藤」

「ホントすんません……」

佐伯くんの言った「男」の範疇に自分が含まれないのを齒痒く感じたのか、寺崎くんが心底申し訳なさそうに言った。

「ま、こんな異常事態だから……とは言わないぜ。もっと男らしく、逞しくならなきゃ生き残れねえだろうな」

「はい……」

「いえ、この現状に男も女もありません……私も、もっと強くなります」

須藤くんの言葉に清見さんが応じる。彼女のくりっとした大きな目は強い意志で満ち溢れ輝いていた。

「頑張ろうね」

清見さんの手を取りぎゅっと握る。突然のことに目を見開いて少し驚いたようだが、彼女は握り返してくれた。清見さんと微笑みあう。さっき会ったばかりなのに、親友のような固い絆を感じた。

第十五話 侵入（前書き）

色々調べたりすると時間がかかりますね。まだ検証できてないことがたくさんあるんですけど……。

それにしても移動が遅すぎますよね！ これじゃあいつまで経っても皐月が家に帰れません。これからちよつとスピードアップしたいなあと思います。

第十五話 侵入

学生が主な客層だったらしい、飲食店や古着屋の並ぶ大通りを五人で進む。土曜日ゆえかサークル帰りの学生ゾンビが多いように思われる。ゾンビの間を縫うように慎重に切り抜け、密集している時は空き缶を投げて道を作った。

緊張感は常に漂うが、音さえたてなければ襲われることはない。このまま順調に進めばあと一時間もしないうちに佐伯くんのアパートに到着できそうだ。

ゾンビが少なくなったのを見計らってか清見さんが口を開いた。

「こんなところまで……。あの、もしかしてこれって、同じことが東京中で起こってたりするんですか？」

「……わからない。俺のアパートに着いてからゆっくり調べようと思っている」

佐伯くんはこれが人類の存続を脅かし得る、地球規模の危機的状況であることを二人に悟られたくないようだった。

私も東京どころか世界中でパンデミック起こしてるみたいだよ！とは正直に言えなかった。今真実を知ればあの時の私のように無謀な行動に出してしまうだろう。

「でも、そういう可能性もあるんですよね？」

「おいおい、冗談じゃねーよう……。じゃあ俺ら家に帰れないわけ？」

先程見せた強い意志は揺らぎ、二人は明らかに動揺し始めた。こ

の地域をターゲットにした少し大規模な暴動くらいにでも思っていたのだろう。

「今は黙って生き残ることに専念しろっての。生きて家族に会いてえんだろ？」

「か、家族が生きてる保証はあるんですか!？」

須藤くんなりに清見さんと寺崎くんを思ってたことだと思いが、その挑発的な物言いは火に油を注いってしまったようだった。

これは、危ない。二人が今パニックを起こして暴走したら……。

「大丈夫だ。警察や自衛隊が動いているだろうし、多くの人は家に立て籠ったり指定された避難所に避難している」

私は震える清見さんの背中を擦りながら佐伯くんが優しい声で二人を諭すのを聞いていた。

「おい！ あそこだ、見えるか？ 消防署だ」

突然声を張り上げた須藤くんが指差す方向に目を向けると確かに消防署があった。消防車も救急車もやはり出動中のようでガレージはガラんと空いている。

「隊員はお留守みてえだが……消防署つつたら何か使えそうなもの色々あるんじゃないの？」

「そうだな。周囲に奴らの姿はないし……外から様子見をして安全だったら少し邪魔するか」

もしかしたら中に消防隊員の人がいるかもしれない。須藤くんと

佐伯くんに従って私達は消防署へ向けて歩を進めた。

「疲れちゃったしちょっと休憩したいよね？」

「……………」

おどおどしながらも二人に声をかける。清見さんは黙ったまま頷いてくれたが、寺崎くんは上の空のようだ。

消防署の真ん前まで来た。白い建物の一階部分はほぼガレージで占められているが、右端は壁が突き出ており受付のような部屋になっているようだ。大きな硝子の窓から見えるのは誰もいない殺風景な白い部屋――机の上の物が乱雑に散らばっているのは、この緊急事態に隊員たちが急いでここを飛び出したことを物語っている。

「見た感じ死体どころか血痕もないな……」

「入ろうぜ。そいつらも少し休んで落ち着いた方がいいだろ」

「えっと、入り口はその部屋からのとガレージの奥のと二つあるみたいだよ」

喉渴いたから自販機でジュース買おうみたいなノリで不法侵入を企てる私達を第三者の視点で考えてみるとかなりおかしいだろうな。授業態度はあれだったが――素行は至って真面目だったはずの学生が一日でこうも変わってしまうなんて。

確めたところどちらも鍵がかかっていることがわかり、私達は部屋の硝子の窓を割って侵入することにした。

「大きな音出ないかな？」

「出ても見える範囲に奴らはいないし大丈夫だろう」

そう話している間にガシャンと派手な音が鳴り、見ると窓ガラスに大きな穴が空いていた。須藤くんが鉄パイプを持つ手とは逆の手を穴に突っ込み、器用にロックを外す。

「よし開いた。それにしても結構簡単に割れたな。まったく、平和ボケした防災施設だぜ。おい、ガラスの破片に気をつけろよ」

須藤くんが私のお腹くらいの高さの窓枠をひょいと飛び越し、早く来いよと手招きをする。寺崎くんと清見さんに先に行ってもらい、私、最後まで周囲を警戒していた佐伯くんと続く。

部屋は書類が散乱しているだけで特に何もなく、デスクの奥の扉から中へ入ることにした。

先陣を切った須藤くんが急に立ち止まり、不思議に思っただけの体を避けて顔を覗かせた清見さんと寺崎くんが「ひっ……」と小さく声を漏らす。何事かと私と佐伯くんも背伸びをして（これは私だけか）前の様子を伺う。

私は絶句した。生活感の全くない白い廊下に広がる散り散りになった死体。赤黒い血溜まりと汚れていない白い床が鮮やかなコントラストを作りあげている。

壁に寄りかかる、服ごと食われ穴だらけになった胴体――引きちぎられた足がかりうじてくっついている。消防服は頑丈なはずだが……すごい顎の力だ。須藤くんの足元には生首が転がっており、皮膚を剥がされて真っ赤になった顔の表面に白い目玉が一つ、虚ろな瞳で宙を見上げていた。もう片方は窪みになっている――ほじくり

だされたのだろうか。身の毛もよだつ光景に、残虐な場面に慣れてきた私も背筋が寒くなった。

「中に入ってきてんのか、奴ら……外は全然汚れてなかったのによ。おかしくねえか？」

「向こうにも入り口があったのかもしれない……」

須藤さんの疑問に清見さんが冷静に答える。焦りと恐怖で我を失わないか心配だったので、私は少し安心した。

「さて、行くか」

再び歩き始める須藤さんの背中に寺崎くんが抗議したような視線を向けていたが、やがて無駄だと思ったのか黙って歩き始めた。私は清見さんと手を取り合って血溜まりを避けながら進む。

「この部屋は……」

須藤くんは右手のドアを僅かに開けたと思ったら、すぐに閉めた。そしてこちらを振り返り首を左右に振る。

「……お食事中だ」

その意味がわかったのか清見さんは不快そうに顔をしかめた。どんな時もこんな調子の須藤くんと、曲がったことが何より嫌いそうな真面目な清見さんは少し馬が合わないかもしれない……。こんな危機的状况でも人間関係は色々あるから厄介だ。

正面には上り階段があるが、一段一段がバケツをひっくり返したような夥しい量の血液でびっしりと濡れていたので上がるのは諦

めた。

角を曲がると奥に小さな入り口が見えた。ドアが開け放たれており、そこから私達がいるここまで欠損した死体や肉片混じりの血溜まりだらけだ。慣れてきたと思ったが、ゾンビのいる緊張状態から抜け出した冷静な状態のままで見るとやはり気持ち悪い。

「おっ？」

須藤くんが声をあげた。何かを見つけたようだ。血溜まりを器用に避けながら廊下を一人すいすいと進み、上半身だけの男の死体の側に屈み込むとそれを拾い上げた。柄の長い先に大きな刃がついたそれは――斧のようだった。小学校の時の社会科見学で見たことがある。災害時閉ざされた扉などの障害物を突破する時に使う、万能斧というものだ。

「やーりい。血や脂でツルツル滑るしよ、もうこの鉄パイプとはおさらばしてえなって思ってたんだ」

持ち主の死体の側で嬉しそうに遺品を掲げる姿は不謹慎さが否めないが、確かに大きな収穫だ。

「……ちょ、須藤さんっ後ろ！」

寺崎くんが叫ぶ。斧の持ち主が足のない体を引き摺り床を這ってきていた。貪欲な目をして須藤くんの足にかじりつこうとする。

ドスッ

何の躊躇もなしに須藤くんが思い切り振り上げた鉄パイプをその後頭部に突き刺した。

「トレード成立だな」

そう言ってニヤリと笑う須藤くんが恐ろしく思えた。朝まではあんなにあれを殺すのを躊躇っていたのに、震えていたのに。今のこの世界に蔓延する狂気は人をここまで変えてしまうのか。

「……その部屋はどうだ、須藤」

凍りついてしまった空気を溶かすように穏やかな口調で、佐伯くんが須藤くんの近くのドアを指差す。

「ああ、ここね」

須藤くんが強力な武器を手に入れ強気になったのか、豪快に扉を開く。ドキドキしてしまっただが中は会議室のようで死体もゾンビもないようだった。私達はそこで少し休憩をとることにした。

第十六話 亀裂（前書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます。

最近少し書くペースが落ちてきてしまっているのですが、見てくださる方がいると思うと励まされます！

ちなみに斧は万能斧弁慶というのをイメージして書いてます。これまでの話からじゃ全然想像できないと思いますが……。これから活躍してもらう予定です！

第十六話 亀裂

私達は会議室の椅子に腰を下ろした。少ししか歩いていないのに下半身がずっしりと重い。……そして喉がカラカラだ。外を歩いているときはゾンビのことで頭が一杯で自分の体の状態に気付かなかった。

皆も同じだったようで、佐伯くんは寺崎くんが担いでいたスポーツバッグからミネラルウォーターを取り出すと私に差し出した。

「水は重いからあまり入れてこなかったんだ。一本を四人で分けよう」

透明の水が入ったペットボトルを受け取り、キャップを開ける。本当は全部一人で飲んでしまいたいくらいだったがしょうがない。二、三口含むと、生ぬるい水が喉をトクトクと流れ内側を潤すのを感じた。

「はい」

「……ありがとう」

隣に座る清見さんに蓋の空いたペットボトルを渡す。彼女は少し俯いたまま僅かに微笑むとそれに口を付けた。

私の向かいには佐伯くん、その隣には寺崎くんが座っている。須藤くんは疲れていないからと率先してドアの外の見張りをしてくれている。開けたままのドアから彼の後ろ姿が見える。ゾンビが侵入してきた出口のある右の方向に特に注意を向けているようだ。

「そーいや何も聞いてないんだけど。俺たちこれからどこ行くんだよ？」

残り少なくなった水を佐伯くんに渡し、寺崎くんが口を開いた。そういえばゾンビの特性について話しただけで何も伝えていなかったっけ。

「佐伯くんのアパートに行くよ。食料もあるし、そこで落ち着いて考えようって」

水を飲んでる佐伯くんに代わって私が答える。

「だったら今色々話してくれてもいいだろ？ 大変なことになってるかもしれないのにさ、他人の家でのんびりしてる余裕ねーよ！」

寺崎くんが狼狽して喚きたてる。確かに彼の置かれた立場からすればもつともだ。私の隣の清美さんも彼を止めることなくじつと話を聞いている。

「君は俺たちに付いてくる、と言ったよな？」

静かな口調で佐伯くんが言った。穏やかな声をしているが目はずっと細められ、底知れぬ威圧感がある。寺崎くんも圧倒されたのか押し黙ってしまった。

「俺たちにも計画というものがある。生き延びるためにも予定が狂うのは避けたいんだ。こちらに付き合うのが嫌なら自由にしてくれて構わない」

「……………」

佐伯くんらしくない、容赦なく突き放した言い方。二人との間に冷たい空気が流れ込むのを感じておろおろしていると、佐伯くんがまた私に水を手渡した。

「ええっもう飲んだよ？ 気を遣わなくて大丈夫だってー」

傍観していた私に急に対象が向けられ、間拔けな声をあげて顔の前に両の手を掲げる――「結構です」のポーズだ。街頭でチラシ配りやらキャッチセールスやら何かの勧誘を受けると無視できない私はこのポーズを多用して乗り切って（？）いた。

「いや、伊東さんも少しは飲んでもいいけど……須藤に渡してきてほしい。よく働いてくれているからな」

「……あ、了解です」

私のオーバーリアクションにちよつと困ったように頭をポリポリと掻く佐伯くんから、私は赤面しながらそれを受け取った。

「須藤くん？」

廊下に響かないよう小さな声で須藤くんの背中に話しかける。そういえばさっきの寺崎くんの叫び声はゾンビの耳に届かなかったのだろうか。

「揉めてるみてえだな」

須藤くんは顔だけをこちらに向け、ニッと口角を上げた。私は部

屋から出て彼の隣へ移動しペットボトルを渡した。

「サンキュー。……これゾンビ来たら投げろってんじゃない？」
「違うよ。ペットボトルはそんなに音鳴らないし」

こんな時でも冗談で場を明るくしてくれるのは彼のとても良いところだ。逆に不快に思う人もいるだろうが、少なくとも私は救われる。

人間の破片が転がる真っ赤に染まった廊下に血生臭い風が吹く。そんな中水を飲み終えた須藤くんはふうっと重い溜め息をついた。微妙な雰囲気の変化を感じて見上げると、彼は固く口を結び、冷やかな目で何もない正面を見つめている。

「環境の変化に適応できねえ生物は滅びる……学校で習ったよな」
須藤くんは表情とは真逆のはっきりとした明るい口調で話し始めた。

「世界は一瞬で変わっちゃった。今まで慣れ親しんできた日常は、もうない。跡形もなく消え去った。……そんな今、俺たちに求められてるのはこれまでの人間からの脱却じゃねえか？」

「え？」

須藤くんが顔をこちらに向け、私の目をじっと見据える。その瞳は――光を飲み込んでしまいそうなくらい――深く暗く、底無し沼のようだった。

「社会も秩序も失った人間は、これまで求められてきた人間らしさを捨てなきゃ生きていけねえ。自分だけいつまでも法だとか秩序に従ってたって意味がない。元々人間だろうとゾンビはゾンビ……化け物は殺す」

いきなり真面目なことを語り始めた須藤くんに面食らっていると、彼は私の顔を見て可笑しそうに吹き出した。

「なんだよその顔。俺がまともなこと喋っちゃ悪いか？　とにかく俺は今までの自分を捨てる。……あ、勘違いするなよ？　俺は一度手を組んだ仲間は大切にするからな」

そう言って白い歯を見せ、もう見慣れたいつもの笑顔をつくる。……須藤くんも苦しんでいるんだ。中途半端なあり方は身を滅ぼす。私もこの一日でそれは理解できた。

「それでいいと思うよ、私は須藤くんを支持する」

彼にそう笑いかけると――部屋からガタンという大きな物音と悲鳴が聞こえた。

「日本中……世界中で……こんなことが……？」

「ふっ、ふ、ふざけてるよなあっ！？　じゃあ何？　俺これからゾンビに囲まれて暮らしてかなきゃいけないのかよ？　ははは……」

寺崎くんがこちらに向かってくる。そして私と須藤くんの間を通り抜け出口へ向かおうとしたが、その腕を須藤くんが捻りあげる。

「いっ……何すんだよっ！！」

「大声あげるんじゃないやねえ。武器も持たずに……死にてえのか？」

「武器持たなきゃ死ぬのか？　なら俺のお袋は、親父は、妹は弟はどうなるんだ！？」

「……………」

その時須藤くんの顔が苦痛に歪んだ。動揺の色を見せた一瞬の隙をついて寺崎くんが思い切り蹴りあげたのだ。

「……畜生！　おい馬鹿、戻ってこい！」

寺崎くんは出口から飛び出して行ってしまった。正常な精神状態ではない。早く連れ戻さなきゃ、殺されてしまう。

「捕まえることができなかった……申し訳ない」

もう既に荷物を抱えた佐伯くんが言った。後ろには虚ろな目をした清見さんがいる。きっと彼女も出ていくことがないよう見ていたのだろう。

「おい、行くぞ！」

須藤くんが走り出す。佐伯くんも竹刀を片手に後を追う。部屋を出ていく時私に清見さんの手を離さないよう言い残していた。私もモップとスポーツバッグを担ぐと、清見さんに手を差し伸べた。

「大丈夫だから。行こう？」

彼女は青白い顔で頷き、私の手を取った。

消防署を出ると駅へ向かう大通りに向かって走る二人の姿があった。その先には寺崎くんがいるのだろう。私たちも追いつかなきゃ。それにしても、なぜこんなことに？ 疑問を胸に残したまま私たちは走り出した。

第十七話 恐怖（前書き）

今回は激しい展開になりました。色々悩んだのですが……。これからも色々な登場人物が出てきますが、一人一人の心理描写にこだわっていきます。

第十七話 恐怖

大通り沿いにガラス張りの小洒落たカフェや飲食店、ブティックが並ぶ。奥にファッションビルや高架鉄道が見えてきた。駅に近付いてきたようだ。それにつれてゾンビの数も増加する。消防署までは通りに疎らに点在していたが、通りの向こうではゾンビが塊となって私たちの目の前に立ちはだかっている。

「はあ、はあ。ヤバイよ……ゾンビが多くなってきてる！ 前、見て。あんなの突破できないよ……」

「すみません、寺崎くんは……決して悪い子じゃないんですけど……熱血漢で、思い立ったら居ても立ってもいられないんです……。店長とも、言い合いが絶えなかったり……」

もう既に息切れしている私に、走りながら清見さんが言う。消えてなくなってしまった日常の日々を思い浮かべているのか、遠い目をしている。彼女も精神的に相当きいているはずだ。私だって佐伯君と出会って体育館で休息を取らなかったらどうなっていたかわからない。

その時、前を走る佐伯くんが左に曲がった。どうやら通り抜けるのが不可能と見た寺崎くんが左の路地に入ったようだ。私たちも続いて左に曲がる。と、先に走っていたはずの須藤くんと佐伯くんが入ってすぐの位置に立ちつくしていた。

「ど、どうしたの？ 寺崎くんは？」

——いぎやああああっ……！ やめろっやめろおおっ……！

突然聞こえたこの世のものとは思えない悲鳴に、びくつと身体が大きく震える。まさか、まさか……。

「……ああ、あ、て、寺崎……く、ん……」

清見さんが両手を口に当て、真っ蒼な顔をして目を大きく見開いている。その目の先には。大安売りのバーゲンセールに群がる主婦のごとく——寺崎くんの血肉に群がるゾンビの山があった。寺崎くんの姿は見えない。ゾンビの数が多すぎるのだ、ざっと二十体はいらるだろう。湿った咀嚼音と、ゾンビの間から漏れ聞こえる彼の悲鳴。次第に弱くなっていく。

——おやじい、おふくつ……ひぎゃあああつぐぎいいつつ……

一体のゾンビが血にまみれた腸のような臓器を引きずり出し……同時に獣のような甲高い悲鳴——断末魔の悲鳴を上げて声は途絶えた。長いように感じられたが、実際は一分にも満たない出来事だった。

何も考えられず茫然と立ち尽くす私の腕がぐいと力強く引かれる。

「奥には……奴らの姿はないようだ。このまま真っ直ぐ行って、向こうの通りに抜けよう」

そう言う佐伯くんの声は機械のように無機質で、目は私の顔を視界に入れるのを避けるように伏せられていた。後ろを振り返ると、魂が抜けてしまったような清見さんをどうにか連れ出そうとする須藤くんの背後に、あれの姿が見えた。当然だ。大通りにはあれだけ

ゾンビが溢れていたのだ。こんな悲鳴を聞いたら獲物を求めてわざわざ寄ってくるに違いない。

私たちは寺崎くんを集る醜悪なゾンビの群れを避けながら路地の端を静かに通過した。その横を通る時、隙間から彼の顔が見えた。目が大きく見開かれ、そこに湛えられた涙は筋となって彼の頬を流れ落ちた。

「……うぐっ」

胸がギュっつと締め付けられる。苦しい。悲しい。彼は両親に、家族に本当に会いたかったのだ。それも最後まで叶わなかった。私は彼を助けられなかった、死なせてしまった。

「伊東さん、考えるのは後にしよう。今、気を取り乱してゾンビに囲まれてからじゃ何もかも遅い」

私の腕を引きながら走る佐伯くんが前を見据えたまま言う。

「うん……」

路地を抜けると、コンビニやマンションが立ち並ぶ狭い通りに出た。佐伯くんが言うには、この通りを真っ直ぐ進めば駅に近付くことなくアパートまで行けるようだ。日が傾き、空が朱色に染まり始めている。街が夕闇に飲まれるまであと少し。しかしそれまでには彼の部屋に着いているだろう。

「おい、しっかりしろ」

須藤くんの声に振り向くと、清見さんが身体を傾かせ、焦点の定

まらない目でぼーっと宙を見上げていた。時々口を動かしぶつぶつと何かを呟いている。須藤くんは彼女の肩を揺すっていたが、やがて無駄だとわかったのか手を離れた。

「こりゃ早くアパートに行かなきゃヤバイぜ」

そう言う須藤くん自身の顔も血色が悪く、表情も無理して余裕を装っているが疲れ切っており、こめかみから大粒の汗が伝ってコンクリートの地面に落ちた。もう皆限界だ。早く行かなきゃ。

「ゾンビはあまり見えない……ね。急ごうよ、走ろう」

黙り込んでその場に立ち尽くしている三人に声をかける。佐伯くんは思い出したように顔を上げると、私を見て頷いた。須藤くんに言われ、私は清見さんの手をしっかりと握りアパートに着くまで離さないようにすることにした。

「清見さん、あともう少しだから、頑張ろう」

私の呼びかけに彼女は少しだけ身体を反応させたが、何も言葉を返してくれなかった。正直怖かった。普通だった人間がおかしくなってしまう。ゾンビもそうだが、清見さんのように精神を病んでしまうのは見ていられない。私は言い知れぬ恐怖を振り切るように彼女の手をぎゅっと強く握った。彼女も握り返してくれた……気がした。

誰もいない通りを走る。消防署からずっと走りっぱなしだ。太ももが重く、足の裏がじんじん痛む。長距離走は何よりも苦手なのだ。

もうリタイアしてしまいたい……。長距離走の時はいつもそう思うが結局最後まで走る。今回も同じだ。しかし清見さんがなかなか走ろうとせず、半分引きずるような状態なのだ。きつい。

「伊東さん、俺が清見さんを引っ張るから。俺の荷物を持ってくれないか？」

「あ、うん。ありがと……」

ありがとなんて。疲れた思考からの無意識な発言だが、まるで清見さんがお荷物のような言い方。今のやり取りが耳に入っているかはわからないが、彼女に申し訳なく思った。

そういえばモップはどこかにいつてしまった。私が担いでいたはずのスポーツバッグは万能斧と一緒に須藤くんが肩にかけている。もしかして、ところどころ記憶が飛んでしまっているのだろうか。

「ゾンビだ、気をつけろ」

先頭を走る須藤くんが首だけ振り返って私たちに注意を呼び掛ける。前を見ると数体のゾンビが道の真ん中をふらふらとろついている。女性のゾンビと男性のゾンビの間にいるのは、頭三つ分低い背の子供のゾンビだ。今日は土曜日だ、親子三人でお出掛けだったのだろうか。幸せな家庭をぶち壊したゾンビの存在が恨めしい。

「あれ、お父さん？ お母さん？ ……歩美？」

清見さんの声。寝ぼけたような……。でもはつきりとした正気の間声だ。でも、歩美って？ 振り返って清見さんの顔を見ると、彼女はだらんと口を開け、目を輝かせて正面――ゾンビの方を見ていた。

「清見さん、駄目だ！」

清見さんは佐伯くんの掴む手を振り切り走り出そうとしていた。目はギラギラとして、嬉しそうに顔を綻ばせ、白い歯を見せている。何かおかしい……！

「離して、離してよ……」

「おい須藤、彼女は何か変だ！ あのゾンビを家族だと勘違いしている」

「殺すか？ ……いやもっとおかしくなりそうだな」

須藤くんの「殺す」という言葉に清見さんは異常な反応を示した。歯を食いしばり身体をわなわなと震わせている。

「……バケモノ。私の家族を殺すつもりでしょ？ そうはさせないんだから……」

冷たい、恐ろしい声だった。そして彼女はぐいと佐伯くんの手を引き植木の傍に身を屈めると、次の瞬間、彼の顔に何かを投げつけた。

「……うっ！」

砂だ。佐伯くんはそれでも手を離そうとしなかったが、彼女が彼の手首に思い切り噛みつき、痛みに手を離してしまった。

「清見さん、待て！」

追いかけてようとするが目に相当砂が入ったらしい、噛まれた手首の痛みも手伝って歩くのも儘ならぬ様子だ。私はこちらに向かってくる清見さんを止めようと身構えた。しかし彼女の必死な形相とその手にしたものを見て身体が固まってしまった。彼女が持っていたのは、血の染み付いた竹刀。佐伯くんから取ったのか。

「バケモノおお！！ 死ねええー！！！」

彼女の鬼気迫る勢いと悲しそうな瞳を最後に、私の意識は途絶えた。

第十八話 後悔（前書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます！ 感想を書いてくださる方やお気に入り登録してくださる方が増え、嬉しい気持ちでいっぱいです。

今回は会話が多いです。皐月たちは今回で色々吹っ切れたので、これからは少し明るめになっていくかなと思います。

第十八話 後悔

頭がずっしりと重く、意識だけが宙に浮いて波間に漂う感じがする。苦しいような、心地よいような。遠くの方で誰かが話している。私は死んでしまったのか？ 段々と感覚が戻ってきて、意識が鮮明になっていく。

「……………」

薄く開いた目に映ったのは真っ白な空間。どこかの天井だろうか？ 体を包むふかふかとした感触。どうやら私はベッドに寝ているらしい。

「……あ、痛っ」

起き上がろうとして初めて頭部の鈍い痛みに気付く。そうだ、私は佐伯くんのアパートに向かっていて、それで……。

「伊東さん？」

少し離れたところで声がした。佐伯くんの声だ。痛みを堪えて頭をその方向に傾ける。白い壁の殺風景な部屋、開かれたドアのところに佐伯くんが立っていた。

「意識が戻ったのか！……良かった」

心底安心した様子でこちらに近寄ってくる。そして私の額にそっと手の平を乗せると傷が痛むか聞いてきた。

「まだちょっと痛む……かな。……二人は？」

二人、とは須藤さんと清見さんのことだ。あの時清見さんがパニックを起こして竹刀で思いきり私の頭を叩いたのだ。それからの記憶は……ない。

佐伯くんの表情が曇った。まさか。彼は開こうとした口をまた閉じ、そして意を決したように話し始めた。

「須藤は向こうの部屋にいる。……清見さんは」
「だめだったんだ」

佐伯くんは否定しなかった。悲しそうな目をして俯いている。そんな――冗談であってほしい。二人で手を取り合って、頑張って生き延びようと励まし合ったのはついさっきのことだったはずだ。あんなにも輝いた目をしていた彼女が。嘘だ。

佐伯くんはゆっくりとあの後のことを話し始めた。

清見さんは私を打ち、私はその場に倒れた。そして須藤くんの方に向かって行ったらしい。須藤くんは彼女を止めようと斧とバッグを地面に置き向かい合った。リーチの長い清見さんは須藤くんの腕を打ったが彼は怯まず突進し、彼女の腹部に一撃を食らわせた。そして意図通り気絶した彼女を横たわらせ、斧を拾って先にゾンビを始末しようとした。しかし彼女は気絶していなかった。痛む腹部を押さえながら執念で立ち上がると全速力で駆け出した。最愛の家族の名前を叫びながら。

「……須藤は伊東さんを背負って俺は手を借りながらここまでやっ
とこさっとこ来たんだ」

「……ひぐっ」

約束したのに、私だけ生き残って彼女は死んでしまった。喉の奥
の方が苦しい。目頭が熱くなり、嗚咽が込み上げる。

「最後はずっと俺たちに助けを求めていた……彼女も自分がおかし
くなっていることはわかっていたんだ。ただ、おかしくならなきゃ
生きていけなかったんだろうな」

「……………」

止めどなく涙が流れる。なぜ、なぜこんなことになってしまった
んだろう。私の心中がわかったように佐伯くんは再び口を開いた。

「伊東さんが須藤に水を持って行ってくれた時、寺崎が思い出した
ように携帯を開いたんだ。電話は通じなかったが……最新型のはデ
イスプレイにニュースが流れるだろう？　それで気付いてしまった」

真実を知るのがもう少し遅ければ——彼らは今も生きていたかも
しれなかったのに。何気なくベッドに接する窓の外を見ると、もう
空は真っ暗だった。

「おい、伊東はどう——ってもう起きてるじゃねえか！　言えよ……
……ったく」

目を覚ました私を見るやいなや須藤くんはベッドのすぐ側までと
んできた。荒々しい口調で叫ばれ頭がキーンと痛んだが、その表情
から本当に心配してくれていたのがわかり胸が温かくなるのを感じ
た。

「須藤くんも佐伯くんもありがとう……。ごめんね、大変な時にいつ、足手まといになっちゃってえ……」

色々な感情が込み上げ、みつともない涙声になる。

「前にも言っただろう、こんな時にそんなこと気にするな」

「うっ……ぐ……だって私、二人には迷惑かけちゃうしっ。パニツク起こした寺崎くんを落ち着かせるどころか……」

「それを言うなら俺の責任だ」

佐伯くんの声が急に大きくなる。驚いて涙で霞んだ目で見上げると、口をきつく結び目を見開いて小刻みに震える佐伯くんの姿があった。

「俺があの時……寺崎に食って掛かるようなことを言ったから。あそこで冷静にあいつを執り成していれば二人とも今頃、生きて……」

佐伯くんの切れ長の目の端から一筋の涙がこぼれ落ちた。確かにあの時の彼は彼らしくなかった。極度の疲れが彼の平常心を奪ったのだ。しかし人間なのだからあれが普通。むしろあれだけで抑え、自暴自棄にならずにここまで来たのだ。佐伯くんはすごい。そう伝えたかったが、言葉が上手く出てこない。ただ私は彼の手をとり両手で包み込むことしかできなかった。佐伯くんは崩れるようにベツドに顔を埋めた。

「お前らさ、あまり自分を責めるなよ……」

須藤くんがぽつりと言う。

「俺だってあいつらが死ぬ要因を作ったぜ。後悔してもしきれねえ
思いだ。だがよ、ここでいちいち立ち止まってどうする？　こんな
状況でゾンビ以外の人間もおかしくならないわけねえだろ。些細な
言動が誰かの破滅を招く。俺たちは聖人でも何でもないんだ、全部
救えるはずがない……。俺たちはただ、自分の気持ちに従って懸命
に生きればいいんじゃないのか？」

「……須藤くん」

彼の声は震えていた。いつも気丈に振る舞う彼の弱い一面。でも
その言葉は私の心に深く染み渡り、少しずつ気力が蘇るのを感じた。

しばらくして佐伯くんが静かに顔を上げた。目元が僅かに赤い。
しかしその表情は何かを決心したように力強く、目は強い光を放っ
ていた。

「須藤……ありがとな。その通りだ。俺たちは聖人でも超人でもな
んでもない。自分への憤りは拭えないが、ずっと引き摺るわけには
いかないよな」

佐伯くんが立ち上がり、窓の外を見ながら言う。

「これから何があっても自分を責めないことにしよう。ただ生きる
ことだけを考えるんだ。そして無事生き抜くことができたときは――
その時は、寺崎や清見さんを思い出そう。一生かけて後悔する」

私と須藤くんは「うん」と同時に声をあげこくりと頷き、顔を見
合わせた。いつも突っ張った態度の須藤くんが随分と素直な返事を
したものだ。

「あははっ……」

自然に笑いがこぼれた。つられるように須藤くん、佐伯くんが声をあげて笑う。何かが吹っ切れたようだった。

「まあこれから辛いこともあるかもしれないけどよ、気楽に行こうぜ」

「うん」

「そうだな」

少しの間沈黙が続く。それさえも可笑しく感じ、私はくっくつと忍び笑いをする。

「そうだ!!」

「ええ?!」

「どうした!」

突然叫んだ須藤くんにオーバーリアクションで佐伯くんが応じる。

「おい伊東、携帯見てみろよ。お前をおぶって歩いてた時しばらくの間バイブが鳴ってたんだよな。ゾンビを避けるので精いっぱいだったから確認はできなかったんだけどよ」

携帯……? 胸がドキドキするのを抑えて静かに携帯を開く。

——不在着信一件

「お母さんだ……！」

画面には『お母さん』の文字が大きく映し出されていた。瞬く間に顔に笑顔が広がるのを感じる。お母さんが生きている！ また生きて会えるんだ！

第十九話 家族（前書き）

佐伯のアパートに着き、とりあえず一段落です。次話でまた再びゾンビの徘徊する街へ出発します。

今回は残酷なシーンもなく比較的ほのぼの……ですが少々キャラが汚れてます（汗

第十九話 家族

じんじん痛む頭を持ち上げ、どうにかこうにか上半身を起こす。焦る指で何度もボタンを押し間違えながらも、ようやく着信履歴から発信を選択した。――鳴り響くコール音に胸が高鳴る。

『……皐月！？ 皐月なの！？』

「お母さん……？」

懐かしい声がした。もう何年も声を聞いていなかったように思える――実際はたった1日とちょっとだが。

『あんたさあ、災害用伝言ダイヤル使えってあれほど言ったでしょ？ ……ああでも本当よかった』

「あ、ごめん！ 忘れてたあ……」

お母さんは言葉の最後で涙声になって鼻を吸った。私も話しながら段々と涙が込み上げてきた。それにしても災害用伝言ダイヤルの存在をすっかり忘れていた。心配性のお母さんから日頃あんなに言われていたのに。

『今どこにいるの？』

「大学の近く。安全なところ」

『一人？』

「一緒に逃げてきた人というよ。同じ大学の」

ちらっと二人の方を見ると、佐伯くんは微笑みながら頷き、須藤くんも口角を上げニツと笑顔をつくった。

「お母さんたちは大丈夫？」

『……………』

「お母さん？」

急に心臓がドキツとした。お母さんの無事は確認したが――誠。誠は無事なのだろうか。佐伯くんが私の様子の変化に気付いたのか、眉をひそめ心配そうな顔をしている。

『…………お母さんは大丈夫。近くの小学校が避難所になってね、自衛隊の人達に守ってもらってるから。各地域に指定された避難所があるはず。あんたたちも早くそこに行きなさい。一週間以内に安全な場所に連れていってもらえるそうよ。今まで上手く生き延びてやってこれたんだから…………大丈夫よね？』

「…………うん」

お母さんは努めて明るい声を出している。言いたくないことがあるようだ。悪い予感が頭の中を駆け巡る。

「ねえ、誠は？」

思いきって単刀直入に尋ねた。お母さんは息を飲み、少し間をおくと話し始めた。

『誠はね、こんなことになった時、まだ家に帰ってきてなかったの……………』

「…………！　じゃあまだ高校にいるってこと？」

『そう。正午頃公衆電話から電話がかかってきて、お昼は友達と食べるって…………。全く、こんな時に携帯家に忘れるなんて信じられな

い、あの子は！ ……でももうしようがないことだから。あんたは自分の身を守ることに専念しなさい。いい？』

どう考えてもしょうがないと思っている声ではない。気丈な母が今にも泣きそうな声で無理してはきはき喋っている。

『お母さんだって誠のこと諦めたわけじゃないからね。誠の高校、設備が整ってるでしょ？ 不審者対策だっていつて校舎は高い塀で囲まれてるし、地域の避難所にも指定されてたはずよ。だったらきつと無事でしょ。あんたも誠も悪運の強さはお母さん譲りなんだから』

「高校……か」

誠は都心の私立高校に通っている。もともと都立高校が第一志望だったが、部活（誠はサッカー部だ）に入れ込みすぎて落ちてしまったのだ。家計を圧迫すると言ってお母さんに散々愚痴を言われ、罰として毎日皿洗いの約束をかわされたが。それでも部活に熱心なある意味真っ直ぐな弟をお母さんは本気で責めることはなかった。

『……あつ自衛隊の人が来た。配給かな？ ごめん、もう切らなきやだわ。毎日夜にメールを一本ちようだい、いい？ 電池が切れないう普通段は電源きつときなさいよ』

「わかった」

『……絶対生き残ってね。皐月が危険な目にあうと思うとどうにか なっちゃいそうなくらい辛いけど、お母さんには、何もできないから……』

「大丈夫だよ。お母さんも絶対生きて待っててね」

名残惜しいが、別れの言葉を最後に電話を切った。

「……はあ」

どうすればいいのかわからなくなった。お母さんは安全なところにいるし、誠は高校にいる。家に帰る必要は無いように思える――。

「弟くんはどここの高校にいるんだ？」

佐伯くんが突然そう聞いてきた。

「えっ？ ああ、聞こえてた？」

「伊東の母ちゃん声でけえのな。会話内容全部丸聞こえだぜ。恥ずかしい話題するときは気を付けろよ」

「あ……」

それじゃあ――いつの日かトイレを詰まらせたのは誰かについて電話で議論したのは回りの人に聞こえていたのだろうか。結局その時も誠がトイレトッパーが切れていたときにティッシュペーパーを大量に使ってそのまま流したのが原因だったが。あの時は私を気を使っていたがお母さんは大声で好き放題言ってたからな……。

「その顔……思い当たることがあるんだな？ 何だよ、教えろよ」

「いやいやいや、無理無理無理ですってー」

新しい悪戯を思いついたガキ大将のような顔で詰め寄る須藤くんを本気で避ける。いや、本当に無理です。きっと私の顔は真っ赤だ。

「須藤、やめろ。……で、伊東さん。どこの高校なんだ？」

佐伯も実は気になるんだろーと尚もしつこく言う須藤くんにはコホンと咳払いし、私に話の続きを促す。

「え、えと……私立晃東学園。知ってる？ サッカーの強豪校だよ」

「ああ、じゃあここから結構近いな。行くか」

「え、本当に!？」

地理が苦手な私は距離も何もわかっていなかった。出来すぎた展開に戸惑い一つも喜びが隠せない。

「伊東の母ちゃんが無事ならよ、そのまま避難所で救助待つのでもいいかな」

須藤くんが軽く言う。――でも。そうなると須藤くんの家には寄れない。私の家族の安全だけ確認して後は知らないなんて許されるわけがない。須藤くんは私の胸のうかがわかったのか、話を続けた。

「さっき親父からメール来たんだよ。皆無事だよ。……ったく、くたばってくれてよかったんだがな」

須藤くんの家族が生きていたことに顔を輝かせる間もなく続けられた言葉に、反応に困ってしまった。一体彼の家庭に何があったのだろう。もう聞いてもいいのだろうか。

「……あゝ、おい佐伯。エロ本どこだ？ やっぱ人間、生命の危機に直面すると本能が働くのな」

「お、お前っ何の脈絡もなく急に何を言い出す！ 女性の前だぞ！ 控えろ！」

「ああ、今時本はねえか。お前古風だからと思ってよ……DVDでもいいぜ？」

「ないっ!!」

話を切り出そうとした時、それを見越したように須藤くんが佐伯くんにとんでもない話題をふり、とても言い出せる雰囲気ではなくなってしまった。それにしても須藤くん――ダイレクトすぎる。佐伯くんは真っ赤になって必死に否定している――彼、見るからにこういう話題に弱そうだ。ちょっと可愛い。須藤くんはそれをわかっていてわざと口にしたのだろう。顔が意地悪く笑っている……。

「ねえ、佐伯くんの家族はどうなの？」

佐伯くんが可哀想になって話題を戻したが、あまりにも話の空気に落差がありすぎることに気付く。ちょっと失敗したかも。須藤くんは「伊東あまり動じねえな」とつまらなそうだ。

「伊東さんが意識を失っている間に両親から連絡があった。向こうでも凄まじい被害だそうだが、軍に救助されたそうだ。…ただ、姉とは連絡がつかない」

流石佐伯くん、切り替えが恐ろしく早い。お姉さんのことは心配だが、佐伯くんが言うには簡単に死ぬような人じゃないそうだ。どのような人なのか気になるところだが、望みを捨てずに気長に待とうということでは終わった。

「そういえばさ、今国はどう動いてるのかな」

「ああ、さっきテレビニュースを見ていたんだが……永田町は被害は免れなかったものの機能しているようだ。あそこは普段から警備が厳重だし土日となると人は極端に少ないからな」

「放送局も無事なんだ！」

「いや、いくつかは壊滅したようだぜ。今は半分くらいの局が動いてる。まあヘリで中継もしてるし、案外情報網は生きてるみてえだ」
「ゾンビの発生理由については今調査中らしい。国の対策としては、なるべく避難所に移動し、遠かったら家で待機するようにとのことだ」

二人が得た情報を事細やかに説明してくれた。思ったよりも事態は絶望的ではないようだ。もしかしたら日常生活に戻れる時がくるかもしれない。

「ところで伊東さん、具合はどうだ？」

「……うん、大丈夫！」

少し考え佐伯くんに笑顔で応える。正直まだ頭が痛いけど明日になれば歩けるようにはなるだろう。

「無理しても危険を招くだけだぜ？」

「う……」

三人で話し合い、今日はとりあえず寝ることにした。ゆっくり休んで明日中にルートを決め、時間を見計らって出来る限り早く出発する予定だ。誠の安否を早く確認したいが、今高校で保護してもらっているかどうかでもう運命は決まってしまうているだろう。それにきっと大丈夫な気がする。誠は生きている。

佐伯くんと須藤くんはリビングで寝るそうだ。ベッドを独占してしまい申し訳ない。二人は私に「おやすみ」と声をかけると電気を消してドアを閉めた。私は引きずり込まれるように夢の世界へと入って行った。

第二十話 平和（前書き）

これで第二章が終わりです！ この後また番外編を挟んで第三章へと移ります。登場人物も増え、激しい展開になると思われます……ます！

そして今回ほど平和な回はないでしょう。ほのぼのしちゃってます。人が死んでいるのに！ と思われるかもしれませんが、登場人物たちも息抜きしないと精神崩壊しちゃうと考えてお許しください（へーへ；）

あと食事やお風呂、衣服などリアリティを求めると大変ですよ。

第二十話 平和

「……伊東さん、起きて」

ぐっすり眠っていたところを揺り動かされ、私は重たい瞼を僅かに持ち上げる。ぼんやりと映し出される佐伯くんの顔。……近い。涼しげな目を縁取る睫毛の一本一本まで見える。

「……ん、どうしたの？」

佐伯くんは柔らかく微笑み、何も言わずに私の手を取り立ち上がる。私も彼に支えられながら体を起こした。頭の痛みはきれいさっぱり無くなっている。佐伯くんに引かれるままに私はリビングへ向かった。

「伊東、起きたか」

真っ白な壁に囲まれた清潔感溢れるリビングのソファーに須藤くんが足を組んで腰かけていた。私が来るのを待っていたかのように立ち上がる。

「さあ、行こう」

佐伯くんはそのまま直進し、玄関のドアに手をかけた。どこに行くっていうの？ 危ないよ……。そう声にする間もなくドアが開かれた。瞬間、眩しい光が薄暗い室内へ溢れ出す。暖かい、朝日。

「え……嘘……」

アパートの廊下から見える正面の道路は血溜まり一つなかった。ゾンビもない。向かいの建物から人々が出てきていた。皆訳のわからない様子で辺りを見渡している。

「悪夢は、終わったんだ」

私の肩にゆっくりと佐伯くんの大きな手が乗せられる。信じられない思いで須藤くんを見ると、彼もいつもの笑顔で私を見ていた。

「終わったんだ……何もかも。あんな悲しみや苦しみは、もう味わうことはないんだね……」

胸にじんわり広がる安心感。幸せを噛み締めるように私は言葉を紡いだ。

「――シャワー浴びるか？」

「……はい？」

あまりに唐突な言葉。そして先程から頬に感じる冷たい何か。

「あれ？」

須藤くんが私を見下ろしている。色素の薄い髪は水に濡れ、いつものように逆立てておらず下ろしてぺったりとしている。どうやら彼の髪から水滴が垂れていたらしい。

「なんだあ、夢かあ……」

私はまだベッドに寝たままだった。幸い頭部の痛みは大分引いたようで、私は再びゆっくりと体を起こした。

「って、須藤くん！ 何で上半身裸なのっ！」

「シャワー使えるぜ？ まだライフラインは生きてる」

悪びれもせず飄々とそう言ってのけた須藤くんはまだ水滴のついた体に白タオルをかけ、身に付けているものは派手な色をしたボクサーパンツだけだった。鍛え上げられた上半身は日に焼け、ずっと逆三角形を描いている。いやいや、三角形でも四角形でもどうでもいい。

「もーっ女の子の前で！ 向こう行ってー！」

「なんだよ、伊東は耐性あると思ったんだがな」

「ありませんーっ」

須藤くんはわかったわかったと素直に部屋から出ていった。マーブル模様というのか、赤や紫、青などドキつい原色が入り雑じった柄のボクサーパンツがまだ網膜に焼き付いている……趣味が悪すぎる。

「はぁーびっくりした。……で、結局シャワー浴びろってことだよね？」

動揺を隠すように独り言を言いながら、須藤くんカッコいい体つきしてたなーと思い返す。――て、私も何考えてるんだか。私もシャワーを浴びさせてもらおう。そういえばあれだけ動いたのにまる一日、汗一つ拭いていなかった。

「おはよお……」

「おはよう。頭はもう大丈夫そうだな。よく眠れたか？」

リビングに入ると、同じく髪を濡らした佐伯くんがすっきりとした顔で挨拶を返した。

カーテンが閉め切られた仄暗い室内にテレビの光が浮き出ている。どこかの避難所から現場中継らしい。公民館らしき建物を囲むように頑丈なバリケードを築き、ヘルメットを被った迷彩服の屈強な自衛隊員たちが機関銃を手に避難民たちを誘導していた。その背後では避難民を乗せた輸送車輛が到着し、ゾンビに噛まれていないか厳重にチェックし始める。

「うわぁ……すごいっ、ゴツッい車ー！ 日本にもあんなのあったんだねー！」

「普段あまりお目にかかれるもんじゃねーからな。日本てのはよ、戦争とは無関係な平和主義な国ですよーて顔してるが、海上戦力は米国に次いでアジア太平洋地区二位なんだぜ……ってあんま意味ねえ情報か」

タンクトップにタイトなジーンズというラフな格好に身を包んだ須藤くんが応える。髪はもう既にワックスで逆立てられていた。

「じゃあ、ゾンビを根絶やしにするのも不可能じゃないってこと？」
「それはどうかな……。何か嫌な予感がするんだよなあ。俺だけか？」

「そう心構えていた方がいい」

難しい顔をして佐伯くんが立ちあがった。

「ルートを決めなきゃいけないな。……地図を探してくる。伊東さんはシャワーを自由に使ってくれ。最後になってしまっでごめんな」
そう言う佐伯くんはさっきまで私がいた部屋に入っていた。
そうか、あそこは佐伯くんの寝室だったんだ。男の子の部屋なんて弟を除いたら十年ぶりくらいかもしれない。

「さーて、入ろつと！」

思い切り伸びをしてお風呂場へ向かうと、後ろから視線を感じた。

「須藤くん、見ないでよ？」

「見ねえよ」

「じゃ、あっち行つてて」

「……えー」

「須藤、地図が見つからない。手伝ってくれ」

『えー』じゃない！ と突っ込みを入れようとする間もなくドアが勢い良く開けられ、ずかずかと大股で現れた佐伯くんは須藤くんは連行されていった。

……仲良くなったなあ。死と向かい合わせのこの世界でこんなに微笑ましいこともあるもんだと、私は静かに笑みを浮かべた。

汗でじっとりとした服を脱ぎ、脱衣所に取り付けられた三面鏡に映った自分の顔を見る。

鎖骨までのびたぼさぼさの髪。一度も染めたことはないが元々ダ

ークブラウンに近い色のその髪は、電球の光を浴び明るく艶めいている。顔は少しやつれてはいるが、一晩ゆっくり眠ったおかげでそれほどでもない。昨日は相当酷かっただろうが。

でもやはりお母さんの無事が分かったことと、三人で今後の覚悟を決めたことが大きいだろう。あとテレビのニュースでまだ国が機能していることを知ったのもある。少し明るくなった未来を思い浮かべ、私は清々しい気持ちでお風呂場のドアを開けた。

シャワーですっきりしてバスタオルで水分を拭き取っていた時は
っと気付いた。

「佐伯くん！」

少ししてドアを開ける音がし、佐伯くんがドア越しに近付いてきたのが気配で分かった。

「どうしたんだ、伊東さん」

「……服がないのっ」

そう。よく考えたらわかることだった。私は荷物を大学に置いたまま逃げてきたのだし、そもそも着替えなんて大学に持ってきていない。下着もないし……。

「そ、そのことなんだが……洗濯機の上に俺の服があるだろ？ 悪いけどそれで辛抱してくれないか……？」

「あ、これ？」

洗濯機の上に綺麗に折りたたまれたピンク色のシャツと——淡い色のジーンズがすぐに目についた。

「街に出たら婦人服を探しに行こう。……あと、本当に申し訳ないんだが、下着は水で濯ぐとかして……」

「大丈夫大丈夫、りょーかい。ありがと」

最後の方はごによごによとしてほとんど聞き取れなかったが、何だかいじめているようで可哀想になり早めに話を終わらせることにした。

それにしてもピンク色のシャツなんて……さっきの須藤くんのパンツにしても——きつと佐伯くんから借りたものだろうから——彼意外とすごい趣味してるんだな。

シャツを被るとやはり小柄な私には大きく、少し短めのワンピースのようだ。気持ち悪いが洗いたての水でびしょびしょな下着の上からジーンズを履いた。

「はーい、おまたせ」

「おお、まあそんなにおかしくはねえけどよ……やっぱすげえ色してんのな」

……やっぱり須藤くんもそう思ってたんだ。

「それ全部、海外に住む両親が送ってきたんだ……。俺には似合いそうもないから……ずっと着ないままどうすればいいのかわからず保管しておいたんだが……新品だからと思って……すまない」

佐伯くんは顔を真っ赤に染めながら本気で申し訳なく思っているようだ。私も須藤くんもそんなことない、素敵素敵と根も葉もない

フォローをする。

「それよりよ、何か食い物ねえか？ 昨日の朝に菓子食っただけだしよ、腹空いただろ？」

「そうだな、ルートを考える前に朝食にするか。非常食もあるが……今は日持ちしないものを消費しておこう」

まだ冷蔵庫も動いていて、佐伯くんはそこから卵や納豆、牛乳など色々取り出す。それから手際良く炊飯器からお米をつぎ、テレビの前の低いテーブルに並べる。三人座ったところで手を合わせ「いただきます」と行儀よく挨拶をする私と佐伯くんを尻目に須藤くんは物凄い勢いで食べ始めた。

「ちょっと、そんなご飯いっぺんに食べたら喉に詰まるよ」

「らいじょーうらいじょーう」

「食べながら喋るんじゃない」

すごく平和な会話。こんな日がずっと続けばいいのに。しかし現実、こんなご飯が食べられる時はもう二度とないかもしれない。

食べるのが遅い私がようやく箸を置き、少しして佐伯くんが話を切り出した。

「地図を見てくれ。今俺たちがいるのはここ……大学から少し離れた駅の近くだ。そして伊東さんの弟くんがいるらしい高校は……ここだ。線路沿いに西に進んでこの大通りで曲がり……」

佐伯くんが地図にマーカーで線を引いていく。今いるアパートか

ら誠のいる晃東学園まで――確かに結構近い。線が折れる回数は十回を下らないが、それでも半日あれば十分な距離だ。――それは何もなかった時の場合だが。

「一日はかかるだろうからな。それに避難所は夜に避難民を受け付けないらしい。今日の昼ごろ出発して夕方までに安全な寝床を探し、一晚をそこで越して翌日の昼に着くようにするか」

「いいんじゃないの？」

「うん、いいと思う！」

「よし、決まりだ。非常食など必要な物は昨日の夜に詰め込んでおいたから、あと二時間くらい情報を確認しながらゆっくり――」

急に佐伯くんが黙り込んだ。不思議に思っただうしたのか聞こうとしたが、すぐに佐伯くんが静かにと手ぶりで伝える。耳を澄ますと……どこからか、微かに人の声がする。甲高い――悲鳴？

窓際にいた須藤くんが即座にカーテンを開け、下の様子を確認する。続いて佐伯くん、私も覗きこむ。

「……あっ！」

アパートの下、車が二台通れるか通れないかの狭い通路に乗用車が一台。それを死人のように真っ白な肌をしたゾンビが囲んでいる。バン、バンと車のガラスを叩く音。常人がすれば痛くてすぐに止めるだろうが、痛覚が欠如したゾンビ達は躊躇うことなくリミッターが外れたその脅威的な力で叩き続けている。

「まずい、ひび割れてきてんじゃないか？」

「中には誰がいるのっ?!」

「……三人いる。ゾンビが邪魔でよくわからないが。さっきからパニックを起こして誰かがずっと喚き立てているようだ。あれじゃあ時間の問題だな」

そう言っつて佐伯くんは窓を離れる。

「……助けにいこうよ!」

佐伯くんが彼らを見捨てる可能性がよぎった私は縋るように佐伯くんの背中に呼び掛けたが、すぐにそんな自分を恥じた。佐伯くんは用意していた鞆を担ぎ、手には竹刀ではなく——淡い色合いが美しい、芸術品ともいえる木刀が握られていた。鰐付きで、形は本物の刀のようだ。

「稽古用の本枇杷の木刀だ。古来より剣豪に愛用されてきた……威力は計り知れないぞ。実戦は初めてだが断言できる」

食糧や缶の詰め込まれたスポーツバッグを手に、ドアの方へと進む佐伯くんを追う。

「予定より出発が早まっちゃったな」

後ろを振り向くと須藤くんが鉄色に鈍く光る万能斧を片手で高く掲げていた。

「行くぞ!」

佐伯くんがドアを開け、私たちは再びゾンビの蔓延る街へと飛び出した……。

番外編 須藤英雄（前書き）

昨日に続き今回も長文です。最近よく筆が進みます。

今回は番外編ということで、佐伯のアパートに着いた後の、須藤のこれまでの人生をまじえたお話です。本人にも喋らせていますがすごくありがちな展開です（笑）

あと恋愛要素を少し入れてみました。タグに恋愛を入れてあったのですが全然それらしき描写をしていませんでしたね^^;

この後番外編をもう一本挟むか挟まないかして第三章に進みます。

番外編 須藤英雄

白いタイル張りの、少し古めなアパートの三階。佐伯は砂が大量に入り未だ涙を流し続ける両の目を瞬かせ、靴から手探りで鍵を取り出すとドアを開けようとするが――なかなか鍵穴に入らないようだ。

「いい、俺がやる」

「……ああ、すまない」

俺は手にした斧とスポーツバッグを床に下ろすと――前傾姿勢になっておぶっている伊東を落とさないよう片手で支えながら――鍵を開けた。

ギィツと錆び付いた音をたてながらドアが開く。中は予想外に綺麗だった。リフォームしたばかりなのか――壁が眩しいくらい白い。家具も少なく、必要最低限の物しか置いていないようだ。

「お前、女連れ込んだことないだろ」

「……そんなことどうでもいいだろう」

凶星だな。別に部屋から推測した訳じゃあなく鎌かけたただだが、思った通りひっかかってくれた。

俺は靴を脱ぐと嫌味なくらい清潔感漂うリビングに上がり込んだ。小型なテレビの正面にソファ―と、その間に低いテーブルがあった。

「おい、伊東はどこに寝かせればいい？」

「俺の部屋にベッドがある。ドアは一つしかないからすぐわかるは

ずだ」

佐伯は俺が置きっぱなしにしていた斧とバツグを部屋に運び、ドアを閉めた。

「ああ、わかった。目、洗っとけよ」

辛そうに目を手で覆う佐伯にそう声をかけると俺はドアを開け部屋に入った。白いシーツに紺の掛け布団。洗濯したてであろう、皺も染みも一つもないその上に伊東を下ろす。

伊東は口を僅かに開け静かに息をしていた。長い睫毛が濃い陰をつくり、赤い唇から白い歯が覗く。俺はシーツに広がった長い髪を撫で付けると掛け布団をかけようとして――捲れ上がった青いワンピースから見える無防備な白い太股に目が釘付けになる。

「おっと、やべえやべえ」

俺は邪な気持ちを振り切るように一人呟くと伊東の首もとまで掛け布団をかけた。

「遅かったな」

「ああ。会った時も少しは思ったけどよ、改めて見るとやっぱり伊東って可愛いよな。思わず襲いかかりそうだったが堪えたぜ」

得意の軽口を叩きながら部屋のドアを閉めソファーにドカンと腰を下ろす。体のあちこちが軋むように痛い。俺もまだまだトレーニングが足りねえな……。

「互いを想い合っているなら構わないが……無理矢理は止めろよ。こんな世の中だ、愚かなことを仕出かす暴徒も現れるだろうが……知り合いを殺された辛さの上にそんなことされたら立ち直れないくらい心に傷を負うぞ」

眉間に皺を寄せて苦々しい顔で話し始めた佐伯をぽかんと見つめる。おいおい、そんなに俺が信用できねえのかよ。

「しねーよ。つーかお前ら付き合ってんじゃねえのかよ」

「なっ……お前もしかしてあれからずっと勘違いしてるのか？」

「違えのか？」

「違う！俺と伊東さんはこの騒動の最中に出会ったんだ」

頬染めてやがる、わかりやすい奴。野郎が照れたとこなんて見たくもねえけどな。まあそんなところは面白いし、くそ真面目でいい奴だとは思うが。

「まあ……素直でいい子だとは思うけどな」

あ、早くもデレやがった。色恋事にどんくさそうないつらの行く末を思い浮かべ、はぁーと重い溜め息をつく。すると佐伯は突然真剣な表情になり、言い辛そうに口を開いた。

「……あまりこういうことに首を突っ込むのは好かないが状況が状況だ。須藤、お前交際している女性はいないのか？興味本位で聞いているんじゃない。会うべき人はいないのか」

「いねえよ」

心底意外そうな顔をされたので続ける。

「真剣なご交際した相手なんざ一人もいねえな。遊び相手ならいくらでもいたが」

「お前って奴は……」

呆れたように首を振る佐伯をよそ目に俺は今まで相手にしてきた女たちを思い返そうとするが、誰一人顔を思い出すことができなかった。ただ一つ覚えているのは、どいつもこいつも精神が軟弱で男に媚びることしか能がない卑しい女だったってことだ――あの女のように。

「須藤……?」

無意識にすげえ顔をしていたらしい。あの女のことを考えるといてもこうだ。俺もまだまだな……。そんな俺に佐伯は射るような視線を投げかけてくる。何となく気まずくなつてさっと目を逸らす。

「須藤、お前一体何があった。無理強いはしないが……心に隙があるとこれから思わぬ事態を招くことになるとも言えないからな」
「別に……」

そう言いかけて、俺は何を思ったのか考えを変えた。気付いたら自然と口に出ていた。

「あの女が……俺の家族を滅茶苦茶にしたんだよ」

自分でもぞつとするほど低い声だった。佐伯も尋常じゃない空気を感じ取ったのか黙って俺の言葉に耳を傾けていた。

「俺の両親は離婚した……今いるのは新しい母親だ。兄弟も下に四

人いるが、全員腹違いのガキどもだ」

ギリギリ音がして何かと思えば自分の齒軋りだった。肩はわなわなと震え、拳は固く握られている。……まったく、いくつになっても変わらねえ。そんな自分自身にイライラしてくる。

「まあ珍しいことでもなんでもないだろうがな。いつまでも引き摺ってよ、我ながら女々しい野郎だぜ」

「そんなことはない」

佐伯は尚も真っ直ぐな瞳を向けてくる。不思議と嫌な気分じゃあなかった。

「信じられねえだろうが、俺の家は結構裕福な家柄だよ。親父は最高峰の大学の理系卒……いわばエリートって奴だな。一人息子の俺も当然ながら小学校に上がる前から熱心な教育を受けてきた……ほとんど親父の意思だったが」

『あなた……ひでちゃんは遊びたい盛りなんですから』

小学四年の頃だったか。新しいゲームソフトの発売日か何かで遊びたい気持ちが叱られるのを恐れる気持ちを勝り、俺は英会話のレッスンをサポート。弾む足取りで家に帰った俺を待っていたのは容赦ない親父の鉄拳だった。その時お袋が言ったのがこの言葉だ。あの頃の記憶はほとんどないが何故かこれだけは今も忘れない。そしてその後の出来事も。

親父は美しい日本人形のように整ったお袋の顔を、思い切り平手打ちした。お袋は衝撃に耐えられず柱に勢いよく頭をぶつけ倒れた。そして泣きながら駆け寄った俺の頭をお袋は涙一つ流さず、悲しげ

な笑顔で撫でた。

「機械のように冷酷な父親だったな。ほとんど家で顔を合わせることもなかったし……俺は親父の強要する勉強をするのが怖かった。俺もああいう風になってしまふのかと思うと……たまらなく怖かったんだ」

だが皮肉にも俺の学力は天性のものがあつた。難関と言われる私立の小学校、中学校とエスカレーターで上がったが、学年で三番以内にいらなかった日はなかった。あの頃の俺は従順で……何も疑うことを知らなかった。その純粋さが母を殺したんだ——今になつてわかる。

忘れもしない中学一年の夏。夏休みだと言うのに遊びもせず塾に通いずめだった俺が、その日間違って休講日に塾に行ってしまった。授業が無いことを知り嬉しくなった俺は冷凍庫に冷やしてあるアイスを思い浮かべ、にんまり口笛を吹きながら家へ向かった……と思う。

家へ帰ると妙な空気が漂っていた。リビングからすすり泣くような声が聞こえる。

『英雄という可愛い子供の存在があるのに……何故ですか！ 私たちよりその卑しい女の方が大切だとしても——』

お袋の声はそこで途切れた。親父が殴ったのだ。閉められたドア越しにでもわかった。テーブルの上のものが派手な音をたてて床に落ちる。親父は少しでも自分が責められるとすぐに手がでる。それ

は今でも変わらない。自分をいい気持ちにさせる相手にしか興味がないのだ。

『いや、いやです！ 汚らしい手で触らないで！ いや、いやー！』

お袋が半狂乱になって叫び声をあげる。耳をつんざくようなその声が恐ろしくて、恐ろしくて……俺はその場から逃げ出した。

「お袋は死んだよ。俺が中学に上がってすぐの……夏だったかな。交通事故だった。それからすぐやたら豪勢な高級住宅街に一戸建てを買ってよ。のこのこと俺の前に姿を見せやがったんだよ、あの女が」

お袋はきつと気が病んで注意力散漫だったのだろう。あの女と親父が手を組んで殺したんだと思った時期もあった——いや、今も心の奥底でそう思っているのかもしれない。

それからの生活は思い出したくもない。家事もできなければ教養もない、若さだけが取り柄のあの女は——天才的な自分を着飾る技術と親父への媚びで——俺の生活を侵食していった。親父もいい気分であの女に好きなだけ贅沢品を買い与え、次々と弟や妹が生まれた。もはや家に居場所はなかった。

「それからは……わかるだろ？ 中学生の身分で酒煙草と盗みと暴力と……荒んだ毎日だった。高校二年までそれが続いたかな」

親父もあの女もそんな俺には無関心で……問題が自分たちに降りかかってきそうな時は如何にも迷惑そうな、ゴミを見るような目で俺を見た。問題は全て有り余った金で解決したんだろうな。ただ自

分を見失いたくなかった俺は薬物には手を出さなかった。それだけは幸いだった。

「そんな時ボクシングを始めたんだよ。街中で絡んできた野郎をぶん殴ってやったらもう一人が『俺の通うジムにはお前なんかよりもっと強い奴がいる』なんて言いやがったからどんなもんかと思ってな。小汚ねえビルの1フロアを貸しきっただけのトレーニング施設だよ」

学業に加えこういう才能も俺にはあったようだ。日頃実戦を積んでいたとはいえ何も技術的なものを学んでいなかった俺だったが、そこにいたほとんどの奴がてんで大したことなかった。しかしそこには一人の男がいた――俺が今でも尊敬してやまないボクシングの天才だ。

「やたら険しい顔をした富士さんと呼ばれる初老の男がいた」

「富士さんか」

「そうだ。俺の粗暴な屑みたいな人生は富士さんに出会ったことで変わった」

彼は強かった。ありがちな展開なのでそれからの出来事は割愛するが、俺は彼に師事した。俺の頭からこの世への憎しみ、家での孤独感は抜け、ただただボクシングに打ち込む毎日を送った。学校にはほとんど通っていなかったが卒業できたのは親父が金を払っていたからだろう。それから数年後、富士さんは穏やかな余生を求めて田舎暮らしを始めたそうだ。

「それからはまあ足を洗って、一年浪人して六年間の穴を埋めるべくそこそこ勉強したわけだが。何もしなくても親父が適当なとこに

金で入れただろうが、もうこれ以上俺の人生を親父に手出しされなくなかった」

「そうか……己の道を見つけ出したんだな」

「そう格好いいもんじゃあねーよ。……悪かったな、長話して」

あまりにも人に自分の内側を見せすぎた。俺はきまりが悪くなり用を足そうと立ち上がった。

「伊東さんはお前が心の底では家族に会いたいと思っている。だが話を聞くと家に寄っても何もいいことがないように思えるが」

「そうだな……ただ一つだけ気がかりがあるとすれば……ガキどものことかな」

「お前の義兄弟のことか？」

「そうだ。あいつらが生まれた時は俺も荒れていて……殺そうとせんばかりの勢いだったからあの女も俺に近付けたくなさそうだったんだが。最近妙に懐いてきてよ……大学に上がってからは会うことも滅多になくなったが。親父とあの女の血が流れていると思うと気持ち悪いが、まあ……少しは可愛いと思う……かもな」

急に恥ずかしくなってそそくさと洗面所に向かう。最後に見た佐伯の顔はにんまり笑ってやがった。

それから数分後……使い道もなくすっきり存在を忘れ去られていた俺の携帯に、親父からメールが届いたのだった。

登場人物紹介2

第二章の登場人物

・清見 きよみちかこ 千香子

> i 2 9 4 5 5 — 3 5 7 0 <

大学? 年生 1 6 0 ?

コンビニでバイトをしていた女子学生。

真面目な性格で冷静。

・寺崎 てらさきかいと 海斗

> i 2 9 4 5 6 — 3 5 7 0 <

高校生? 1 7 0 ?

コンビニでバイトをしていた男子生徒。

今時の若者といった風貌で率直な性格。家族思い。

■ ゾンビ

普通の人間が突如血肉を求めさまよい歩く理性のない化け物と化した。

瞳は白く濁り焦点が定まらず、水死体のように真っ白な肌をしている。

知能はほぼなく反応も遅いため、見つけた獲物をゆっくりと歩くスピードで追う。

ただし身体のリミッターが外れ、力が物凄く強い。

段差に気付かず落下したり、生存者に思い切り殴られたり刃物で刺されても

痛みを感じず平気でいるため、身体の損傷が激しい。

視力が極端に弱く主に聴覚と嗅覚で獲物を察知する。

第二十一話 殺戮（前書き）

第三章に突入しました！　ここまで読んでくださりありがとうございます。

活動報告にも書きましたが一応報告させていただきますと、第一章の第一話冒頭に挿絵を追加いたしました。何とか変な癖のある妙にリアル？　な絵柄なので、興味のある方のみご覧下さい。^；

では失礼いたしました！

第二十一話 殺戮

足がもつれそうになりながらも、前を進む佐伯くんたちを追って階段を駆け降りる。幸いこのアパートの階段にはゾンビはいないようだ。各階の廊下に何体か彷徨っているのが見えたが、あれが気付くより早く私達の姿が階下に消えるため問題はなかった。

「……この家ともお別れだな」

アパート前の通りに出た時佐伯くんがそっと呟いた。そうか、もうここに戻ってくることはないかもしれないんだ。こう言ってしまうと再び日常が訪れることはないと認めているようで辛いが――。

さっき見えた通りはこちらの反対側だったはずだ。私達はゾンビが角から飛び出してこないよう十分注意しながら車のある通りへ続く細い道を抜けた。

「……あっ！」

思わず声に出してしまった。シルバーのメタリックカラーの車を囲むゾンビの群れ。車の中が見えないくらい密集している。ほんの少しの間微かに見えたフロントガラスは蜘蛛の巣のように細かくひび割れており、突破されてしまうのはもう時間の問題だ。籠った悲鳴が断続的に聞こえる。外でさえこれなのだから中は絶叫が響きすごいことになっているだろう。

「通りの向こうからゾンビが集まってきている！ 伊東さん、頼んだ！」

「うん！」

私はスポーツバッグから空き缶を幾つか取り出すとありったけの力を込めて通りの奥に投げた。反対の方向にも同じように投げる。悲鳴が止まなかったため、何度か繰り返して近付かせないようにしなきゃいけない。

とりあえずこれでしばらくの間はゾンビの接近は防げるだろう――二人の状況が気になり振り返って車の様子を確認する。

……ガシユツツ!!

硬質な音をたてて佐伯くんの木刀がゾンビの頭を強打した。頭蓋骨がパッキリ割られたゾンビが脳髓を撒き散らしながら倒れる。車を挟んで反対側では須藤くんが斧でゾンビの額を叩き割っていた。既に二人の足元には何体もの死骸が転がっていた。ふとそれらの手に目が留まる。指が折れ全体が腫れ上がり、紫色に変色している。手の骨が粉々に碎けるまで窓ガラスを叩き続けていたのだ。その執念深さに背筋がぞっと凍りつく。

「おらああああっ!」

須藤くんが大きな叫び声をあげて車にへばりつくゾンビの頭を粉砕した。内容物が窓ガラスにビシャアツと付着する。

「おい須藤、落ち着け!」

叫び声につられて私達の方に寄ってきた一体の首に突きを食らわせながら佐伯くんが言う。竹刀と違い木刀での突きは相手を即死に

追いやる程の威力があるようで、ゾンビは一瞬のうちに命を絶たれその場に崩れ落ちた。

「奴らを誘き寄せてんだよっ！」

須藤くんがそう叫びながら一体の顔面に斧の刃を打ち込んだ時、もう既にゾンビは一体も動いていなかった。ゾンビの動きが鈍いのが私達が生き残るのあたった唯一の救いだ。

「……はあ、はあ」

「須藤、やり過ぎだ」

「……お前みたいに冷静に殺れるほど俺は器用じゃねえ」

「……………」

佐伯くんは僅かにピクリと眉を動かしたきり黙り込んでしまった。ちょっと危ない展開かもしれない……。どうするべきかと二人の顔に視線を何度も往復させていると、少しして須藤くんが気まずそうな顔で渋々といったように口を開いた。

「……悪い。少しでも平穏な時間を取り戻しちゃったせいかな……。また殺すのが怖くなってきやがった。ああでもして自分を昂らせなきゃ手が止まりそうだった」

「わかってる。だが音をあげる危険性はお前も十分理解しているはずだ。今後は気を付けろよ。早く完璧に慣れることだ」

二人の会話に集中していたが急にはっとして慌てて周囲の様子を覗く。……よかった。転がった缶を追いかけて行ったのか、ずっと向こうの方でゆらゆらと揺れる数体のゾンビが確認できた。

……ボタンッ

「ひっ！」

突然近くで聞こえた物音に心臓が波打つように大きく鼓動し、体ごと跳び跳ねる。二人も危険を感じて咄嗟に身構えた。

音をたてたのはゾンビではなかった。車のドアが開かれ――赤い髪を肩につく程度に切り揃えたスラリとした女の子が血の海の中に立っていた。大人っぽい顔立ちで、猫のようなアーモンド型の目を見開きこちらに射るような視線を向けている。

「……奈美、よくそんなところに立てるなあ」

中からもう一人が顔を覗かせた。癖のある黒髪の眼鏡をかけた少年だ。血溜まりを避けるようにしてそっと地面に降り立ち、こちらを恐る恐る見てくる。

「大丈夫か？」

少しの沈黙の後、佐伯くんが口を開いた。

「……ええ、助けてくれてありがとう。でももう少しで死ぬところだった」

奈美と呼ばれた女の子は口元にひきつった笑みを浮かべて礼を言うのと、周囲を見渡した。かつては閑静な住宅街だったその通りは惨たらしい殺戮死体が無数に転がる地獄絵図と化している。奈美さんは口をきゅっと結び気丈に振る舞ってはいるが、ショートパンツか

ら覗く長い足を微かに震わていた。

「……この人たちは何者？」

「はあっ！？ 何言ってるんだお前」

須藤くんが素っ頓狂な声をあげる。それに気を悪くしたのか奈美さんは綺麗な顔をムツと不機嫌に歪ませた。確かにゾンビが発生して三日目なのに事態を把握できていないのは少しおかしいとは思うけれど……須藤くんたらデリカシーがなさすぎる。

「言葉の通りだけど？ 車で通学してたらこの人たちが近づいてきたの。危ないと思って車を止めたらくさん群がってきてこの通り襲われたってわけ。で、何なの、この人たちは」

彼女が須藤くんに負けず劣らずの饒舌ぶりを見せる。言い返して発散できる人で良かった。

「君たちは今起きてることを何も知らないのか？」

「ええ」

こりゃ厄介なのを助けちゃったな〜とぼやき始めた須藤くんの口を慌てて押さえる。

「……なあ、いくらこの人たちがおかしかったとはいえさ……この殺し方は普通じゃないって」

少年が奈美さんに耳打ちをする。ゾンビを倒した私達に対しても心底怯えているようだ。元々目つきの悪い須藤くんと目が合うと少年はひいっと短い悲鳴を上げて後ずさった。

「この『人』じゃあない、これは『化け物』だ。そう割り切らなきゃお前ら早死にするぜ？」

須藤くんが呆れたように言う。二人はもう一度足元の死体に目を向け――傷だらけの体、内臓が飛び出た腹、膜を張ったように白く濁った目――化け物と形容するのに相応しいそれらを少しの間じつと眺めた。

「うげえええーっつ」

少年が横を向き足元の血溜まりに嘔吐した。酸っぱい臭いが辺りに立ち込める。

「確かに……化け物、だね。あなたたちの方がまともだってことは誰が見てもわかる。まあ優子が噛みつかれた時点でこいつらが異常だとは思ったけど」

「噛まれた……だって？」

「ええ。最初は一人ふらふらと近付いてきたもんだから病人かと思っただけ、ドアを開けて声をかけたわけ。そしたら急にそいつ優子に襲いかかってきて。変質者だと思って殴り倒したんだけど地面に這いつくばって優子の足首に思い切り噛みついたんだよ！ それから優子ショックでパニック起こしちゃって……今はだいぶ落ち着いているけど。ほんと何だっというの！？」

すごく嫌な予感がした。ゾンビに一回でも噛まれたら――ゾンビになる。仲の良い友達が急にゾンビになったら。何も知らないこの人たちは殺すことなんて絶対できない。

その時、少年の背後で何かが動いた。

第二十二話 転生（前書き）

お話も三分の一くらいまで進んだのかなーって感じですよ。二分の一かもしれないし四分の一かもしれないませんが↑

昔三日坊主だった私がこんなに続けられるなんて奇跡のようです。ここまでできたら完結させなくては！^^ 頑張りますので、最後までお付き合いくださいと嬉しいです。

第二十二話 転生

少年の後ろに、長い黒髪にゆるくパーマをかけた女の子が青白い手を車のドアの縁にかけ、同じく血色の異常に悪い顔を覗かせている。

「……優子っ、大丈夫なのか？」

少年が背後の気配に気付き振り返った。襲われるのではと思ったが、彼女が少年に飛びかかることはなかった。自分の身体を抱き締めるように腕を回し、小刻みに震えている。目に生気がないが――白く濁ってもおらず、生きた人間のものだった。

「……すごく、寒い。でも奥の方は、燃えてるみたいに、熱い……身体が、変。どうし、ちゃったのかな……？」

彼女が息も絶え絶えに絞り出すようにして声を発する。もしかして、身体がゾンビに変化し始めているのだろうか。

「優子、駿の家に戻る。大学やってなさそうだし……結構ヤバイことになってるみたい。向こうで傷を手当てして、落ち着いて考えよう」

奈美さんが彼女を労るように優しい声で言った。駿とは少年のことだろうか。ということは彼女たちは今までずっとそこにいたことになる。一体どんな家なのだろう。

「もうこの車、使えないよなー……」

「そだね。フロントガラスがひび割れて真っ白。歩いてくしかない

か。優子、捕まって」

奈美さんが肩をかし、優子さんが車からヨロヨロと出てきた。サ
ンダルを履いた白い足——左の足首に齒形がくつきりとついている。

「おい、お前らどこ行く気だよ」

「駿の家。ここから結構近いの。とにかく落ち着いて状況を把握し
なきゃ」

「武器も何も持たずに行くのか？」

「……来るときは見なかったから大丈夫だよ。そこに転がってるの
だけだった。あなたたちには本当に感謝してる。色々ありがとね。
迷惑掛けるわけにはいかないし、もう行くから」

そう言うとき奈美さんと駿くんは優子さんを連れて歩き始めた。

「ねえ、絶対危ないよね？ 運よくゾンビに遭遇しなかったとして
も優子さんが……」

「まあ間違いないくらい全員の死にしろーな」

「だ、だったら引き留めようよ！ 途中まで着いて行ってあげよ。
二人みたいに力のない私が言うのもあれだけど……あれが音に反応
することくらいなら教えられるから」

須藤くんの「俺には関係ない」とでも言いたげな冷たい言葉に少
しカッとなってしまった。本当に私なんか何言ってるんだらう。
自分がひどく滑稽に思える。

「俺は伊東さんに付いていくだけだ。ただいちいち人を助けていた
らいつまで経っても弟くんのところに辿り着けないかもしれないぞ」
「ごもつともだな。それにあいつら助けても力になるとは思えねー」

しよ……まあ反対はしないぜ」

そうだ、二人の言う通りだ。確かに戦争にしてもこういう時にしても、薄っぺらな正義を振りかざして他の人のことに構っていたら自分の命がいくらあっても足りないだろう。……でも。

「でもやっぱり見捨てられない。私だって自分の命は大切だし、二人を危険な目に合わせたくないよ。あの女の子がゾンビになって大変なことになるのは目に見えてる。だけど……それでも今なら防げるはずだから。無謀なことじゃなかったら、出来るだけ助けていきたいなあ……なんて」

元々口下手な私にとってこんな臭い台詞を長々と言うのは一苦労だ。顔に血液が急激に集中するのを感じながらつかえつかえ言葉葉を紡ぎ出す。二人とも無力なくせになって呆れるかな。無意識に伏せていた顔を上げ、ちらっと二人の顔を伺う。

二人ともぽかんとした顔をしている……。私、変なこと言った？
もしかしてもう助けることで一致してたり？

「あっ、いや、もう決めたならいいの！ うん」

「……伊東も言うこと言うんだな」

「ああ、少し驚いた」

「へ？」

二人は私を見て笑っていた。嘲笑ではない、すっきりした笑顔で。二人とも私がこう言うのを望んでいたのかもしれない。

「さ、追うか」

「おう」

「……うん！」

私達は奈美さんたちの歩いていった方に向けて走り出した。

この通りには死体なかった。時々血痕が目に入るがそんなに目立つほどではない。元々こじんまりした住宅街だったのだろうから、こっだけ元の平和だった世界のようなのだ。車に乗っていて異常に気付かなかったのも納得できる——何故三日間無事だったのかは未だに謎だが。

三人の後ろ姿が見えてきた。奈美さんが優子さんに肩を貸しながらゆっくり歩き、小柄な少年——駿くんは三人分の荷物を運んでいるようだ。

「あのっ！」

周りにゾンビの姿がないのを確認して三人の背中に向けて声をかける。駿くんがびくっと大きく肩を上下させ真っ先に振り返る。少し遅れて奈美さんもこちらに顔を向けた。

「……私たちも途中までついていきます。あれが出てきても撃退できるし、寄せ付けない方法も知ってるから」

奈美さんと駿くんが顔を見合わせる。小声で私たちの申し出について相談しているようだ。そして割とすぐに結論が出たらしく、奈美さんが言いづらそうに私たちに向けて言った。

「じゃあ、お願いしてもいい？ 申し訳ないけど私たちやっぱり何

も知らないから……」

……受け入れてもらえてよかった。私たちは小走りで近寄り奈美さんたちに合流した。次に考えなければいけないのは優子さんのことだ。彼女は息が荒くとても苦しそうで着々とゾンビへの転生の道を辿っている。このままではゾンビになった彼女に二人が抵抗できずに噛まれてしまう。何か対応策は無いのだろうか。

「その家はどこにあるんだ？」

「この通りを真っ直ぐ行って突き当たりを左。そこをもうちょい進んだところに塀に囲まれた林があるんだよね。駿の家はそこ。駿のうちまあまあ裕福だからさ、結構敷地が広いんだよ」

それなら確かに街の騒動に気付かなかったのもわかる。銃声や絶え間なく鳴るサイレンの音が聞こえなかったのだろう。

「ご両親はいるの？」

「いや、僕だけです。父さんも母さんも旅行中で……仲睦まじいのはいいんですけどね」

「あたしたち大学でイベントサークルに所属してるの。で期限が迫ってきたから駿の家で企画の準備してたんだよね。土曜日からずーっとひたすら準備」

なるほど。外の様子もテレビも見ることなく家に籠っていたみたいだ。駿くんが事実を知った時どうなるのだろう。奈美さんもだ。ご両親から連絡がないということは……もう既に……。

「その首に巻いてる……襟巻を貸してくれないか」

「ん？ ああ、ストールのことね。はい」

佐伯くんが何を言い出すのかと思ったら（「襟巻」とは……佐伯君らしい）奈美さんが首に掛けていた黄色のお洒落なストールを受け取り、長さはそのままに折りたたみ始めた。そして「失礼」と断ると優子さんの口を覆うように巻きつけた。

「何してんの？ 大丈夫、優子？」
「……………」

優子さんは力なく頷いた。身体全体がガクガクと震え始めた。ちよつとやばいかもしれない。

「さっきの化け物のようになりたくなければこうしておいた方がいい。」
「なに、それどういうこと？」

奈美さんの言葉に答えることなく佐伯くんはストールを優子さんの頭の後ろできつく結ぶ。

「それ貸せ」
「えっ、ちよつ、何するんだよ！？」

続いて須藤くんが駿くんの上着をたくしあげ——ベルトを器用に外すと無理やり引き抜いた。

「おい、そいつの腕を離せ」
「は？ 何する気なの？」
「いいから言うとおりにしろ！」

須藤くんの剣幕に奈美さんもさすがに怯み、ゆっくりと肩に回された優子さんの腕を外す。すると途端に優子さんが崩れるように地面に膝をついた。

「優子……!!」

須藤くんがすかさず彼女の手首をベルトで縛りあげる。奈美さんが抗議の声を上げるが手を止めることはなかった。

「どうしたっていうの？ 早く優子の手当てをしなきゃっていうのに」

「手当なんてする必要ねえんだよ」

「ふ、ふざけないでよ!」

「……な、奈美、し、しゅ、駿」

弱弱しいその声に、須藤くんと睨み合っていた奈美さんが顔を向ける。

「優子……!!」

「優子、大丈夫か?」

二人の問いかけに優子さんは真っ白な顔に浮かぶ紫色の唇をただただ震わせるだけだった。目の焦点は合わず、口が弛緩したらんとしている。もうすぐかもしれない。普通の人間、友達とサークル活動に打ち込むごく普通の学生の女の子が、今自分を失おうとしている。痛々しくて見ていられない。今まで私たちが殺してきたゾンビにもこのような瞬間があったと思うといたたまれなくなる。

「……あり、が、と」

ほとんど息のような微かな声。優子さんはそれだけ伝えるとゆっくりと仰向けに地面に倒れた。もう息はしていなかった。

「優子ー！ー！」

「あああ、どうしたんだってんだよおっ」

泣き叫ぶ二人のすぐ傍で私たちは優子さんが再び起き上がるのを待っていた。悲嘆に暮れる二人の背後、通りの奥からこちらに近づく影が見える。

「他のゾンビも寄ってきてる。早めにお別れを終わらせないと」

「……くるぜ」

ゆっくりと、優子さんが目を見開く。

「……優子？」

——そして濁った瞳が二人を捉えた。

第二十三話 屋敷（前書き）

大学の名前を考えるのって何故か高校よりも難しいと感じるのは私だけでしょうか？ ちなみに今回出てくる大学名はそれらしい？のを何となく組み合わせただけでモデルはないです。

いつか話の展開のスピードを上げますと宣言しましたが全然上がっていませんね^^；これが限界なのでしょう。あまりぐーたらしないよう気をつけたいと思います。

第二十三話 屋敷

「……優子？」

優子さんの目は大きく見開かれ——瞳は薄い膜を張ったように濁り灰色で、目玉はじっと宙を見つめ小刻みにピクピクと動き——肌は白魚のように真っ白で青い血管がびっしりと浮き出ている。どう見ても普通の人間ではないのは明らかだ。しかしつい数分前まではごく普通の女の子だったのも確かで……。

「ゆう……」

名前を呼びかけながら彼女だったものに手を伸ばそうとする奈美さんの手首を須藤くんがぐいと掴んだ。

「離れろ」

そのまま数歩後退する。奈美さんは様子のおかしい優子さんから目を離せず、引かれるがままになっていた。優子さんは手首に巻きつけたベルトが邪魔して立ち上がることができずにいたが、数回腕を外側に開こうとする素振りを見せると、いとも簡単に革のベルトは千切れてしまった。ひいっと駿くんが声を上げる。そして優子さんがガクッガクッと何度もよろめきながらもゆっくり立ち上がった。

「……ウウアアアアア……」

喉の奥から絞り出すような低くおどろおどろしい呻き声。さっきまで耳にしていた心地よいソプラノのか細い優子さんの声とはかけ離れていた。そのあまりの異様さに奈美さんもたじろいでいる。

「な、なに、どうしたの？」

恐怖に上擦った奈美さんの声に反応して、一步、また一步と優子さんだったものが近付いてくる。駿くんは何か声を出そうとしているものの、すっかり怯えきって唇を開いては閉じを繰り返していた。

「……噛まれた人間はさっきのやつらと同じ化け物になるんだ。これによくわかっただろう？」

「……優子が、化け物？」

低いトーンの声色で教え諭すように言う佐伯くんは、奈美さんは信じられないと首を振る。優子さんだった化け物はストール越しにもわかるような大口を開け、溢れだす涎がストールに染みを作っていた。前に突き出されたその腕が私たちに届くまで、あと五歩。

「行くぞ、家はどっちだ？」

「行くって……優子はどうするわけ……？」

「これがまだてめえの友達だって言うのか？ この死んだ目をした化け物が？ だったらここでこいつと手繋いで仲良しごっこでもしてるか？」

化け物をじっと見つめたまま口をつぐんでしまった奈美さんを須藤くんが強引に走らせる。私と佐伯くんもその後が続く。

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

駿くんも恐怖ですくんだ足を引きずるように走り出す。手を貸そうかと思ったが大丈夫そうだ。さっきいた場所からだいぶん離れたところで奈美さんが後ろを振り返った。その大きな目には涙が滲み、

口はかつての友人の名を声に出すことなく呟いていた……。

重い金属音が背後で鳴り響いた。人の丈以上の高い塀に囲まれた敷地の中央には普通の家より二回り三回り大きい洋風のお屋敷があった。門から玄関まで石畳が敷かれており、まわりはきれいに手入れされた芝生が生い茂り、塀に沿って木がたくさん植えられいる。

「あいつ地味なくせに見かけによらねえもんだな……」

須藤くんがぼそりと言う。確かにすごいお家だ。部屋の片隅から全てが見渡せてしまうような狭い都営住宅暮らしの私にとって、このように広くてお洒落な造りの家は強い羨望の対象だった。私たちが周囲に気を取られている中、当の屋敷の持ち主の息子は真っ青な顔をして塀の中を探っている。

「今来た門以外にも出入口はあるのか？」

周囲を注意深く見渡していた佐伯くんが尋ねた。

「あ、はい、裏に一人がやっと通れるくらいの幅の裏門があります……」

「そうか。しっかり施錠してあるな？」

「はい、多分……」

いちいちビクビクとしながら駿くんが答える。ショックなことはあったがこうして様子を見てみると元々弱気な子なのかもしれない。やっと鍵が見つかったようで、指の震えに苦戦しながらも見事な装飾が施された木彫りの扉を開けた。

中は少し古くさいが洗練されており、インテリア一つ一つにこだわりがあるように感じられた。玄関は吹き抜けで正面には綺麗に磨かれた美しい石造りの階段がある。どうやら靴は脱がなくてもいいらしい。

「僕の部屋に行きましょう。テレビもパソコンもありますし」

私たちは階段を上る駿くんについて言った。当然ながら友達を目の前で亡くしたばかりの二人の背中はどうよりと暗かった。さつきから奈美さんは一言も話していない。

「ここです……」

扉を開くと意外とシンプルな部屋が現れた。家具がシンプル、というだけでその広さはかなりのものだが。大型テレビを淡い水色のソファアがコの字型に囲んでいる。私たちはとりあえずそこに腰を下ろし落ち着くことにした。

「……まず自己紹介しませんか？」

重い雰囲気の中、思い切って提案する。お互いをよく知らなくて。協力せずしてこの苦境は乗り越えられない——これまでの経験で一番感じたことだ。最初に佐伯くんがそうだな、と同意し、他の人も次々と頷いた。

「えっと、じゃあ私から。伊東皐月です。立星大学の二年生です。よろしく願います」

「やっぱりあなたたち立星の人かあ。あたしたちもだよ」

奈美さんが俯いていた顔を上げて言った。立星大学は結構大きな大学でこの付近にいくつもキャンパスが点在している。学生数も半端なく多いので駅は平日祝日関わらずいつも立星の学生で溢れ、商店街も賑わっていた。なので奈美さんたちが同じ大学の人であることは不思議なことでもなんでもない。しかしやはり同じ環境にいたというだけで相手を身近に感じるものだ。

「あ、ごめん割り込んでちゃって。先に言っちゃうね。あたしは高岡奈美、立星の三年生。よろしく」

足を組みなおした奈美さんの短く切り揃えた髪がサラッと揺れる。クールビューティーとはこのことだ――女の私から見てもドキドキしてしまう。ふとソファアの肘掛けに添えられた彼女の左手を見ると銀色に輝く指輪が薬指にはめられていた。彼氏だろうか？ だとしたら不安でたまらないだろうな……。

「じゃあ次は僕が……相田駿です。同じく立星の学生で三年生。どうぞよろしく……」

おどおどしながらもぺこりと頭を下げた駿くん……ではなく相田さん。少年だとか好き放題言ってしまったが、彼は私よりも年上だったようだ。ウェーブがかった癖の強い黒髪を指先でくるくるさせながら眼鏡の奥のパッチリとした目を緊張で頻繁に瞬かせている。奈美さんとあまり変わらないくらいの背で男性にしては少し小柄な彼は、女の子のような繊細で柔らかい顔立ちをしている。

「俺は佐伯義崇。立星の三年だ。部活で剣道をしていた。よろしく。」

そういえば佐伯くんの学年を教えてもらっていなかった。三年生だったのか……。このような崩壊した世界で年功序列なんて意味をなさないかもしれないが――現に私は彼にずっとため口をきいていた――それでも年上には敬語を使わなくては。今まで培ってきた社会意識が許さない。

「須藤英雄だ。伊東と同じ二年。どーぞよろしく」

須藤くん同い年だったんだ！ 外見怖いし偉そうだから年上かと思った……。まあ浪人の可能性もあるけれど。そもそも浪人による年齢の違いは以前の世界でもあまり意識されていなかったか。

「佐伯くん三年生だったんだっ……。ですね」

隣の佐伯くんに小声で話しかけたが、慌てて敬語に訂正したから不自然なイントネーションになってしまった。向かいの奈美さんがクスッと笑った。

「敬語なんていいよ、今まで通り話してくれ。須藤の厚かましさを少しは見習ってもいいんだぞ」

「おい、誰が厚かましいって？ 俺は一浪だからお前と同い年だぜ」

須藤くんが佐伯くんを小突きながら言う。須藤くんが佐伯くんと同い年ってことは私が一番年少かあ。そう知ってしまうと急に肩身が狭く感じる。

「僕は二浪だよ……。両親はそれなりなんだけど僕自身あまり出来がよいくない息子でやっこの思いで入ったんだ」

相田くんが呟いた。まさかの彼が一番年上という……。

「ちょっと、あたしそれ初耳なんだけど！　ほんとに？　駿二つ上なんだあ、あはははっ見えないって！」

さも可笑しそうに笑う奈美さんに、私もつられて笑いだす。佐伯くんと須藤くんにも軽く笑われ相田くんは困ったような苦笑いで頭を掻いている。

「でもあたしは今まで通りで行くよ。こんなときくらい、というかこんなときだからこそいつもの調子を崩したくないし。皐月ちゃんも皆にため口でいいから」

「ありがとうございます……ありがとうございます」

奈美さんがフフツと笑う——と、見る間に笑顔がしぼんでいった。

「優子——立花優子はあたしたちと同じイベントサークルでね」

そこまで言う一拍置いて彼女はこれまでのことを話し始めた。

第二十四話 真実（前書き）

今週来週は少し更新が遅くなるかもしれませんが。やるべきことがあるのにこの小説の挿絵だとか短編小説をかきたいと思う今日この頃です（^―^；）短編に関しては気分転換にダークなファンタジーを書こうかなと思っています。

第二十四話 真実

奈美さんと相田くん、立花さんは立星大学のイベントサークル所属で、七夕の日のライブイベントの企画を担当していたそうだ。しかし会場のセッティングやビラ配り、肝心のバンド募集など短期間でやるべきことがたくさんあり、金曜日の授業後からずっとこの相田くんの家に籠っていたという。テレビも見ることなくひたすら準備、準備だったそうだから周囲の異変に気付くことはなかったのだ。そして今日、午前の授業がある三人は寝坊してしまい、相田くんの家の車で大学へ向かうことにし――そしてあんなことが起きてしまった。

奈美さんたちの状況は掴めた。あとは彼女たちが真実を知る番だ。どう切り出すべきか悩んでいると、少しして佐伯くんが口を開いた。

「……親から電話はなかったのか？」

「いや、別になかったけど……ああそういえば優子に親から電話あったかな。優子んち厳しいからメールだけして許可もらわずに出てきちゃったみたいで。何度もしつこいから電源切ってたけど……どうして？」

「今起きていることが……世界の秩序が全て無に帰すくらい深刻なことだからだ」

佐伯くんは淡々と真実を話し始めた。出来る限り彼らを刺激しないようにしているのだろう。二人は身動き一つせずじつと話を聞いている。

「……ということだ。君たちはどうする？」

「はは、ちょっと待って。まだ頭の中整理できてないよ……」

奈美さんが乾いた笑い声をあげた。目は正面の佐伯くんを見てはいるが、黒目がちな瞳は僅かに揺れ、壁を透かしてずっと遠くを眺めているような遠い目をしている。

「世界中で、起きてる……」

相田くんが真っ青な顔をして呟いた。

「……………!」

二人は思い出したようにほぼ同時に携帯電話をポケットから取り出すと手慣れた動作でキーに指を滑らせ耳に当てた。

「うそっ……出ない!」

回線の混雑はないようだが電話に出ないということは……今電話に出れない状態か、もう一生出ることはないか、だ。

「俺たちも同じような状態だ。電話は通じたが会いに行くことはできないし、今はどうなっているかわからない」

「今俺たちに来ることは安全な場所に逃げる方法を探りながら家族からの連絡を待つことくれえだな」

「そんな……」

無意識に前へ乗り出していた上半身から力が抜け、相田くんがソファにボスンともたれかける。

「今から俺たちは避難所に指定されている私立晃東高校に行く。自衛隊が管理してくれていて、一週間以内に安全な場所へ連れていくってくれるそう。君たちの親御さんももう既に避難しているかもしれないぞ」

「そっか……そうだね」

奈美さんがすっと立ち上がった。須藤くんが床についた足に力を入れたのがわかった。消防署でのことを思い出しているんだ……。

「でももうちょっと考えさせて。頭の中がごちゃごちゃだからさ」

無理をした笑みを浮かべると彼女はゆっくりとドアとは反対の方——窓際まで歩いて行った。

「……で、俺たちはこれからどうすんだ？」

須藤くんが腕を頭上に持ち上げ伸びをしながら言った。

「今日はもう動かない方がいいかなあ？ 奈美さんたちも気持ちの整理がつかないだろうし」

「いや、俺は今日出発した方がいいと思う。悲鳴を聞いて予定が早まったから日没まで時間はまだ十分にあるしな。二人もゾンビと接触してそう時間が経たないうちに奴らとの戦い方を身につけておくべきだ」

「今のうちにゾンビは殺すべき相手——敵だってことを頭に叩きこんどけってか？」

「そうだ」

議論するまでもなく私たちの中で奈美さんたちと一緒に行動する

ことに決まっていた。二人をここに置いていくわけにはいかない。せめて戦い方を学んでもらわなければ。

ゾンビとの戦いについて考えていて、ふと私は自分の武器がないのに気付いた。そういえばコンビニで手に入れたモップや長箒は早々になくしてしまったのだった。ここに武器になりそうなものは何かないだろうか……。

「ごめんなさい……ちょっといいですか？」

私は真実を告げられてからずっと物思いに耽っている相田くんに申し訳ないと思いつつも声をかけた。

「はい……大丈夫ですよ」

「ここになにか、武器になるものってありますか？」

「ああ、はい」

一拍あけてすぐに相田くんが答えた。あまりの応答の早さに面食らっていると、彼は「少し目立つ家ですからね。泥棒対策だって父が備えているんです」と付け加えた。

相田くんは少し待つように伝えると廊下に出て行った。お金持ちだからすごいのが出てくるかもしれない。それからしばらくして彼が短い棒状のものを片手に戻ってきた。

「特殊警棒っていうんです。伸縮式で、こうすると……」

シュツという音をたて二十センチ足らずだったそれが二倍以上の

長さに伸びた。手渡され質感を確かめると思っていた以上に硬い。

「わぁ……すごい」

「どうぞ、あげます」

「えっ、いや、相田さんは使わないんですか？」

まだ戦うもなにも全ての決心がついていないというのに愚問かと思っただが、彼は首を横にふった。

「僕は別のがありますから。奈美にもぴったりのがありますし」

そう言うとき相田くんはこの部屋の奥にあるドアを開け、中に入っていた。もう一つ部屋があったんだ。確かにこの部屋にはベッドも机もない――寝室を兼ねたプライベートな部屋が別にあるのだろう。

「あたしにぴったりのって…金棒とか鞭とか持つてくるんじゃないでしょーね」

窓の外を見ていた奈美さんがこちらを振り向き軽く溜め息をつく。するとすぐに相田くんが部屋から出てきた。彼は窓際に奈美さんの姿を見つけると方向を変えて近付き彼女に金属バットを差し出した。

「僕、小中高と野球部だったんだ。宝物だったけどあげるよ」

「え、あ……ありがと」

奈美さんが金属バットを手に取り、パシパシと先端で掌を叩く。それから何を思ったか軽く素振りを始めた。

「えっと、相田さんの武器は？」

「僕はこれ」

相田くんの手にはY字型の物体が握られていた。二つに分かれた先端は太いゴム紐でつながっている。

「パチンコ？」

「うん、スリングショットっていうんだ。これでよく趣味で狩猟をしていた」

そう言って袋から鉛玉を取り出し掌の上で転がしてみせる。狩猟って、なんだかヨーロッパの貴族みたい。やっぱりお金持ちの考えることは違う。

「相田さん、高岡さん、この近辺……晃東高校までの間の地理に詳しくないか？」

先程から地図をずっと見つめていた佐伯くんが二人に尋ねた。

「悪いけどあたし、駿の家に用あるときくらいしかここらへん来ないんだよね。駿は知ってるんじゃない？」

「ああー……うーん、どうだろ。向こうは和泉商店街くらいしか行ったことないかも」

「……和泉商店街だって？」

相田くんの声を遮って須藤くんが口を開いた。

「須藤くん知ってるの？」

「ああ、中高生の時はお世話になったぜ。通ってたボクシングジムもあったしな」

なんて奇遇だろう。誠へと続く道が綺麗な一直線で繋がっているように、私は嬉しさを隠しきれずにいた。

ガシャアアアン……ッ

須藤くんと言葉を返そうとしたその矢先、鋭い音が部屋中に響いた。

音がした方に目を向けると金属バットを手に粉々に砕け散った窓ガラスを気にすることなく呆然と立ち尽くす奈美さんがいた。その白い腕にはガラスの欠片が刺さり、血が赤い筋となって床に垂れ落ちている。

「奈美さんっ大丈夫ですかっ!？」

「あーあーもう、何やってるんだよー。また元の日常に戻ったら弁償してもらうからな」

奈美さんに駆け寄った私は穴の空いた窓ガラスに目を向けて愕然とした。相田くんも「金持ちのくせにケチくさいっ」とか突っ込みを予期していたらしく、不思議そうな顔でこちらを見ている。

私たちの様子が変わるのに気付いた佐伯くんが近付いてきて私の後ろから外を覗いた。

「……なんてことだ」

割れた窓ガラス越しに見えたのは――屋敷内に流れるように入り込むおびただしい数のゾンビだった。

第二十五話 疑問 (前書き)

第二章も半分まできました。これからもどうぞよろしくお願いします。

第二十五話 疑問

先程私たちが通り固く閉めたはずの門は開け放たれ、無数のゾンビが庭園に流れ込んできていた。

いくつかの不可解な疑問が頭を過った。まず第一にゾンビは知能が著しく低いはずだ――施錠していないとはいえ、あのスライド式の重い扉を開けられるわけがない。そしてあれは音をたてているモノにしか反応しないはず。屋敷内に私達が入った今、門の外から人間の存在に気付くことなどあるはずないのだ。

「……悪いがもう考える時間はなくなってしまったようだ。相田さん、裏門まで案内してくれるか？」

「わ、わかりました」

私達は各々武器や荷物を手にドアの前に集まった。佐伯くんがドアノブに手をかけ、こちらを振り返る。

「なるべくゾンビは俺と須藤……あと伊東さんで倒すようにするが、いざという時は奴らの頭を狙え。躊躇したら終わりだぞ」

戸惑いながらも二人が頷いたのを確認すると彼はドアを開いた。

……ドーン……ドーン……

一階から音がする。それが吹き抜けの二階廊下まで響き、屋敷内に木霊していた。玄関扉が振動し、音がする度に扉の隙間から光が差し込んでいる。私達は階段を全速力で駆け降り始めた。

「ヤバいな……急がねえと雪崩れ込んでくるぜ」

「音を聞く限り一、二体が体当たりしているようだが……凄まじい力だ。突破されるのも時間の問題……」

佐伯くんの声に被って一際大きな破壊音が聞こえた。目をその方向に向けると扉が傾いて隙間から青白い手が覗いている。

「走れっ！」

一階廊下に響き渡る私達五人の足音。ただただ恐怖に煽られながら足を動かした。

私達が裏口があるらしい部屋に滑り込んだのは扉が床に倒れ落ちる音とほぼ同時だった。

その部屋は倉庫のようだった。木の棚には書物や箱がぎっちりと並び、床には古い新聞紙が平積みになっている。相田くんが先頭になって段ボール箱に囲まれた狭い通路を進み、曇りガラスのドアの正面に立った。

「このすぐ先に裏門があるんですけど……」

「……外にもう奴らがいるみてえだな」

唸るような呻き声がドアから僅かに漏れ出てきていた。すぐそこに――いる。一番廊下側にいる奈美さんが焦りを隠せない様子で佐伯くんの服の袖を引っ張った。

「ちょっと、廊下の方からも聞こえてくるよ！」

「ああ、もう引き返すことはできない。行くぞ！」

相田さんがわきへ退き、佐伯くん、続いて須藤くんが前へ進み出した。木刀と斧をそれぞれ構える。私も相田くんに貰った警棒の長さを調節し、固く握り締めた。

音を立てないよう慎重にドアが開かれた。薄暗い倉庫内に昼の明るい陽光が差し、埃がキラキラと舞う。

「……………！」

——息が止まった。裏門までの距離は学校のプールくらいの長さで、約二十五メートル。その間にゾンビが数十体。多すぎる。裏門でさえこれなのだから正面玄関から屋敷内に入っていたゾンビの数は計り知れない。音をたてれば正面玄関から回ってこちらにやって来るだろう。それより早く突破する必要がある。

最後尾になった相田くんが後ろ手にドアを閉める時、微かに鳴ったガチャンという音が静かな昼下がりの裏庭に響いた。

「……………あつ」

相田くんが思わず声を発する。手前にいた数体が一斉にこちらを向き——それと同時にその内の一体の首がグリーンとあらぬ方向に曲がった。

ズシャアア…………ツ

横から風ぎ払うように加えられた衝撃に、ゾンビは体を大きく捻って俯せに倒れた。瞬く間にその頭部の周囲の芝生が赤黒く染まる。

「タイムアタックだな。勝利の条件は一人も噛まれずに最短時間で裏門に辿り着くこと……だ！」

軽薄な言動をしながらも須藤くんは新鮮な血に濡れた斧を左から近付いてきたもう一体に叩き込む。右では佐伯くんが無駄のない華麗な剣さばきでゾンビの頭に次々と木刀を打ち込んでいた。

しかし——やはり数が多い。音につられてゾンビが二人の周囲にわらわらと集まってくる。

「……くっ！」

斧を大きく振りかぶった須藤くんに横から別のもう一体が手を伸ばす。間が取れず後退を余儀なくされているようだ。このままでは屋敷を背に皆追い詰められてしまう。……よし、行こう。

バシィツツ……

再び斧を持ち上げた須藤くんに掴みかかろうとするゾンビの腕に警棒を思い切り降り下ろす。意外に固く、よくしなる。腕に相当のダメージを与えたようで、ゾンビは動かなくなった片腕をブラランブランとさせている。そして恨みがましい白く濁った目が私に向けられた。……怖い！

ガンツ

白い瞳が消えた。大きく仰け反ったゾンビは後ろ向きに倒れた——頭を強打されたのだ。

「……はあっ、女の子に変態染みた目向けてんじゃないよ、おっさん！」

奈美さんは額に汗を浮かべて、もう動かないおじさんゾンビに吐き捨てるように言った。

ゾンビが多い……！ 倒しても倒してもきりが無い。裏門に駆け抜けようにも密集したゾンビの群れが邪魔だ。佐伯くんも徐々に追い詰められている。数が多すぎるのだ。

ビシィツツ……

奈美さんと協力して一体ずつ倒していると、聞き慣れない物音をとらえた。音のする方に目を向けると、丁度ゾンビが足から崩れ落ちるところだった。その足元の地面には小さな金属の玉が転がっている。相田くんのスリングショットだ。

彼の放つ鉛玉はゾンビの足を的確に打ち、その衝撃にゾンビは次々と方膝を地面につき倒れ込んでいった。佐伯くんたちに近寄ろうとしている少し離れたところにいるゾンビを狙っているようだ。

倒れてもなお這いつくばって血肉を求めるゾンビ。地面を這うそれらに気付かずその背中を踏みつけたゾンビがバランスを崩す。それが連鎖となりゾンビが次々と倒れていく。

「今だ、行くぞ！」

佐伯くんの声を合図に私たちは倒れたゾンビの群れの間を縫うよ

うに走り抜けた。

「やるじゃねーか」

門に着き相田くんが錠を外すと、須藤くんがこちらに這ってくるゾンビの群れを眺めながら相田くんに言った。玉のような汗を流し背中で息をする須藤くんの口元は満足そうに笑っている。相田くんも少し困ったように薄い微笑みを返した。

門から出るとき、何気なく屋敷の方を振り返った私は倉庫に続く曇りガラスに映る異様な影に気付いた。……大きい。人の原型を留めているゾンビとは明らかに違う。二メートル以上の高さに横幅もある。ガラス越しにも肌が不気味なくらい真っ白なのがわかる。背筋が凍りついた。何なの、あれは？

「伊東さん、走るぞ」

いつの間にか私の隣に並んで立っていた佐伯くんが緊張感あふれる声で呟いた。彼もあの存在に気付いたのだろうか？

手を伸ばし地面を這ってくる髪の毛の長い少女のゾンビの鼻先で裏門は再び閉められた。

「走れっ……！」

ゾンビの群れから無事逃れ安堵の息をつく間もなく佐伯くんが急かす。

「ああ！？ どうしたってんだよ」

「門を突破してきた奴らだ——油断しきってのんびり歩けば危機的

状況に陥るのは目に見えてる。……まあ詳しい話は後だ」

「どっちに行けばいいの？」

「駿が途中まで知ってるんだったよね。和泉商店街だっけ？」

「うん。この道を真っ直ぐだ」

道路に疎らに点在するゾンビたちを避けながら私達は走った。目指すは和泉商店街だ。

第二十六話 脅威（前書き）

試験、合宿が終わりやっとな執筆を再開することができました！
更新が遅れてしまいすみません。

夏の暑さに負けず、これから完結に向けてより一層頑張っていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

第二十六話 脅威

どれだけ走ったのだろう。相田くんは道を確認しながら住宅街の角を何度か曲がり、やっと周囲にゾンビの姿がない場所を見つけた。ゾンビの集団との戦闘に加え、この長距離走。体育会系の部活に所属していない私や奈美さん、相田くんはもとより、佐伯くんと須藤くんも疲れているようだった。焦って無理するよりも慎重に体力を温存しながら進んだ方がいい。そこで私達は少しばかり休憩することにした。

須藤くんたちが鞆から飲み物を取りだし水分補給している中、私は重い下半身を引き摺るようにしてコンクリートの段差に腰をおろす佐伯くんの傍に寄った。

「佐伯くん。……見たよね？ お屋敷の硝子越しに、奇妙な影が映ってたの」

「ああ、見た。臆気でよくは見えなかったが……直感でわかる。あれは俺たちの脅威となり得る恐ろしい存在だ、間違いない」

佐伯くんは背中を丸め私の耳元に口をもつてくると小さな声で囁いた。……皆に聞かれないのだ。確かに現状を知ったばかりで、今まで築き上げてきた文明社会と隔絶したこの野蛮な世界にまだ不馴れな二人に余計な不安を与えることは控えるべき。そんなことも考え付かない自分自身に落ち込みながら声のボリュームを数段階下げた。

「お屋敷の門を突破したのはあれの力なのかな？」

「そうだろうな。だがもうこれ以上考えるのは無駄だ。高校に到着するまでにあれに遭遇しないよう祈ろう」

話を終えて、息が頬にかかるほど佐伯くと密着していたことに
気付き、慌ててお互い飛び退いた。

「すまない」

「だ、大丈夫！」

視線を横に反らしていつも涼しげな顔を困ったように赤く染めた
佐伯くんに、私も顔に血が集中して熱くなるのを感じる。ゾンビが
現れて日常の些細な動揺なんて消えてしまったのだと思った。でも
やっぱり違う。私の中の人間はまだ何も変わっていない。生きてい
るんだ。

そんなことを考えて何気なく視線を移すとニヤニヤ顔の須藤くん
と目が合った。

「こんな世界にも純愛は存在するって俺は信じてるぜ」

「ちよつと須藤くんっ、何を見てそう思ったのー？」

「ねえ、気になってただけだよ、三人はどういう関係なわけ？
特に佐伯と皐月ちゃん」

意味ありげに私と佐伯くんを交互に見てくる須藤くんの逞しい腕
をパシパシと叩いていると、奈美さんまで参入してきた。でも確か
に私達の関係については気になるところだろう。

「私達はこんな事態になって逃げてた時に偶然出会ったんだ」

「へえ、面識なかったんだ」

「うん。だから須藤くんもまだ誤解してるようだけど、佐伯くんと

私はそういうのじゃないの」

何故か緊張して早口になる。そんな私に奈美さんは悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「お似合いだと思うけどなあ」

「な。でもこいつら発展するまできつとなかなか面倒だぜ」

「ちょっと奈美さんっ違うっ。須藤くんもまた！」

「俺と伊東さんのことは置いておいて、だ。高岡さんには交際している男性がいるんじゃないか？ 薬指に嵌めた指輪はそういうことだと聞く」

さつきから無言を貫いていた佐伯くんが話題を変えてくれ、顔から火が出る思いだった私は安堵の溜め息をついた。助かった。須藤くんは「佐伯、否定しねーんだな」と相も変わらずしつこかったが、佐伯くんに冷ややかな視線を浴びせられ軽く舌打ちすると静かになった。

「交際なんて言葉はしつくりこないけどさ——いるよ、一応」

「近所に住んでる幼なじみなんだとさ」

少し照れ臭そうに言う奈美さんに相田くんが補足する。心なしか彼の穏やかな口調の中に棘を感じた。

「でも今はそれどころじゃあないでしょ、親とも連絡つかないし……。その避難所行ってからゆっくり考えるよ」

「連絡はとらないのか？」

「……今はいい」

——怖い。彼の死を知るのが——。奈美さんの心の声が聞こえて

くるようだった。平常心を装ってはきはきと話していたが、最後の声は震えて、不安に軋む心を隠しきれていなかった。私のお母さんと一緒……。

「奈美さん、大丈夫だよ。私ね、弟とまた会えるって信じてるの。奈美さんも、会えるよ」

「……ありがとっ臯月ちゃん。でもアイツは簡単に死ぬような奴じゃないからあたしも信じてる。ちよっとは不安だけどね」

齒が浮くような台詞。だけれども私の真摯な気持ちが一杯詰まった言葉。奈美さんはそれを聞いてはにかんだ優しい笑顔で私の頬を撫でた。

「臯月ちゃんの弟くんも、きっと大丈夫。あとちよっとなん張ろ」

奈美さんは強い。でも強さは脆さと紙一重だ。この先どのようなことが待ち構えているのか私たちにはわからないが、私は彼女を支えていきたい。もう、絶対に失いたくない。キラキラと昼の陽光を反射して輝く奈美さんの瞳を見つめ、そう強く思った。

それから暫くして疲労が完全に抜けきることなく出発し、住宅街を通るコンクリートの道を私達は一言も口にすることなく無言で進んだ。奈美さんと相田くんにはゾンビが聴覚を頼りに獲物を追うこととは伝えている。ヨロヨロとおぼつかない足どりで徘徊するゾンビが常に視界に入ってくる――気分が悪い。やがて「和泉商店街」と古臭い書体で書かれた色褪せたアーチが見えてきた。

「着きましたけど……。僕が案内できるのはここまでです」

「須藤、ここからは頼めるか？」

「……んー」

アーチの手前で歩を止め、全員の視線が須藤君に集中した。腕を組んで俯き考えこんでいた須藤くんがちらと視線をこちらに向ける。

「わかんね」

「ちよっと、知ってるって言わなかった!？」

「……! しーっ」

普段からの癖であろう、口を尖らせ身を乗り出して須藤くんに詰め寄る奈美さんに、私と佐伯くん、相田くんが揃って静かにするよう注意を促す。奈美さんははっとして慌てて口を押さえた。

「いや、ここだと思っただがなあ。俺が足繁く通ってたのはもって栄えてたぜ。高い建物とかあつてよ」

「ああ、じゃあこの先ですよ。この商店街一見寂れてますけど、色々な店が集まっついて結構長いんです。確か繁華街に続いてたと思います」

確かに大きな商店街のようだ。視界が届かないずっと奥の方まで食品店や電器屋、美容室などが両側に並んでいる。そしてあちらこちらから聞こえる呻き声。ゾンビが……いる。それもたくさん。

「通りは狭い上に奴らの数が多いようだな。店から飛び出してくる可能性もある。気をつけて進もう」

五人一列になって商店の並ぶ狭い通りを進む。床の血溜まりに野

菜が無惨に散らばる八百屋、豚肉や牛肉に混じって人肉が並ぶ肉屋、ビンが割れ破片が飛び散る床をゾンビが平然と歩く酒屋。人々の生活が密集したこの場所には、もう日常の欠片もない。

正面にゾンビが見えた。人一人分ほどの間隔をあけて数体のゾンビが横に並んでいる。かつては人であった肉塊が散乱する無人の商店街で海藻のようにゆらゆらと揺れる人の形をした化け物の姿は不気味で、趣味の悪いホラー映画のようだった。

「これじゃあ何もなく平穏に通るってわけにはいかないね……」
「かといってUターンするわけにもいかないようだぜ」

どうにかして切り抜けられないものかと正面をじっと凝視する私に、須藤くんが立てた親指でくいくいと後ろを指す。振り返って見ると数体のゾンビが私たちが来たアーチをちようどくぐったところだった。前も後ろも――ゾンビに挟まれている。

「空き缶の音で誘導したいところだが……このような閉じられた環境では他のゾンビもおびき寄せてしまいかねない。やるしかないな」
「僕に任せてください」

木刀を鞘から抜いた佐伯くんを相田くんが緊張した声で引きとめる。手にはスリングショット。腰に下げたショルダーバッグから鉛玉を数個取り出し、ゾンビに向けて構える。そしてビンツとゴムの弾ける音が聞こえたと同時に数体のゾンビのうち真ん中の一体が倒れた。

頭部を大きく反らせて倒れたところを見ると額か首を撃ち抜かれたようだ。両側のゾンビが骨を砕く音に反応し、真ん中のゾンビが倒れた辺りを不思議そうに見渡す。その次の瞬間、一番右端のゾン

ビも倒れた。

「残るは三体か。よし、行くぞ！」

佐伯くんが少し離れた位置のゾンビに向けて駆け出す。須藤くん、少し遅れて奈美さんも続く。スポーツバッグを担ぐ私は元々運動が苦手なこともあり三人にとっても追いつかない。急ぎ足で向かいながらも佐伯くんと須藤くんがそれぞれ一体ずつゾンビの息の根を止めたのを見届け、歩の速度を緩めた。

あとは奈美さんだ。二人が傍にいるから彼女の身の危険を心配することはないだろうが、まだ奈美さんのゾンビを攻撃する手には戸惑いを感じられる。それが正しい人間の在り方であったはずだが、須藤くんも言っていたように、こんなことになってしまった今は生き残るためにかつての常識、モラルを変えていかなければいけない。人間の姿をしていてもこれはバケモノ。かつて人間だったとしても今はバケモノ。そう割り切らなければ。

奈美さんの両腕が振り下ろされた。頭蓋骨が碎ける重い音と共に最後の一体が崩れ落ちる。いつの間にか隣にいた相田くんが緊張に強張った身体を緩め、ほっと息をついたのがわかった。

ゾンビの一团を切り抜け、再び私たちは歩き始めた。通りの奥に高い建物がちらほらと見えてきていた。商店街のおわりももうすぐのようだ。

「……惨いね」

隣を歩いていた奈美さんが呟いた。確かにこの辺りには死体が多い。それも、人間の原型を留めているものが。血もまだ赤く新鮮で、殺されてからあまり時間が経っていないように思える。

「ここにはまだ生きている人がたくさんいるのかな」

目に涙を溜めた女性の所々破損した死体を痛々しい思いで見つめる。

「おいつ、あれ……」

須藤くんが何かに気付いたような声をあげるといきなり前方に向けて走り始めた。

「どうした須藤!？」

訳がわからないまま私たちは須藤くんを追う。走ったのはほんの僅かだった。須藤くんは一体の死体の前で足を止めた。

「なんだっていうの？」

急に何も言わず走り出した須藤くんに後ろから奈美さんが問う。

「……これから先は気を付けた方がいいぜ。俺らの脅威はゾンビだけじゃねえ」

須藤くんの目線の先には一体の死体……恰幅のよい中年の男性だ。ふつうはその人の性別、年齢、ましてや肉付きなどは食い散らかされわかるものではない。しかしそれは襲ったのがゾンビだった場合だ。

「人が、この人を殺したの……？」

動くことのない男性の額、胸、腕、腹……数ヶ所に矢のような細い金属の棒が刺さっていた。

第二十七話 襲撃者（前書き）

またまた投稿が遅れてしまいましたm（　　）mこれまで頂いた感想や評価、少しずつ増えているお気に入りに入りに励まされて、筆が進まない中ようやく書くことができました。ありがとうございます！

街の描写に苦戦中です；；これを乗り切ればこの後の展開は決まっているのです。また順調に執筆できそうなのですが。。頑張ります！

第二十七話 襲撃者

中年男性の身体の至る所に生えた矢羽部分の赤い金属の矢——偶然当たってしまったのか。いや、そうだったならばこんな執拗な攻撃などしない。ゾンビだと勘違いしたにしろ、そうでなかったにしろ、はっきりとした殺意を持っていたのは確かだ。

佐伯くんが焦りを隠せない表情でさつと身を翻し、周囲を注意深く見渡した。

「もう襲撃者はここにはいないようだが……この先はゾンビに加えてそういった輩にも気を配る必要があるな」

「な、なんだって人が人を……」

額に汗を浮かべ信じられないといった様子でうろたえる相田くんの肩に須藤くんが肘を置く。相田くんは相当驚いたようでビクンと大きく一回跳ねた。

「ゲームだよ、ゲーム。法の支配が事実無効になった今、懲罰を恐れておとなしくしていた奴らもその醜い本性を曝け出したってわけだ」

「残虐な欲望を満たすためならゾンビを殺せばいいじゃないの」

「ゾンビなんて殺しても何の反応も示さないからな、生きた人間が苦しみ悶え死ぬ姿を見たいんだろ」

「……随分とそういう人間に詳しいんだね」

悪びれもせず、どこか楽しそうにも思わせる口調で飄々と言っている須藤くんは奈美さんが怪訝な顔をして言う。声が刺々しい。奈美さんは須藤くんに対して何か不信感のようなものを抱いている

ようだ。

「まあ、ゾンビと間違えて打っちゃったっていうのも考えられるよ……ね？」

「いや、途中悲鳴で気付くだろう。それにだ、この辺りは元々そういった類の人間が多かった。この先の繁華街は暴力、薬、売春……そういう犯罪の温床だ」

人間として望むべき最後の可能性もすぐに打ち砕かれてしまった。詳しいことは知らないが須藤くんは昔はかなりの悪だったみたいだし、その時に通っていた場所といえば当然そういう場所になるだろう。

それにしても誠もこんな危険な場所に近い高校によく通っていたものだ。住宅街を間に挟んでしばらく歩くようだから隣接しているわけではなさそうだが、それでも生徒たちに与える影響は大きいはずだ。だから防犯対策があればほまでしっかりしているのだと納得する。そういえば駅は繁華街とは反対側にあって下校時は先生や警備員が生徒が寄り道しないように立って誘導しているのだと言っていたなあ。そんなことするならこんなところに学校作らなきゃいいのに。

「ちょっと、そんなとこ通るの危険すぎでしょ。どうにか避けられないの？」

「そうだよ……この人みたいに狙い撃ちされるかもしれない。知恵がある分ある意味ゾンビより怖いんじゃないか……？」

「繁華街を避けて行くのはかなり時間がかかるぜ？ それに俺も安全なルートは把握してるつもりだ。ま、それでも嫌だったんたら付いてこなくていいけどよ」

その時、奈美さんと相田くんの須藤くんを見る目が鋭くなったのがわかった。須藤くんがそのような場所に通う人間の一人であったことを知った上に、この皮肉めいた言動——これでよい感情を抱けというのも難しい話だろうけども。

「あまり話している時間はない、日が落ちるのももうすぐだ。須藤、繁華街で一泊寝泊まりすることになるが、どこか目星は付いているのか？」

「ああ。任せておけて」

佐伯くんはこうして話している間も常に周りに気を張り巡らせている。とりあえず今は須藤くんに頼るしかない。早く先に進まなければ、いつ恐ろしい人が襲ってくるか……。

入ってきた時と同じようなアーチをくぐり、私たちは商店街を抜けだした。正面には某有名カフェチェーン店やコンビニ、お洒落な雰囲気雑貨屋などが並んでいる。どれも開け放たれた扉から血や臓物にまみれた店内の様子が伺えた。

「ここで合ってるか？」

「そうそう、ここだ。小綺麗なファッションストリートの姿は跡形もねえが間違いねえ」

ガラス張りのブティックに車が突っ込みガラスの破片が散乱した通りを眺めながら須藤くんが頷く。

「なんか想像と違うなあ。不良やヤクザというかOLが通いそうな場所だよな」

「ここは、な。もっと先に行けば小汚なねえビル街に繋がる裏通り

があつてよ。」

「その不良やヤクザ行きつけの小汚いビルで寝泊まりするってんじゃないでしょーね？」

奈美さんが眉間に皺を寄せ問い詰めると、須藤くんはおどけたように肩を竦めて話を続けた。

「悪どもが集まる危険な地域とは少し離れた場所に寂れた通りがある。そこに俺の通ってたジムがあったんだが……。その裏に廃ビルがあんだよ。そこなら目立たねえし、すぐ近くには高校に通じる閑静な住宅街だ」

「なるほどな。俺はいいと思うが……三人はどうだ？」

「私もいいと思うよ」

「ここまで来たらそこしかないんじゃない？」

「僕もそう思う」

どうにかこうにか全員の同意を得て、私たちはその廃ビルを目指すことにした。日がだいぶ落ちてきた——あと一時間もすればこの街は闇に包まれるだろう。急がなくては。

早足で血みどろのファッションストリートに足を踏み入れた時だった。

ヒュン……

耳元で風を切る音がした。頬にかかる鬱陶しい髪を風がふわりと巻き上げる。すぐには何が起きたのかわからなかった。最初にまず感じたのは頬を焼くような熱。そして鋭い痛み——。

「走れっ！ その角を曲がるんだっ！」

佐伯くんの叫び声が聞こえ、私の身体が勢いよく引っ張られた。何も考える余裕などなかった。ただ背後から迫る何者かの気配と、風を切る音を感じながら佐伯くに引かれるがままになっていた。曲がり角まであと少し。

「うああっ!？」

相田くんの声がした。後ろを振り返ると私たちより少し後ろで相田くんが片腕を押さえ地面に膝をついているのが見えた。腕を押さえる手の指の間から赤い矢が覗いている。

「駿っ！」

奈美さんが相田くんの叫び声を聞いて引き返し走り出す。これは……ヤバイかもしれない。走る奈美さんの後ろ姿の向こうに数人の人影が弓のようなものを構えている――が何を思ったか顔を見合わせて少しの間相談する素振りを見せると、こちらに向けて走り出した。

「……ちっ。あいつら、女を狙ってやがる。相田は殺されるぞ」

須藤くんが顔を強張らせどうするべきか考えあぐねている様子だったがやがて意を決したように相田くんたちの方へ駆け出した。佐伯くん、私も後に続く。

「ちょっと、何よあんなたち!!」

相田くんは肩を貸し一緒に逃げ出そうとしていた奈美さんの前に男が立ちふさがる。奈美さんは咄嗟に手にした金属バットを振り下ろそうとしたが、いやらしい下卑た笑いを浮かべた男にその腕を封じられてしまった。

後からやってきた男を合わせ合計三人――全員中年とは言えない年頃でそこそ若いようだが、腐った性根が顔に如実に表れており、目は黄色く濁って汚れきっていた。

「すっげえいい女だ、今日はついてるな！　おい、そいつは殺しちまえ」

男たちのうちの一人がボウガンを構えた。

第二十八話 廃ビル（前書き）

のってきたかものです！今回は須藤大活躍なお話（^^;）今週中に四章に移りたいですねっ

第二十八話 魔ビル

男が相田くんの頭にボウガンを構えた――その時。

「おいっ糞野郎！ こっちだ！」

私と佐伯くんの少し前を走る須藤くんが声を張り上げた。男たちが驚いたように動きを止め一斉にこちらを見る。私たちが近付いて来るのに気付いていなかったようだ。

「なんだあ？」

「戻ってきやがったのか！ 馬鹿な奴らめ」

「まだ女いるじゃんか！ 残りは打ち殺そうぜ！」

男たちがボウガンの照準を相田くんからこちらに移す。それと同じに私は頭を力強く押さえ込まれ、かけられた重みでコンクリートの地面に身体を伏せる形になった。佐伯くんの腕が私の頭を抱えるようにして抑えつけていた。暫くして頭上を矢が数本通り過ぎていくのを感じた。

「伊東さん、平気か！？」

「へ……平気。須藤くんは？」

すぐ耳元で佐伯くんの声が聞こえた。須藤くんはどうなったのだろうか？ 早鐘を打つように騒ぐ胸で大きく一回呼吸し、腕の隙間から正面の様子を覗う。

須藤くんは無事だった。低姿勢で前進し、私たちとはもう大分離れ男たちの目前まで迫っていた。男たちもこの異常事態の最中手に

入れたボウガンにまだ慣れぬ様子で連続して矢を放つことは困難なようだ。そうしてる間にも須藤くんが彼らのもとへと辿り着き、斧を向けた。須藤くんの手にした凶器に気付き男たちが情けない悲鳴をあげる。

「……………！」

斧を振り上げたまま須藤くんは固まっていた。そうだ、相手は根が腐っていきようが生きている人間。ゾンビとは——今までとは違う。

男たちは皆怯み自分を庇うようにして腕で頭を覆っていたが、須藤くんが何もしようとしないのに気付くと態度を急変させた。強者には腰が低く立ち向かう勇気もなく無抵抗で、弱者にはふんぞり返って力で制そうとする——どうしようもない人間たちだ。

「へへっ、根性なしめ！」

両手で斧を握っているためガード無しの状態の須藤くんの腹部を短髪に切れ込みを入れた男が思い切り蹴りあげる。

「……………くっ！」

須藤くんは少しよろめき二三歩後退したが、次の瞬間ほぼ反射的に腕を降り下ろした。

「ぎゃあああああっ」

男の叫びがゴーストタウンと化した街に木霊する。須藤くんを蹴った男の腕が肩から切り落とされ、おびただしい量の血が滴り落ち

ていた。男が痛みで地面に倒れ転げ回る。

「行こう」

私と佐伯くんは顔を見合せ頷くと走り出した。武器を持っているとはいえ相手は三人——いや、一人は地面に伏したままか。それでも相手が知恵を持ち素早い分劣勢に変わりはない。

須藤くんは新鮮な血が伝う斧の刃の部分をじつと見つめている。男たちは皆怯え、後退りし始めていた。手の拘束から逃れた奈美さんは相田くんに駆け寄ると彼に肩を貸し、男たちからゆっくりと距離を置いた。と、何を思ったか須藤くんが斧を後ろに放った。

「!？」

途端男たちがニヤリと下品に笑い、須藤くんにじわじわと近付き始めた。

「甘っちょろいな、てめー。そんなんじゃこの世界を生き延びんのは到底無理だろーな。やつらに食い殺されるより今俺たちに殺られた方が楽だぜっ！」

二人が一斉に須藤くんに殴りかかる。手には鈍く光る金属がはめられている——メリケンサックだ！ 危ない。彼らまであと数メートル——それまでどうにか須藤くんが持ちこたえてくれれば。

一瞬の出来事だった。男がスローモーションで宙を掻くように見えた。そして顔を醜く歪ませ、進行方向の斜め後ろに飛んだ。須藤くんが目にも止まらぬ速さで男の頬を殴ったのだった。

「いでえええっ……歯が、歯がああっ」

中を噛みきったらしく口から血を垂れ流しながら男がしゃがみ悶える。そうする間に私たちは須藤くんたちのもとに着いた。

「須藤くん、大丈夫？」

「俺は大丈夫だ。問題は相田だな」

「逃げるぞ！」

佐伯くんが声を張り上げた。はっとして回りを見る。痛みにとたうち回る二人の男と、それを見捨てて逃げようとする男の奥に、黒い人影を捉えた。

「……………っ」

驚きと恐怖で声にならない声をあげる。ゾンビだ。今この世界を支配する者たち。彼らの存在を忘れてはいけなかった。忘れて油断したときこそ死が訪れる時だ。そしてそれは今のこともかもしれない。

ゾンビの奥にもまたゾンビ。数十、いや、百を超えているかもしれない――ゾンビの大群が押し寄せてきていた。前も後ろも。横は建物で囲まれている。八方塞がりだ。

「う、うそでしょ……？ 何、あの数……」

相田くんを支える奈美さんが驚愕の表情で呟いた。相田くんも痛みと戦いながらもゾンビをじっと凝視している。

「武器を持って、落ち着くんだ。抜け道を探そう」

努めて冷静に振る舞おうとする佐伯くんは、絶望の文字が頭を過った私も氣を持ち直す。

「そうだ、慌てるな。抜け道はある。こっちへ来い」

斧を手にした須藤くんが私たちを誘導する。そして側にある色とりどりの看板を掲げた雑居ビルの一つに入っていく。ビルに一歩足を踏み入れたところで後ろを振り返った。

二人の男がか細い悲鳴をあげながら大量のゾンビに集られ、喰われていた。無傷だった一人は逃げようとするが極度の恐怖で足がもつれうまく走れていない。やがて両側からゾンビが押しかけ――。

「あゝあああー！！！」

野太い悲痛な叫びが甲高い断末魔の悲鳴に変わる。

「伊東さん」

佐伯くんの声で我に返る。最後尾の佐伯くんは私がいつまで経っても中に入らないため足止めをくらっていたのだ。

「ごめんなさ、い………？」

彼の長い指が私の頬を撫でる。今気付いた。私は泣いていたのだ。つた。

「あはっ。なんか、同じ人間なのに、こんな状況で大切な仲間なの

に、傷付けあうなんて、変だなんて思って。ごめん、行こ」

よくわからない悲しみでうまく喋れない。佐伯くんはそんな私をじっと見据えると優しく微笑み私の手をそっと握った。

佐伯くんに引かれてようやくビルの中に入ると三人が息を押し殺して壁に張り付いていた。

「中にいる……」

眉を大きく吊り上げた奈美さんがひそひそ声で言う。そっと壁の端から覗くと小さな服屋や雑貨屋が並ぶこのフロアに結構な数のゾンビがいることがわかった。

「このまま突破するのか？」

「いや、こっちだ。この階段を降りると隠れた店があってな、いわゆる悪御用達の店なんだが。そこを抜ければ向こう側の地上に出れる。普段あまり人がいねえから大丈夫なはずだ」

「ホント危なっかしいんだから」

すぐその角にある目立たない階段を指差す須藤くんを呆れたように奈美さんが見る。

薄暗い階段を下ると派手な柄の暖簾がかかっていた。危険な雰囲気がプンプン漂っている。普通の人はず引き返すだろう……。

「オッケー、予想通りだ。」

暖簾の隙間から中の様子を伺った須藤くんがOKサインを出す。中はやはり怪しげな店がごちゃごちゃと並んでいた。大きなピアスや刺青のデザインが並ぶ木の棚、様々なナイフが飾られたショーウィンドー。きっとこのようになる前はいかついお兄さんやド派手なお姉さんの姿をちらほら見る事ができただろう。

私たちは店の間を足早に進んだ。店の奥から時々呻き声が聞こえたが、私たち自身音を出さないよう細心の注意を払っているので大丈夫なはずだ。

登り階段が見えてきた。その手前、須藤くんがピタリと立ち止まった。

「どうした須藤」

「ちょっといいか？」

そう言う須藤くんは一つの店に入り、そして一分もしないうちに出てきた。手には先程目にした鈍く光る金属——メリケンサックがはめられていた。

「対人用の武器だ。サイコパスどもはこれで叩きのめす」

須藤くんが再び先頭に立ち歩き始めた。メリケンサックをはめた拳が、爪が掌に食い込むほど強く握られていた——。

外に出てゾンビの少ない道を暫く歩き私たちは古いビルの前にやって来た。

「ここか？」

「ああ。中には誰も入ってねえようだな」
「どうしてわかるの？」

須藤くんが汚れて曇った硝子扉をコンコンと軽く叩く。

「この扉も窓も全部がたついて開かねえんだよ。入るには割るなりしねえと」

そう言うと須藤くんはこの廃ビルと隣の建物の間の狭い道に入っていた。私たちもその後を追う。

「うう……早くしてくれないかな？ 意識が遠退いてきた」
「ああ、悪いな相田。あともう少し堪えろ」

そこには廃ビルに沿うようにして朽ちた本棚が置かれていた。須藤くんが荷物をおろしそれを横にずらす。

「隠し扉か」

本棚のあったコンクリートの壁にはぽっかりと人一人が通れるほどの穴があいていた。

「ここは俺の隠れ家だ。構造は全て把握してる。当分は安心だぜ、行くぞ」

私たちは一列になって廃ビルの中へ入っていった。その時はまだ私たちを見つめる2つの影に気付く由もなかった。

第二十九話 思い（前書き）

一人称で初々しい恋愛書くのはかなり恥ずかしい！ と今さらながら思ってしまった作者です（^| ^;）

四章からはかなり人間関係が荒れて大波乱な展開になる予定なので、ここまで純粹？ な人間関係描写も少なくなるかなと思います；

第二十九話 思い

「うぐううっ……！」

朽ち果てた椅子、錆び付いた机。薄暗がりの中埃が黄金色の光を帯びて大量に舞う。そんな幽霊が出そうな雰囲気の部屋に弱々しい呻き声が響いた。

「駿、男でしょ。我慢してっ」

私たちは須藤くんに導かれ廃ビルの二階に上がり、そこで相田くんの荒治療を開始した。奈美さんが真剣な顔をして相田くんの二の腕に刺さった矢を引き抜こうと力んでいる。

「矢尻が肉に食い込んでいるからな……痛いだろう。可哀想に」

佐伯くんが哀れみを込めた目で相田くんを見る。

「か、可哀想だと思うならっ……こいつにもっと優しくするよう言っ
てよっあああーっ！」

「はあっ抜けた！」

血にまみれた矢尻が現れ、私は想像を絶する痛みを我慢した相田くん
に称賛の気持ちを込めて何となく拍手する。矢が刺さっていた場所
は肉がくり貫かれ赤黒い血が込み上げておりかなり痛々しい。

「おいてめえらもつと静かにできねーのか？ ちよつと外に出れば
ゾンビがうようよ彷徨いてるんだぜ」

見回りに行っていた須藤くんが帰ってきていた。呆れた様子でこちらを見てくる。

「すまない。でももう大丈夫そうだ」

「うげっ、相田の奴哀れだな」

不慣れな手付きで奈美さんが傷口を包帯で巻いていき、相田くんの片腕はアメコミのセーラー服を着た某キャラクターのように不自然に膨らんでしまっていた——いやあれは上腕か。

「はいっおしまい！」

「……ありがとうございます、一応」

「そういえばその包帯誰が持ってたんだよ？　もしかしてこのビルに放置されてたの使ったんじゃない？　だろーな？」

相田くんがひいいと悲痛な声を出す。確かにそれは……ヤバいかも。

「そこまであたしは非常識じゃないって。佐伯がくれたの」

「ああ。俺の鞆にはパソコンの他にも簡単な救急道具が入ってる。

剣道の練習があるし念のために持ち歩いてるんだ」

「佐伯くん流石！」

あまりのデキる男ぶり？　に合いの手みたいな称賛の声を送ると佐伯くんは困ったような笑顔を見せた。それにしても相田くんが無事でよかった……。

「さーて、この後はどうするの？」

「まずは明日のルートの確認をしよう。いざという時すぐ行動できるようにだ。その後は情報収集するなり……いや、ゆっくり休んだ

方がいい。特に二人はゾンビと遭遇してまだ1日も経っていないのだから」

それを聞くと奈美さんと相田くんは急に真顔になり押し黙ってしまった。佐伯くんのアパートの前で出会ってからずっと、いつ死ぬかもわからない状況で必死にここまでやってきたのだから、ゆっくり自分のことに思いを巡らす時間などなかったのだ。

「……明日の確認の前にもうちよつと休憩しようよ?」

余計なお世話かとも思ったが私は思い切って皆に提案した。すぐに全員の同意が得られ、奈美さんと相田くんは携帯電話を手にもって先に廊下へと出て行った。やはり二人とも普段通りに振る舞っていても（彼らの普段を私は知らないが）家族の安否が心配だったんだ。当たり前だ。私も夜になったらお母さんに真っ先に連絡しなくちゃ。もうすぐ誠の高校に着くよって……。

「ちっ、またメール寄越しやがったあのクソ親父」

携帯をチェックしていた須藤くんが憎々しげに呟いた。

「お父さんから? なんて?」

「近所の公民館に避難してるから可能なら来いとよ。てめえが迎えにこいってんだ。来たところで追い返してやるけどな」

須藤くんは避けた布から綿が飛び出たボロボロのソファに勢いよく腰かけると乱暴に携帯を向かいのテーブルに放った。ソファはダニが大量発生してそうで正直座りたくない。痒くなりそう……。

「佐伯と伊東も座るか？」

「遠慮しておく」

「私も……いいや」

しばし何とも言えない微妙な空気が流れ少し焦った私はさっきの話題に戻すことにした。

「お父さんもさ、何だかんだ言って心配してるんだよ。当たり前じゃない、血の繋がった自分の息子だよ？」

「いや、奴らは自分たちを守る盾がほしただけだ。俺のこと筋肉バカって陰でバカにしてたからな。あの女に限ってはブランド力だけあるバカな女子大出のくせによ、それで礼節も教養も身に付けずに下品で着飾ることしか能ねえんじゃない。俺はよ、奴らを見返してやりたくて不良の道から足を洗ったようなもんだ」

一気に捲し立てる須藤くんにも何も口を挟むことができず、軽く相槌を打ちながらおろおろしてしまう。これだから私は……。でもこんな時だからこそ何か言わなきゃ。恥ずかしがったらダメだ！

「わ、私は須藤くんのこと本当に信頼してる。逞しいし頭もきれるし、言葉はちょっと乱暴だけど優しいし。そんな須藤くんだから、私は家庭の事情なんて何も知らないけど……大切な存在だと思うんだ」

「……………」

須藤くんが真顔で固まってしまった。……あああ恥ずかしい！

佐伯くんが微笑ましいな、とでも言いたげな生暖かい視線を送ってくる。

「……サンキュ」

もういつそのこと謝ろうかと思った矢先、ボソツと須藤くんが呟いた。

「え？」

「そんなことあまり言われたことねえから、ちょっと嬉しい」

あの須藤くんが仄かに頬を染めている！ これはツンデレというやつでしょうか？ 私は心の中の萌えメーターが振りきれのを感じた。

「須藤くん可愛い……」

「はあ！？」

何とも言えない温かい感情が込み上げ須藤くんのごつごつとした大きな手を両手で包むと、真っ赤な顔をした須藤くんが表情を崩して大きな声をあげた。

「なんかすごく愛しいよ。ずっと仲良くしようねっ」

今自分は感情が爆発していて、疲れているせいもありとても変なことを言っている。しかし自覚はあるけど止められない。

「……！ お、おいつ佐伯が羨ましそうに見てるぜ。大丈夫だ佐伯、伊東は取らねーよ」

「なっなんで俺に話をふる？」

どこかドギマギとした様子の佐伯くんを見て須藤くんはニツと笑うとくるりと後ろを向いた。

「……俺はお前らといれて本当に良かったと思ってる。全員生き残るためならよ、サイコパスだって躊躇なく殺すぜ」

「須藤、それは俺も同じだ。ここにいる皆と巡りあえたことに感謝している。三人で大学の体育館に籠っていた時思ったんだ、俺は相手が何であっても剣を振る。絶対に皆で生き残るとな」

私たちの間に温かい空気が流れた。同じ気持ちを共有している――
―すぐく安心する。

「つたくお前はいつもよ、そんな臭いこと恥ずかしげなく言えるなんて感服しちまうぜ！　なあ、皐月？」

「え？　ああ……うん」

いきなり名前で呼ばれ面食らって思わず肯定してしまった。いや、今は肯定しちやまずいところだったんじゃない？

「さ、さつ……？」

「俺たちは命を預けあう仲間だぜ？　いつまでも名字にさん付けはおかしくねえか？　まあ男同士は気持ち悪いから現状維持で」

「そんな……男同士名前呼びもいいと思うよ？」

須藤くんと佐伯くんが試しにと言ってお互いを名前で呼び合ってみたが――しっくりこなかったのかやはり名字のままにするらしい。

「えっと、じゃあ英雄くんと……義崇くんね」

楽しくなって二人の名前を交互に何度も復唱しているとヨシタカヒデオっていう人名みたいだからやめてくれということでは止められた。

「で、佐伯は？」

「はい？」

「佐伯も試しに呼んでみるよ」

「いや……今はいい」

また義崇くん——なんだかしっくりこないのでもここまでは今まで通り二人は佐伯くん、須藤くんと呼ぶことにする——佐伯くんをからかうようなやり取りをし始めたが、ちょうど奈美さんたちが帰ってきた。

「ダメだった……通じないよ」

「僕は災害時伝言サービスで両親からのメッセージを確認したけど……今は無理だ、通じない」

奈美さんも相田くんもこの少しの時間の間に疲れはてた顔に変わってしまっていた。二人が今味わっている家族と連絡がつかない恐怖を思うと私も胸が苦しくなる。何も言えずにいる私たちを見て奈美さんがソファアに腰掛けふっと息を吐く。

「いいよ、あたしたちのことは気にしないで。明日のルート確認しよう」

「……電源が切れたとか逃げている間に携帯を落としたとか可能性はいくらでも考えられる。少なくとも自分たちの安全を確保するまでは悲観的になってはダメだ」

「わかってるよ!!」

奈美さんが大声を張り上げる。苦しい気持ちがじんじん伝わってくる……。佐伯くんは心底申し訳なさそうに俯くと再び口を開いた。

「すまない。余計なことを言ったな……」

「いや、こちらこそごめん。あたし今、冷静になれないみたい」

奈美さんが憔悴しきった様子で言った。どうにかして安心させたけれど、私には何もできないのが悔しい。

「なあ、悪いけど道案内は任せていいか？ はぐれないよう力を尽くすからさ。僕たちは今とにかく休みたいんだ……ごめん」

「ああ。ならこれ使えよ」

須藤くんが部屋に備え付けてあるロッカーから毛布と寝袋を取り出し、それを二人に投げる。

「安心しろ。つい最近まで俺が綺麗に使ってたやつだ。ロッカーには虫食い予防もしてある」

「でも、皐月ちゃんたちの分は？」

「私は平気平気！ 鞆に自分の入ってるから。奈美さんも相田くんも、ゆっくり休んでね」

本当は自分のなんてない。ただ二人には何も気にせずゆっくり休んでほしい。嘘をつくときはいつもどこか不自然ですぐばれてしまう私だが、今回はうまくごまかしている気がする。

「ありがとう」

奈美さんは疲れた顔で微笑んで相田くんと部屋の端に移動していた。

「さて、ここはうるさいから隣に移動するか」

奈美さんと相田くんを残して私たちは隣の部屋へ移動した。そこで佐伯くんの持ってきた地図を広げ現在位置を確認する。

「あともう少しだ。結構ここから近いんだね」

「ああ。これから住宅街を通って……順調にいけば一時間もしないうちに着くぜ」

「ただ何かあったらのことを考えればここに寄ったのは賢明だった。下手をすれば途中で夜になってしまったかもしれないからな」

簡単にルートを確認してまだ夕方の6時だったが私たちはもう寝ることにした。アパートを出てから戦闘続き。意識するまでもなく身体も心も疲れきっていた。

佐伯くんがアラームを朝5時にセットし、私たちは横になった。だが私はまだ寝れない。あと一時間は待たないと。お母さんに連絡しなくてはいけない。私は二人の安らかな寝息を聞きながら襲いかかる眠気に必死で耐えた。

第三十話 追跡者（前書き）

今回はいつもより長いです。これで第三章は終わりです！

どうでもいいことなんです。今回も書き終わって保存したら『このページは表示できません』と出てしまい1000字ほど書き直すはめに。。気に入っていた箇所だったのでwordなどで下書きしていいことを後悔しました（T|T）

登場人物紹介を本日8月20日更新したので興味がある方は是非ご覧ください。これから死の都市をよろしく願います！

第三十話 追跡者

「うん、わかった。誠のことは私に任せて。お母さんも気をつけてね。また明日ね」

私はお母さんとの通話を終えると携帯を閉じふうつと軽く溜め息をついた。誰もいない廃ビルの三階は真っ暗で、月明かりと携帯のライトだけが頼りだ。そして携帯の明かりが消えた今、私の回りを照らすものは何もない。……正直幽霊が出そうですね。変な話だ、存在自体怪しい幽霊なんかを怖がるなんて。昼間はそれよりもっと恐ろしいものを相手にしているというのに。そう考えると馬鹿馬鹿しく思えてきて私は早く寝ようと下に降りる階段へ向かった。

「……………」

背筋がぞくつとした。何だろう、今のは。獣の咆哮のような低い唸り声。ゾンビではない——なら何なのか？ ふと屋敷の曇りガラスに映った大きな影が思いだされる。冷や汗がこめかみから頬を伝う。すると廊下の直線上に一つの黒い影が現れた。

窓から差し込む青白い月光に照らされたのは——色素の薄い髪を逆立てた浅黒い肌の青年。

「須藤くんか……」

私の声に気付いたらしい、須藤くんがビクリと身体を震わせこちらを向いた。……様子が変だ。私の方へゆっくり歩み寄ってくる須藤くんにも私も小走りで近付いた。

「須藤くん、どうしたの？ 顔色、悪いよ……？」

「名前で呼び合うんだろ」

無理に作った笑顔でそう言う須藤くんの声はひどく掠れて苦しうだった。本当に何があったのか？ 問いかけようとしたその時、須藤くんがいきなり私にもたれかかってきた。

「え？ な、なに？」

「……感触が手に残ってる」

耳元で囁かれたその言葉を辛うじて聞き取る。仄かに漂う酸の匂い。感触——ここに来るまでの間のサイコパスとの戦闘が思い返される。そうだ、須藤くんは生きた人間を相手にして、斧で切りつけたのだ。ゾンビと違って新鮮な血が噴き出し、相手は激痛に悲鳴をあげていた。

「あれは、しょうがないよ……。だって無抵抗のままでいたら相田くんは殺されてたし、私たちは……凌辱されてたかも。今日本に法は機能してないし……誰もああいう人たちを裁かないんだよ。……英雄くんがあの時行動してくれてなかったら、さっきの平穏な時間はなかった。英雄君のおかげだよ」

虚ろな目で天井を仰ぐ須藤くんにできるだけ柔らかい声で言葉を掛ける。しばらくして私の肩に軽く寄りかかっていた須藤くんがゆっくりと離れた。

「サイコパスどもには躊躇しねえとか言っただけで……悪いな。情けないとこ見せちゃって」

「ううん」

「俺はもともと喧嘩っ早くて相手の顔貌が変わるまで殴り続けるような奴で……相手を傷つけて、痛めつけることに快感を覚えてた。人を殺さずにいたのは捕まって自由を失うのが嫌だっという理性が少々働いてたっただけだ。変な恐怖感があんだよ。お前が言ったように犯罪者が裁かれることのない……暴力が支配するようなこの世界で、俺はおかしくなりやしねえかなって」

「ならないよ、英雄君は本当は優しいから。絶対にならない」

須藤くんは弱々しい笑みを見せるとこちらに背を向けしばらく一人にしてほしいと告げた。須藤くんがこんなに弱いところをみせるなんて初めてだ。……皆心が欠壊しそうになりながらも必死にバランスを保っているんだ。誰かに頼りすぎちゃいけない。その人が壊れちゃう。皆で背負っていかなきゃ。私はあまり遅くならないようにねと彼の背中に声を投げかけると再び階段へ向かった。

「……………?」

何か物音がしたような気がした。そして誰かに見られているような変な気配。でもここには私たち以外に人はいないはずだ。気のせいだろう。疲れているんだ……。私は早く寝ようと歩を速めた。

朝、アラームの音で目が覚めた。寝起きが悪い私は重たい瞼が重力に負けて閉じようとするのを何とか堪えながらも、ごろんと寝返りを打ちなかなか起き上がれずにいた。

「ほーら、起きなさい!」

「うぎゃっ!」

突然腹部をくすぐられ私は変な弾みをつけて飛び起きる。ゴツンを壁に頭をぶつけ何が起きたのかすぐには把握できずにぽかんとしている。とクスクスと笑う奈美さんと目があつた。

「もう出発するって。はい、朝ごはん」

軽く放られた細長い包装を慌てて受け取ろうとするが掌にあたつて床に落ちた――大豆のスナック菓子だ。そういえば昨日は何もご飯を食べていない。その時今まで忘れていたかのようにおなが鳴る。恐怖と緊張で空腹に気付かなかった。

いつの間にか奈美さんの隣にいた相田くんがぷつと吹き出す。私は起きてから少しの間にした自分の挙動が恥ずかしくなり火照る両頬に手を添える――その一方で奈美さんや相田くんが朗らかに笑っていることに安心した。ゆっくり休んで落ち着きを取り戻したみたいだ。包装を破って大豆バーをかじっていると奈美さんがそつと私の隣に腰掛けた。

「……うちの両親、機械の操作が大の苦手で携帯を持ち歩く習慣とかないんだよね。そう考えると大丈夫かなって。いつもあっけらかんとしてる人たちだし。関西に住んでるから会うのは簡単じゃないけど……あたし信じるよ。もう迷わない」

「うん。また無事に会えるようにまずは私たちが生き残らなきゃだね。そういえば、彼氏さんはどうなの？」

「あー、実は早い段階であいつからはメール届いててさ。友達数人とアパートに籠ってるんだって。食べ物近所のコンビニから取ってきたらしいし、うまくやってるみたい」

弾む声で嬉しそうに語る奈美さんに私まで明るい気持ちになってくる。その時佐伯くんと須藤くんが部屋に入ってきた。もう既に荷

物を抱え武器を手にしている。

「そろそろ行くぞ……ってまだ臍月食ってんのかよ。早くしろ！」

「ううっ、タンマタンマ！」

「ふふっ、なんか懐かしい言葉だね」

無理やり残りを全部口に押し込んでむせかえる私の背を奈美さんがぼんぽんと叩く。ようやく飲み込んで涙目になりながらも床に転がっていた警棒を拾い立ち上がる。

「ここから晃東学園まで順調にいけば一時間、死なない限りどんなことがあっても日没までには到着するはずだ。落ち着いて行こう」

私たちは互いの目を見て頷く。そしてすぐに高校へ向けて出発したが、元来た隠し扉を通して廃ビルを出るとき須藤くんが小さな声を上げた。

「どうした、須藤」

「……何か違和感が、いや、何でもない」

須藤くんが自己解決したので私たちは何もそのことについて気にすることはなかった。すぐにその違和感は解明されることになるのだが。

廃ビルを出て寂れた通りをしばらく進み、私たちは一戸建てが立ち並ぶ住宅街に出た。その間ゾンビに遭遇することはあまりなかった。当り前のようなことだが、やはり人がたくさんいた場所にゾンビは現れるのだ。要するにゾンビはあまり自発的に移動しないということになる。

ゾンビを寄せ集めないよう無言で進んでいたが先頭を進む佐伯くんが突然道の真ん中で立ち止まった。

「義崇くん？」

「……誰だ」

佐伯くんの低くよく通る声が静かな住宅街に響く。さっぱり意味がわからなかったが私たちに言っているのではないことは確かだ。須藤くんはわかっているらしく、じっと後方に目を向けている。二人の視線の先を辿ると民家を囲うコンクリート塀の陰に何かがいるようだ。

「そこにいるのはわかっている。出てくるんだ」

少しして戸惑いながらも学生服に身を包んだ二人の男女が姿を現した。私は思わず目を見張った。サラサラの金髪に冷たいほど青い瞳をしたすらっとした美少年に、柔らかそうなライトブラウンのストリートロングヘアをなびかせる愛らしい顔立ちの美少女。テレビから抜け出てきたような美しい容姿をした二人に私はしばらく目を離せずにいたが佐伯くんはそんなこともお構いなしといったように二人に問いかけた。

「答える。お前たちは何者だ？ 何故俺たちをつけてきた？」

「……………」

二人は顔を見合わせ渋っているようだったが観念したのか少年の方から話し始めた。

「ボクは渡部・キリーロ・一輝。私立晃東学園に通う高校生です。
この娘は大宮紗莉南おおみやさりなで同級生です。黙って後をつけていたのは謝りますが、あなたたちを陥れようと悪さを企んでいたわけじゃありません。ただ助けてほしくて」

なにやら長々しい名前を名乗った美少年が淡々と聞かれたことに答える。少女は少年の後ろでもじもじとして大きな瞳を瞬かせこちらの様子を覗っている。そういえば二人の制服には見覚えがある――誠の着ているのと同じだ。

「ハーフか。生意気な名前しやがって」

「ちよつと英雄くんっ。二人は晃東の生徒だよっ？ 怖がらせちゃだめだって」

「そうか。晃東学園に向かおうとしているんだな？」

「はい。ボクたちじゃ無事辿りつけるか不安で」

「なら黙って付いてくるといい。当然現状は把握しているだろう？」

ごちゃごちゃと知らない無駄話をする私と須藤くんをよそに佐伯くんが二人と話し合いを続ける。最後の佐伯くんの言葉には奈美さんと相田くんが同時に反応し苦々しい顔をしていた。そんなこんなで二人の美形さんと行動を共にすることになった。

「今までどこにいたんだよ？ こいつらみたいに呑気に何も知らず家に籠ってたわけじゃねーよな？」

「ちよつと、呑気はいらないでしょっ」

「ボクたちは早くにゾンビの存在を知ってずっと家に隠れていました。でも昨日食料が尽きて……このままじゃあまずいと思って体力のあるうちに避難所に移動しようと思ったんです」

歩きながらも私たちは小声で話し続ける。そういえばさっきから

美少女——紗莉南ちゃんは一言も喋っていない。緊張しているのだろうか。シャイな娘なのかな……。いや、そうじゃなくてもこんな事態だ、周囲を警戒するのは当たり前だろう。どうにか警戒を解けな
いかな。

「ねえ、紗莉奈ちゃん……だったよね？」

「……………」

紗莉奈ちゃんは少し困ったような表情を見せると小さく頷いた。よく見ると渡部君ほどではないにしろ日本人離れた外見をしているような……彼女も外国人の血が入っているのだろうか。

「誠、伊東誠って知ってる？ 私の弟で晃東に通ってたんだけど……

……。あ、今高校二年生」

「……知ってる」

「本当に？」

「クラスメートだったから」

鈴を転がしたように可愛らしいか細い声で彼女は答える。しかしあまり話したくないのだろうか。気怠げというかどこか不機嫌な感じがする。きっと外見通り繊細な娘なのだ。気分を害してしまったのかも……。自分の無神経さにしゅんとなる。

「あとののくらいわかるか？」

「もうすぐ着きますよ。それにしても案外ゾンビいませんね」

渡部くんが汗ばんで顔に貼りついた髪を払う。そんな仕草さえも様になっているからすごい。その時私たちの耳に久しく——といっ

ても一日にも満たない間だが――聞いていなかった不気味な呻き声が飛び込んでくる。

「ひいっ！」

呻き声を聞いてそんな高く小さな悲鳴をあげながら真っ先に列の最後尾に回り込んだのは――これまた渡部くんだった。涼しげな顔をして、この若さで人生を達観しているような態度をとる彼が……実は極度の怖がりだったとは。結構怖がりな相田くんさえ彼の反応を見て面白がっている。まあまだ高校生なのだから変に慣れてしまっているよりはよっぽど自然なのだが。

紗莉奈ちゃんは大丈夫かなとチラと様子を覗う。……彼女はなにも動じていなかった。それどころか眉間に皺を寄せ怖い表情をしている。まるで何かを憎悪しているような。私は彼女になにか底知れぬ恐怖を感じた。おかしいことだ、ゾンビでもない普通の女の子だというのに。

それからゾンビの声を聞いたり姿を見かけることはあってもどうにか戦闘になる事態は避けられた。それは本当によかったと思う。この二人を連れたまま木刀や斧でガシュガシュとゾンビの頭を叩き割ることはできない。きつと酷いショックを与えることになる。パニックに陥るかもしれない。

「見えてきたな」

しばらくして住宅と住宅の間から高い塀が姿を現した。その頑丈な塀が落ち着いたクリーム色の壁のモダンな建物を囲んでいる。そういえば晃東学園は割と最近創設された学校なのだと聞いたことがあった。もうすぐだ、もうすぐ高校に着く。誠に会えるかもしれない

い。いや、会える、会うんだ。

少し離れた所から塀をぐるりと見渡すと門にかけて結構な数のゾンビが辺りをうろついていることが分かった。しかし突破可能な範囲だ。

「ちっ、ゾンビ共がいやがる」

「すまないがこれから門までゾンビのいる道を進むことになる。俺たちがまず先に進むが、酷く凄惨な光景を目の当たりにすることになる……堪えられるか？」

「だ、大丈夫。堪えますよ、もうすぐ高校なんですから。……おそろしく怖いですけど」

二人の同意を得ると（紗莉奈ちゃんは何も言わなかったので勝手に同意とみなした）佐伯くんが私たちに向き直る。

「俺と須藤が前線で戦う。相田さんは後方から援護をよろしく頼む。あと二人のどちらかに渡部くん和大宮さんの護衛を頼みたいんだが」「そういうことなら皐月ちゃんがいいよ。人を落ち着かせる雰囲気あるから。一方であたしはダメダメ。それに警棒よりあたしのバットの方がゾンビを殺りやすいしね」

奈美さんに強く推されて私が二人の護衛をすることになった。そして間もなくゾンビとの戦いが始まった。順調に前線の三人がゾンビを倒していく。ゾンビの数が多く密集しているところは相田くんがスリングショットで的確に打ち抜き間引いていった。数十秒くらいの間、戦闘にすっかり目を奪われていた。はっとして私は慌てて二人に目を戻す。

「大丈夫？　気持ち悪くな……い……？」

近くの民家から一体のゾンビが姿を現した。死人のように青白い肌。露出した肋骨からは内臓が今にも零れ落ちそうだ。そしてゾンビの眼前には渡部くんと紗莉奈ちゃんがいる。なぜそこにいるの？　さっきまで私のすぐ傍にいたはず……。

民家に背を向けている渡部くんはゾンビの存在に気付いていないが紗莉奈ちゃんの目には入っているはずだ。次の瞬間私は信じられない光景を目にすることになる。紗莉奈ちゃんが渡部くんを――ゾンビの方に向かって強く押した。

番外編 清見 千香子 前編（前書き）

九月ごろから書き始めなかなか結末に苦戦している番外編です^^;;
短いのにまさかの二部構成です（汗）後半も近いうちに更新します。

番外編 清見 千香子 前編

大学生になって初めて経験するアルバイト——商品を並べたりレジを打ったり——そんな単調な作業を黙々とこなすのが私の性にあっていと思う、私は大学の近くのコンビニの店員に挑戦することにした。しかし思っていたよりも仕事内容は複雑で。少しお堅いところはあるけれども学業やサークルと両立させようと奮闘する私の相談に親身になって応じてくれる店長や、老若男女様々で個性豊かな他の店員たちに迷惑をかけながらもようやく慣れてきたと感じるようになった頃——その日は突然やってきた。

「いらっしやいませー……」

最初から変だと思ったのだ——。それを視界にとらえた瞬間、身体に痺れるような緊張が走った。自動ドアをくぐりよると店内に入ってきたその人は、どう見ても普通の人間ではなかった。額から血を流し、腕の関節は変な方向に曲がっている。目は虚ろで肌は死人のように白い。歩き方も頭の頂点を斜め上から紐で引っ張られているような感じで不自然で——とにかく全てが奇妙だった。

「き、清見さんっ……なんすかこの人？」

もう一人のレジ当番、寺崎海斗くんが困惑した表情でそっと耳打ちをする。いまどきの高校生といった風貌の彼とは同じ時間帯にシフトを組まされることが多かったため、早くに打ち解け今ではよく話をする仲だ。最近所属するバドミントンサークルの活動も忙しくなり疲れが溜まっていたので幻覚かとも思ったけれど、彼も見えているのならその可能性は……無いだろう。

「……さあ」

ふらふらと店内をうろつく不審者を目で追いつつ考えを巡らせる。何か行動を起こさねばとは思うが、その人があまりにも異質すぎて思考が追いつかない。

「映画の撮影すかね？」

「うん……でもそんなこと聞いてないよね」

とりあえず怪しいし不審人物がいるって店長に報告しよう——そう寺崎くんと言おうとした矢先だった。

「うわああああっ！！」

雑誌コーナーでさっきからずっとTV番組情報誌を読み漁っていたフリーター風の若い男性に不審者が突然もたれかかってきたのだ。全体重をかけ倒れこんできたその人を咄嗟に受け止められるはずもなく、男性はバランスを崩し本棚に激突する。そして次の瞬間、私は自分の目を疑った。

「いぎゃあああーっ……！！！！」

不審者が男性の喉笛に喰らいついたのだ。鮮血がホースから出る水の如く噴き出し、本棚の雑誌を真っ赤に染め上げる。

「なんだあ……、うわあああっ！！」

他のお客さん達も事の異常さに気付いたようだ。店内の至るところから悲鳴が上がる。不規則に痙攣する男性の首の肉は大きく削がれ、今も血がドクドクと白い床に垂れ落ちていた。

「……どうしたっ！」

騒ぎを聞きつけて店の奥から慌てた様子の店長が出てきた。私は混乱した頭で黙ってそれを指差す。

「何をしているんだ君っ！ やめなさい！」

店長が不審者を男性から引き離そうとする。しかしその人は物凄い力で男性にしがみつき、離そうとしない。店長は不審者が男性に食いつこうとするのをどうにか引きとめていたが、後ろに体重をかけすぎたのかよろめいて尻餅をついてしまった。

「くそっ……！ 離れろって言ってるのがわからんか！」

咄嗟の判断だったのだろう。血を見て動揺したのもあるだろうが――店長は側にあった小型の本棚を抱え上げ――思い切り降り下ろした。

……ゴキッ

正面から殴ったのだから腕をかざすなどして防ぐと思ったのだが……。本棚がモロに直撃した不審者の頭はあらぬ方向に曲がり、背面から真っ直ぐ床に倒れた。

店長も周りのお客さんもしばらく啞然としていたが、外が騒がしいのに気付いた店長が携帯電話を手に様子を見てくると言ってふらふらと外へ飛び出してしまった。

それからしばらくして立ち尽くしていたお客さんも恐怖に駆られ

て一目散に出入口に向かっていった――が、そこにはさっきの不審者と同じような容貌のもう一人が待ち構えていた。さっき店長が倒したはずのも平然と起き上がってお客さんの方に向かっている。

「ぎゃあああぁっ!？」

「いつ、痛っ痛いぃー!!！」

――地獄だ。カウンターに囲まれ早くも逃げ場を失っていた私達はただ呆然と眺めることしかできなかった。その時、私の袖を誰かがぐいっと引っ張った。

「いやぁ――うぐぐっ!？」

「清見さんっ静かにっ。気付かれちまうよぉ……」

寺崎くんがカウンターの陰に私を引き寄せ悲鳴を上げようとした私の口を塞いだのだ。そう言う寺崎くん自身は怯えて全身をガタガタと震わせていた。年下に助けてもらってしまった……自分が情けない。

「うっ……」

冷静になると先程の光景が頭に過り、吐き気が込み上げてきた。酸っぱい味が口内に広がる。カウンターの向こうの化け物たちに気付かれなかったか心配だったが、どうやら大丈夫だったようだ。

＊

どのくらいの間こうしていたのだろうか。随分前に悲鳴は途絶え、ただ不気味な湿った咀嚼音だけが耳に入ってくる。

クチャ……クチャ……

人を、食べてる……？ 信じられないが、そうにしか思えない。
一体何が起きているのだろうか……？

寺崎くんと身を寄せあつて言い知れぬ恐怖に堪えていたその時、
毎日のように聞いている耳慣れた軽快なメロディーと共に人の気配
が近付いてきた。

番外編 高校到着前（前書き）

番外編一つ目です。皐月が佐伯のダサイ服とさよならするお話なので、特にストーリーと関係なし（^| ^;）

渡部くんを出すことがこの話のもう一つの目的だったり（汗

番外編 高校到着前

どうやら晃東の生徒らしい渡部くと紗莉南ちゃんが加わり、私たち七人は順調に高校へと進んでいた。少し大きめな一戸建てが建ち並ぶ通りにゾンビは少なく、みんな比較のリラックスしている。

ゾンビを誘き寄せないよう一言も喋ることができないため、暇も相まって周囲を見渡しながら通りを歩いていたとき、民家に紛れて小さなブティックが目についた。普段からあまり客が入らないのだろう、中に何者かがいるような気配はない。

(あっ……!)

エスニックとでもいうのか、色とりどりの妙な柄の服が並ぶショーウィンドーに映し出された自分の姿——そのあまりの酷さに愕然とする。目に痛いショッキングピンクのシャツに裾を折り曲げたダボダボのジーパン。髪は例のごとくボサボサで……。

「ちょ、ちょっといいかな」

「……どうした？」

先頭の佐伯くんにそつと耳打ちすると彼は私が危険を察知したのだと思っただけ——緊張感を伴った声色で返してきた。

「あつ、別にたいしたことじゃあないよつ。ただ……その……」

一刻も早くと高校へ向かう中——それも私の要望で、だ——こんな我が儘を本当に言っているのかと店を横目に捉えながらも口ごもっている、思いがけなく後ろから声かけられた。

「いいよ、そこ寄ろうよ。それじゃ歩きずらいでしょ」

後ろを振り返ると奈美さんがニコツとこちらに微笑みかけていた。どうやら言葉にするまでもなく私の言わんとすることを察してくれたようだ。

「ああ、そういうえば服を見ると言う約束だったな。すっかり忘れるところだった……すまない」

「いやいやそんなそんなっ、別にこれでもいいんだ。渡部くんたちも早く着きたいだろうし」

ちらと渡部くんたちに目を移すと、寄り道をすることはさして気にしてない様子だ。

「いや、構いせんけど。紗莉南もいいだろ？」

「……少しなら」

「でも……悪いなあ」

「行くぞ」

なんだか申し訳なくなつて諦めかけたその時、反論は許さぬと言わんばかりの強い口調で須藤くんが言い放った。元々目付きの悪い目は不機嫌に細められ、全身から威圧感を漂わせている。これじゃあ紗莉南ちゃんも怯えちゃうよね……。

「俺も着替えてえんだよ。こいつらには有無言わせねえぞ」

そう言ってスタスタと入り口へ向かう須藤くんの背中には汗だくで、鮮やかな黄緑色のタンクトップに大きな濃い染みを作っていた。

「うーん……なんというか……」

「微妙だね」

折角付き合ってもらっているのだからと言い出しずらかった言葉をまたしても奈美さんが代弁してくれた。そうなのだ。何となく入る前から予感はしていたが、ここはいわゆるおばちゃん御用達のお店。やけにヒラヒラした薄手の生地に幾何学模様。どことなく熱帯林の虫たちを思い起こさせる色の選択。大学生の小娘にはちよつと……早すぎるかもしれない。

「やっぱりそれ、皐月ちゃんの服じゃなかったんだね。サイズも大きいし、趣味悪いし」

少し離れたところで服を探してくれている佐伯くんが大きく身体を揺らして反応する。彼の手には見えて目が回りそうな奇妙な柄の服。……血は争えない、かも。

「なんて言いますか、ここの服からはセンスが微塵も感じられませんかね」

渡部くんが涼しげな顔で気持ちいいくらいズバツと言い切ってくれた。

「んー、まあ、これでいいかな」

早く決めねばと焦る心でずらりと並んでかけられたワンピースの中からまあまあいいかなと思う色合いのものを手に取る。四角とか三角が規則正しく配置されたやはり妙な柄のそれはゆったりし過ぎ

ていたがまあ見れるかもしれない。

着替えを終え出ようとした時、須藤くんの姿がないことに気付いた。

「あれ、須藤くんは？」

「試着するってさ。ここ婦人服なのに大丈夫なのかなぁ」

相田くんが苦笑い混じりに答える。確かに……ここには須藤くん好みの服なんてない気がする。その時、シャツと勢いよく試着室のカーテンが開かれた。

「まあ、こんなもんかな」

得意気な笑みを浮かべて出てきた須藤くんは元々着ていたジーンズにピッチリしたヒョウ柄のTシャツ姿だった。うん。意外と似合うかもしれない。……うん。

「どうだ佐伯。お前の服より数倍マシだろ」

「ああ、いいと思うぞ」

「こいつら似た者同士ね」

「おしっ行くぞ」

呆れたように呟く奈美さんの言葉は耳に入らないのか、ズカズカと出口に向かう須藤くんの背中を見て目を疑った。

「ヒョウがいる……」

ヒョウ柄の中にヒョウがドンと丸ごと一匹描かれていた。須藤くんに似た目でこちらを睨んでくる。須藤くんとおそらく佐伯くんを

除く私たち数人の間に何とも言えない空気が流れる。

「趣味わるっ」

誰もが思っていたことだろう。奈美さんの一言が無人のブティツクに虚しく響いた……。

登場人物紹介3

■第三章

・高岡 奈美 たかおかなみ

> i 2 9 4 5 7 — 3 5 7 0 <

大学三年生 1 6 5 ?

イベントサークルに所属する女子学生。

勝気で凛とした性格。姉御肌。

・相田 駿 あいだしゅん

> i 2 9 4 5 8 — 3 5 7 0 <

大学三年生 1 6 8 ?

奈美と同じサークル所属の男子学生。

少し臆病で弱腰だが、豊富な知識で活躍する。

・立花 優子 たちばなゆうこ

> i 2 9 4 5 9 — 3 5 7 0 <

大学二年生 1 5 6 ?

奈美と駿の後輩。

健気で頑張りやな女の子。

・渡部・キリーロ・一輝 わたべきりーろかずき

> i 2 9 5 3 1 — 3 5 7 0 <

高校二年生 1 7 1 ?

私立晃東学園に通う男子生徒。ロシア人とのハーフ。
気取っている反面怖がりなどこか憎めない性格。

・大宮 おおみやさりな 紗莉南

>i29532—3570<

高校二年生 158?

私立晃東学園に通い皐月の弟誠とクラスが一緒。

シャイであり話さないおとなしいこのようだが……

第三十一話 自責（前書き）

いつもなら番外編を章の終わりに置くんですが本編がスラスラと進むので先に第四章一話目を投稿しました！　これからごちゃごちゃになっていきます（＋＋）最後なんて昼ドラみたいなの？　終わる方……

第三十一話 自責

「えっ？ ……うわああああっ!!」

「きやああああっ!」

二人の悲鳴が重なり合う。一人はゾンビに押し倒され今にも噛みつかれようとしている渡部くん、もう一人は彼をゾンビの方へ押しやった——ように見えた——紗莉奈ちゃんだ。紗莉奈ちゃんは酷く怯えている様子で一目散に私の方へ駆けてくる。やはり気のせいだったんだ。押したのだとしてもそれは二人で冗談を言って軽く小突いた程度のことかもしれない。

「紗莉奈ちゃん、落ち着いてっ!」

渡部くんを助けたいところだがとりあえずは暴走してこちらに向かってくる彼女を咄嗟に抱きとめようとする——が彼女は私をさつと避け通り過ぎてしまった。今の悲鳴で皆もこちらの事態に気付いたはずだ。私が今しなくちゃいけないことは渡部くんの救出だ! そう思い彼の方へ視線を戻す。

「……あ、ああ……」

いつの間にかゾンビがたくさん集まっていた。それらは口元を新鮮な血で真っ赤に染め上げ、ぼろぼろと肉片を撒き散らしながら貪り食っている——さっきまで心地よいテノールの声で話していた美しい渡部くんを。

彼は喉を深く噛まれたらしい、声にならず苦しげに息を漏らしながら目に一杯涙をためて助けを請うようにこちらを見ている。美し

い金髪に血飛沫が飛び散り、透けるように白い彫刻のような肌は噛み痕だらけで赤い肉を露出させている。もう、間に合わない……。そう判断した次の瞬間、醜悪な顔をしたゾンビが彼のうなじに、首に次々と喰らい付き――渡部くんはびくんと一回身体を大きく痙攣させるとぐったりと頭を垂れ……。死んでしまった。

これ以上見ていられなかった。私は惨状から目を背けると佐伯くんたちの方へ走り出した。紗莉奈ちゃんは――いた。須藤くんの背中に寄り添うようにしていたが当の須藤くんは戦いの邪魔だ、と言わんばかりに彼女をぞんざいに扱っている様子だ。門にかけて周囲にゾンビはほとんどいない。地面に惨たらしい死骸がごろごろと転がっている。しかし油断は禁物だ。音を聞いて次々にゾンビが集まってくる。

「もう大丈夫だ！ 門に急ぐぞ！」

「義崇くん……」

「ああ、よかった、怪我はないか？ ……渡部くんは？」

「……………」

私は黙って後ろを指さす。佐伯くんはかなりショックを受けたように小さく声を漏らすとやがて俯き視線を逸らした。

「わ、わたしのせい……なのかな。せいだね。少しの間目を離しちゃったの。そしたら……二人が離れたところにいて、それで……」

「いいから。行こう」

震える声で途切れ途切れに話す私を、佐伯くんが心底呆れ返ったような、冷やかな響きを伴った声で突き放したように感じられた。

彼も疲れているし、私の気のせいかもしれない。いつものように気にするなと優しく言ってくれたのかもしれないが……混乱した頭では冷静に判断できない。

何とも言えない罪悪感が私を襲う。私がつとしっかりしていたら渡部くんは生きていたかもしれないのに。私はいつも皆の役に立ってないし迷惑かけてばかり……。

「お気の毒にね……彼氏さん。付き合ってたんでしょ？」

労るように紗莉奈ちゃんに話しかける奈美さんの言葉が胸に突き刺さる。そうか。二人は恋人同士だったんだ。しかしそれにしては紗莉奈ちゃんはあっさりと彼を見捨てたようにも思う。……私は何を考えているのだろう、紗莉奈ちゃんに責任転嫁しようともいうのか。

「……彼氏なんかじゃないです。ただの知り合い……この騒動でたまたま居合わせたので」

紗莉奈ちゃんはきっぱりと否定すると小走りで先頭を足早に歩く佐伯くんに近寄り何やら話をし始めた。何を話しているのだろう……。

「……随分あっさりしてるね。なんか変な娘」

「奈美、彼女は恐怖で正常な精神状態じゃないんだよ。そんな言い方……」

「駿、あんたも可愛い子には弱いんだね」

「え？ いやっ違うっ違うよ！ 僕はただ……」

奈美さんと相田くんの掛け合いが耳に入ってはすぐに抜けていく。

須藤くんが話しかけてくるまでしばらくぼけーつとしていたように思える。

「大丈夫か？」

「あっ、うん……」

「渡部が死んだのはお前のせいじゃねーよ。それに約束しただろ？後悔しないって」

そうだ。寺崎くんと清見さんが死んじゃって——佐伯くんのアパートで三人で約束したんだ。この地獄が終わるまで後悔しない、自分を責めないって。でも……やっぱり難しいよ。

ちらりと佐伯くんの方を見るとまだ紗莉南ちゃんと話していた。人形のように整った横顔の紗莉南ちゃんはまぶしいほどの笑顔で——彼も穏やかな笑顔で応えている。胸の奥がチクリと痛んだのを感じた。

「ほら、門が近付いてきたんだからもっと嬉しそうにしろよな」

「本当だっ。勿論嬉しいよ、嬉しい！ 誠に会えるんだもん」

本当に踊りだしたくらい嬉しいのだが、心身共に疲れ感情についていけない。無理やり声を張り上げ笑顔を作る私を須藤くんは真っ直ぐじつと見てくる。心の中が全て見透かされているようで落着かない。

「そういえば英雄くんたら、紗莉奈ちゃんをあんな邪険にしちゃだめでしょ。すっごく怖がってたんだよ？」

「ああ、鬱陶しかったからよ」

「もー……」

「……それにあいつ、あの女と同じ匂いがする」

「え？」

あの女って……この前も話に出たけれど須藤くんのお母さんのことかな。私は詳しくきき返そうとしたがタイミングがよいのか悪いのか、高校の門の前に着いてしまった。とはいっても三メートルほどの高さがある頑丈な門は固く閉ざされ開きそうにもない。どうするべきかと立ち往生していると頭上から男の声が降ってきた。相田くんが「うわっ」と驚いた声をあげ奈美さんが呆れたように溜め息をついた。

「避難民だな？ 今開ける」

門から少し離れた塀の上にヘルメットを被った男の人の顔が覗いていた。物見台のようになってるようだ。少ししてゴゴゴという重い音と共に門が両側からゆっくりと開かれた。ゾンビが来るからと早く入るよう促され私たちは急いで中へ入ると背後で再び門は閉められた。やっと国に守られた安全地帯に着いた。安心感で気を緩めた次の瞬間。

「止まれ！」

大きく陰しい声が聞こえたと思うと、門を囲んでいた迷彩服の男たちが私たちに一斉に銃を向けた。

「え？ え？ 何で？」

「駿、落ち着きなさいよ！ きつとあれ。やつらに噛まれてないか確かめるんだよ」

「その通りだ、察しがいいなお嬢ちゃん。感染者に噛まれたり引っ掻かれたりしたらこの避難所に入ることには許されない。厳重なチェックを通過した者のみ保護されることになってるんだ」

そのまま顔に深い皺が刻まれた上官らしき初老の男に私たちは両手をあげるように指示され、検問室へと通された。検問室は元々は門のすぐ傍に設置された警備員の待機室だったようだ。私たちは中へ入るとすぐに男女別々の部屋に分けられた。別れる間際に佐伯くんが「また後で」と私に言った。

「服を脱いでください」

両手を拘束された私と奈美さん、紗莉南ちゃんは背の高い女性隊員に命じられ下着姿になった。女性隊員が上から下まで傷がないか丁寧に見ていく。

「この頬の傷は？」

「あ、これは……矢が当たりました。人が放った矢です」

「そうね、引っ掻き傷にしては大きいもの。大変な目にあったのね」

女性隊員はヒョウなどの猫科の猛獣を連想させるきりっとしてスマートな顔をふと緩めると奈美さんの検査に移った。奈美さんが相田くんの家の硝子を割った時の傷が引っ掻き傷のように見えることからかなり手間取っているようだ。

「もう大分塞がってるし、結構前の傷なんですよ。ゾンビに引っ掻かれてたらもう変化してるはずでしょう？」

「引っ掻き傷は噛み傷よりも発症が遅いのよ。噛み傷と違って体液が体内に必ずしも入るわけじゃないから可能性も低いんだけど。この後どちみち全員に血液検査を受けてもらうからその時わかるわ」「……はい。大丈夫なはずですけど」

紗莉南ちゃんはその白い肌に傷一つ見つからなかった。確認が終

わると私たちは血液を採取されしばらく待機するよう言われた。部屋の片隅には女性隊員が銃を持って控えている。発症したら躊躇なく射つようだ。少ししてなんとも居づらい空気に耐えられなくなったのか奈美さんが静寂を破り話し始めた。

「そういえば、私たちはまだ大宮さんに自己紹介してなかったよね」
「……あ、そうだ」

二人で紗莉南ちゃんの方を向く。当の彼女は自分が話の中心になっているのがわかっていてるのかいないのか、ぼうっと何もない正面の壁を眺めていたが、しつこく向けられる視線によりやく気付いたようだ。

「……なんですか？」

「自己紹介させてよ。あたしは高岡奈美。大学生。よろしく」

「私も大学生で伊東皐月です。よろしくね」

「よろしく願います」

話は数十秒しか持たずまたしばし沈黙が続く。そういえば紗莉南ちゃんはこの後どうするのだろう。ここまで一緒に付いてくるという話だったが……。

「紗莉南ちゃんは、この後どうするの？ 家族には連絡とった？」
「家族とは避難所からの移動先で合流することになってます。……それまでは」

紗莉南ちゃんはそこで一拍置いた。そしてさも当然といったようにこう言った。

「義崇さんと一緒にいます。彼が私のことを守ると約束してくれたので」

第三十二話 約束（前書き）

この章ではゾンビが直接出てくる描写は少なくなると思います。

その代わりに人間関係の問題だとか収容された人々が味わった間接的な恐怖の描写とかを出せるよう心がけていくつもりです。

近いうちに別の人物目線の番外一つと物語に抜けがあることがわかったので（！）そこを補う話を第三章の終りに割り込み投稿する予定です^^；投稿したらまたお知らせします。

第三十二話 約束

しばらく疲れて休みたいという気持ちも早く誠に会わなきゃという気持ちも忘れて、茫然と可愛らしい顔立ちの彼女を見ていた。

佐伯くんが紗莉南ちゃんを守る？

そうだ。私の住んでいるところまで一緒に行くという当初の約束はお母さんの無事が確認できたことで変わった。あとはここでゆっくり過ごして自衛隊が安全な地まで運んでくれるのを待つだけだ。もう佐伯くんは私と一緒にいる必要はない。何を考えようと彼の勝手だ。

——いや、佐伯くんだけじゃない。須藤くんも、今隣にいる奈美さんも、相田くんも。でも折角出会った仲間だし、特に親密な人が他にいるわけでもないの、当然このまま一緒にいるものだと思っていた。だが今の紗莉南ちゃんの言い方は二人は別行動すると言っているようにも聞こえる。

「へええ。短い間に随分仲良くなったんだねえ」
「……………」

嫌な雰囲気。私自身は自己主張が弱く他の人と対立することを避ける性質なためあまりこういう空気になることはないが、昔から友人同士のいがみ合いにしばしば巻き込まれる。そんな時私はどうすればいいのかわからずいつもあたふたするだけ。しかし今はあたふたする元気もない。

信じられないが、佐伯くんは私たちに話すこともなく紗莉南ちゃん

んと行動を共にすることを決めてしまったのか。会って一週間にも満たないとはいえ、少し間違えれば死んでしまうくらい厳しい苦難の時を共有してきて……たくさんのことを話した。いろんなことを分かち合って結構仲良くなれたと思った。なのに。所詮この程度の結びつきだったのか。そう思うとなんだか悲しい。

「皐月ちゃん？」

「……奈美さんは、これから私と一緒にいてくれる？」

私は何を言っているのだろう。こんなこと聞いて、優しい彼女の自由を奪うのか。言ったことに後悔しつつも恐る恐る隣に座る彼女の顔を見る。

「いるよ」

明るい響きの声ではっきりとそう奈美さんが言った。

「当たり前じゃない。まあ確かに家族とか彼氏とかすごい仲良かった友達とかいたらちよつと抜けるかもしれないよ。でももうそんな簡単に離れる間柄じゃないと思うんだよね、あたしたち」

私が一番聞きたかった言葉。奈美さんは迷うことなく当たり前のように言いきってくれた。目から熱いものが急激にこみ上げる。奈美さんはそんな私を正面から抱きしめてくれた。

「ううう……奈美さんっ……ありがと……」

「よーしよし。皐月は泣き虫だね」

頭を優しくぽんぽんと叩かれる。

「……バカみたい」

そう小さな声が聞こえた気がした。泣き腫らした目でその方向を向くと紗莉南ちゃんはそこにいなかった。見回すと椅子から立ち上がりドアへと向かう彼女の後姿が目に入った。

「っ止まりなさい！ 許可なく立ち上がったら撃つと言ったはずよ！」

「もう許可がでるはずですよ」

彼女が横目で見える方を向くと白衣姿の研究員らしき男が書類を抱えて立っていた。彼ははっと我に返ると私たちに向けて告げた。

「全員非感染者でした」

「……はい、御苦労さま。出ていいわよ」

ようやく許可が下り私は痺れた足で立ち上がった。紗莉南ちゃんはまだ部屋にいなかった。私は後悔した。年下の女の子の気も遣えないどころか取り乱したりして……情けない。佐伯くんはきつとそんな私に呆れたんだ。紗莉南ちゃんの方がよほど芯がしっかりしてる。

部屋の外に出ると須藤さんと相田くんが椅子に腰かけ私たちを待っていた。佐伯くんは——いない。

「あれ、佐伯くんは？」

「大宮連れてどっか行っちゃった」

「はあ？ ちょっと、これから避難所入るっていうのに何してんのっ」

奈美さんは声を荒げ、ご立腹のようだ。須藤くん曰く佐伯くんたちはすぐ戻ってくるから少しの間検問所の前で待っていてくれと言っていた――そうだ。

私たちは検問所を出てすぐ近くの綺麗に刈り込まれた緑の芝生の上に腰を下ろした。少し先にさっき私たちが通ってきた校門が見える。武装した自衛隊員が常に数人そこに待機しているようだ。私は校舎へと目を移した。暗いベージュ色に統一された校舎は五階建てで、ところどころガラス張りだったり、窓に装飾が施されていたりと私立らしくかなりお洒落な造りだ。そして本館のほかにも別館がいくつかあるようだ。

「あの娘、ちょっとおかしいよ。何て言うかさ、ふてぶてしいんだよね」

「またそんなことを……まだ高校生なんだからさ、しょうがないって」

「……男にはわかんないでしょーけどっ！」

また奈美さんと相田くんがさっきと同じようなやりとりを始めた。須藤くんはそんなことどうでもよさげに芝生に寝っ転がり居眠りをしている。そして私は誠のことに思いを巡らせていた。この高校は広い。この付近に住む人を全て受け入れているのだからきっと部屋に箱詰めになっているのだろう。すぐに見つかればいいのだけれど。――それは生きていると仮定した時の話だが。

「すまない、遅くなった」

懐かしい声が聞こえた気がした。見上げると佐伯くんが少し疲れた顔をして立っていた。

「ちょっと、あんた何してたわけ!? あの花に振り回されるのなんてあたしはイヤだからね!」

「な、奈美……声でかいって。それにその紗莉南ちゃんの姿が見えないけど?」

見ると確かに彼女の姿がない。佐伯くんはふっと軽く溜め息をつくと話を始めた。

「高校の友達を探すとかで一緒に付いて行ったんだが……」

「……ああそういうこと。じゃあもうこれでサヨナラってわけね。全くあたしたちにも少しは世話になったんだから礼くらい言えはいのに。躰がなってない娘」

「奈美……」

「いや、また合流するそうだ。場所が決まったら後で迎えに行くことになってる」

「はー!? 何でよー!」

佐伯くんはすごい勢いで詰め寄る奈美さんに数歩後ずさり困ったように頭を掻いていたが、体勢を立て直すと落ち着いた声で言った。

「相性が合う合わないもあるとは思いますが……こんなときだ。人類が一人でも多く生き延びるために協力しなくちゃいけない」

「そりゃそーだけどさ……」

奈美さんが納得しきれないように言う。確かに……自分の通う高校に来たのだから当然避難民にも仲の良いクラスメートが多く含まれるはず。それなのに何故出会って数時間にも満たない私たちに執着するのだろうか――いや、厳密に言えば佐伯くんにか。私はこんなときに出会ったから第一印象は薄いですが、男性らしく凛と整った彼の容姿や落ち着いた彼の人間性に惹かれたのだろうか。だとした

ら彼らの恋愛に口を出す資格など私にはない。

「臯月、いくよ？」

奈美さんの声で我に返る。皆はもう既に歩きだしていた。私は何を考えていたんだろう。他の人のこれからなど私が考えることじゃあない。いずれわかることだ。それに紗莉南ちゃんだって温かく迎えてあげればいいじゃないか。自分の冷たさに愕然とする。今すべきことは、誠を探すこと、それだけ。そう考えようとしても私の胸に渦巻く嫌な感情は消えることなく自己主張を続けていた。

「どこ行くんだよ？」

「さっき確認したところ、職員室などがある本館は自衛隊の本拠地になっているそうさ。避難民は他の2つの別館か体育館のどこを使ってもいいとのことだ」

「じゃあそこにある東館をまず見てみない？」

私たちの正面には三階建ての校舎が長く続いている。標識を見るとどうやら東館はクラスの教室が集まった棟のようだ。――誠は自分のクラスにいるかもしれない。

「……………」

前を歩く佐伯くんに声をかけようとするが、思うように声がでない。言葉が喉の奥でつかえてしまっている。諦めて奈美さんに話そうと思った矢先、佐伯くんが立ち止まった。そしてこちらを振り向く。

心臓が一際大きく鼓動した。私の目を見て戸惑いながらも何かを言い出そうとする佐伯くんに頭が真っ白になる。何を言おうとして

いるのだろう。もしかして……、これからのこと？

「……ええと、皐月さん？」

「……はい」

呼ばれるまですごく長い時間があつた気がする。そういえば、皐月って名前で初めて呼んでくれたなあ。そう考えてちょっと照れくさい気持ちになっていると佐伯くんの隣の須藤くんが盛大に嘖き出した。

「お前、名前呼ぶくらいで恥じらってんじゃねーよ！　どんだけ時間とってんだよ……しかも皐月さんって昭和かよ」

奈美さんと相田くんも可笑しそうに笑い出す。頬を赤く染めた佐伯くんがそれを振り切り話を続ける。

「ともかくだ！　俺が言いたいののはだなっ。皐月さん、弟くんのクラスはどこなんだ？　そこに弟くんがいる可能性が大きいと……俺は思うんだけど」

ちょっと拍子抜けしてしまった。てっきり別行動を告げられると思っただけから。

「私もそう考えてたんだ。誠のクラスは2年D組だよ。だから……二階かな。学年で階が分けられてるから」

「そうか。じゃあ行こう」

あまりにもいつも通りの佐伯くんの態度に安堵する。彼女を守ると約束したとしても私たちから離れることはないのかもしれない。須藤くんも、奈美さんも、相田くんも、皆と離れたくないし一緒に

いたい。でも佐伯くんに対する気持ちは皆とほんのちょっとだけ違うような気がする。一番最初に出会ったということもあるけれど。

東館内に足を踏み入れると空気ががらりと変わった。どんよりと暗く――節電で照明が消えて薄暗いということだけじゃない――息苦しい。人の暗い感情がこの建物の中に充満している。ふと正面のベンチに座る人の姿が目についた。その男性は乾いて黒く変色した血がこびり付いたシャツを着て、力なくうなだれている。その姿は輪郭がぼんやりとしていて影のようだった。

廊下には誰もいない。時々人の声が部屋から漏れ出てくるが、多くの人が収容されているにしてはやけに静かだ。二階へ上がる階段の前に立つ。この先に誠がいるかもしれない。一刻も早く会いたいという期待と知らない方がいいのではという不安な気持ちが交錯する。――現実をみなきや。私は自分を奮い立たせると誠へと続くかもしれない階段の一步を踏み出した。

第三十三話 希望（前書き）

更新が遅れてしまい申し訳ないです……。資格勉強で二週間ほど忙しく、終わった後もかなり間があいてしまったためなかなか筆が進まず悶々としておりました。

なんとか書き途中だったものを完成させ更新できましたが、ブランクが長かったためか何だかしっくりきません（へーへ；）この際全体的に見直そうと思います！笑

何が何でも完結させようと思うので、こんな私の小説ですがこれからもよろしくお願い致します。

本日9／21中に番外編を三章の終わりに載せます。皐月が佐伯のダサい服着たままだったことを思いだし捕捉のために書いたものなのでショボいです……。汗

もう一つは二章の登場人物清見千香子目線のお話です！

第三十三話 希望

窓から差し込む日の光を反射し湖の水面のようにピカピカと輝く廊下を、処刑台に一步一步近付くような気持ちで進む。2年B組、2年C組……、次だ。無意識に塞き止めていた息を吐き出す。――2年D組。避難してきた人々が話す声の中から少し漏れ出てきている。この声に誠のものは含まれているのだろうか。

先頭を歩く佐伯くんがスライド式のドアの前で立ち止まり私にそっと目配せする。私はそれに応えるように前に進み出てドアに手を掛けた。ドアを開くことが躊躇われた――手が動かない。この先に待ち構える現実を知った時、私はどんな気持ちになるのだろうか。誠が生きているにしてもこの教室に絶対いるという確証などないが、ここにいなかった場合生き延びている可能性がぐんと低くなるだろう。

「……皐月？」

「大丈夫」

動作の途中で固まってしまった私を心配して声をかけてきた奈美さんにはつきりと言葉を返す。もう後戻りなどできない。立ち止まることもできない。いかに残酷な現実が待っているとしても、前に進むしかない。自身を奮い立たせるようにドアに掛けた手とは逆の拳にぐっと力を込めると、震える手でゆっくりとドアを横にスライドさせた。

教室はいくつかの机と椅子が端に積み重ねて寄せられており、十数人の人々が床に直に腰を下ろしていた。私がドアを開けると教室は水を打ったようにしんと静かになった。視線が私に一斉に注がれ

る。晃東の生徒も数人いるが、ほとんどが近隣に暮らしていたと思われる人々だ。私がおどおどと軽く会釈すると人々はサッと視線を逸らした。皆顔が憔悴しきっている。想像もつかないような凄惨な出来事を経て命からがらここまで逃げてきたのだろう。

「おい。どうだ、いるか？」

須藤くんが後ろから声をかけてくる。私は十数人の顔を一通り確認すると小さな声で応えた。

「……いない、みたい」

震えが止まらない。胸に何か固いものがぎっしり詰まってるようで、重く息苦しい。後ろの須藤くんたちが私に何かかける言葉を探して困惑しているのが背中から伝わってくる。

「義崇さん」

血の気が引き、ふらりと頭が後ろに引っ張られるような感覚がしたその時、重く淀んだ教室の空気に光がさしたかのように明るく可愛らしい声が響く。紗莉南ちゃんだ。さっきも数人の制服を着た生徒たちと一緒に視界に入ってきたが、正直それどころじゃなかった。彼女はパタパタと小走りで真っ先に佐伯くんの方へ近寄る。

「もう大丈夫ですから、これから是一緒にいさせてください」

「友達といなくていいのか？」

「はい」

彼女と一緒にいた男子生徒が何か言おうと口を開いたが、紗莉南ちゃんが佐伯くんにべったりなのを見ると諦めたように口をつぐんだ。

「大宮さん、伊東……皐月さんの弟くんを……誠くんを見なかったか？」

「……いえ、見てませんけど。来てないんじゃないですか？」

さらっと言う紗莉南ちゃんに胸がズキンと痛む。やっぱり、誠来てないんだ。まだ可能性はあるけど、でも……。眉間にキュツと力が入り、そこから熱が込み上げる。頭が締め付けられるように痛い。

「ゴメン、ちょっと回り見てくるね。皆はここにいて。すぐ帰ってくるから」

私は矢継ぎ早にそう言うのと教室を飛び出した。堰^{せき}を切ったように涙が溢れだしてきた。ぼろぼろと零れ落ち止まらない。後ろで皆の声が聞こえたが足を止めることはできなかった。

片っ端から教室を覗いた。その都度人々の視線が私の身体に突き刺さる。力なく一点を見つめる、今にも閉じてしまいそうな目。彼らの姿を見ていると心の中がどんどん冷え込んでいくのを感じる。希望があつた場所に次々と諦めが置き換えられていく。

気付けば校舎の外に出ていた。門のある右手から茶髪の女性が一人、おぼつかない足取りでこちらに歩いてくる。血を大量に被ったのだろう、どす黒い赤で染まったワンピースを着ている。その顔に生気は感じられない。ただ一人生き残ってしまっただけ――全てを失った絶望が彼女の全身から伝わってきた。

あんなになっても生き延びてここへやってくる人がいるんだ。ゾンビが目が見えないことを知っていれば長い期間持ちこたえられるかもしれない。まだ諦めるのは早い。この高校の隅から隅まで何回も探して、それでも会えなかったらその時初めて諦めればいい。そう自身に言い聞かせるように心の中で唱えるが、自分でもわざとらしく無理矢理だと思う。私はそんなに意志が強くないし、根性もない。ダメならダメでもう何もかも忘れて眠ってしまいたい。これが飾り立てた偽りのない、私の本心なんだ……。

「……あ」

門とは逆の方向、体育館の方から女子生徒が早足で近付いてくる。半袖のセーラー服から覗く色白の華奢な身体はこの世界で生きていくにはあまりにも頼りないが、綺麗な天使の輪が浮かぶ短く切り揃えたおかつぱ頭を揺らして大股で歩くその姿は健康的で強い生命力が感じられた。私は彼女に見覚えがあった。確かプリント類をカバンの底にくしゃくしゃにして溜め込む誠に文句を言いながらも整理してあげた時、彼女の顔写真がふと目に入ったのだ。

『この子が生徒会長さん？』

『あ、ああ……そうだよ、そう』

『へえー、可愛いなあ……あ、なんか顔赤いんじゃない？　もしかして〜』

『ち、ちげーって！　そんなんじゃないからっ』

あの時の誠の顔。あれ絶対片想いだな……。そう考えていると自然と足が彼女の方へ向かっていた。目の前で歩みを止めた私に彼女の方も立ち止まる。ぱっちりとした目を瞬かせ、不思議そうな顔で

私を見つめてくる。

「あの、私に何か……？」

「生徒会長さん、だよこみねね？」

「あ、はい。3年A組、小峰加世かよといいます。生徒会長だった、の方が適切かもですが」

彼女は目を伏せ悲しげな笑顔を見せた。透明感のある声、雰囲気。学年は違うけど、誠が好きになるの、すぐくわかる。

「えっと、2年生の伊東誠の姉で、伊東皐月です。……あ、誠のこ
と知ってるかな？」

「あ、はい！ 知ってますよ。体育委員と一緒に体育大会の準備し
たりして……」

このような事態の中、自分を見失わず落ち着いている彼女を見て、
自分がいかに平凡な人間か思い知らされた。こういう人をカリスマ
っていうんだなあ。

「お姉さんなんですか……。伊東くんに似てますね、目元とか」

「そ、そうかな？」

「そっくりです」

真っ直ぐな笑顔が眩しい。加世ちゃんはこの世の中に絶望を感じ
ていないのだろうか。

「……伊東くんのこと、探してるんですよね？」

加世ちゃんの声で我に返る。そうだ、私は何をぼんやりしてるの
だろう。しっかりしなくちゃ。

「そうなの。加世ちゃん、誠を見なかった？」

「……私は見てないです。お役に立てずごめんなさい」

「そっか……ありがとう」

本当に申し訳なさそうに言う加世ちゃんに胸が痛む。誠が好きだった女の子と今話してる。でもその誠はもうこの世にいないかもしれない……。年下の女の子の前で虚勢を張る元氣も意地もなく、どんより沈んでしまった私に加世ちゃんが「あ、えっと……」と何か言おうとしてくれているのが何とも情けない。

「……あ、でも、藤井くんなら見ました。同じサッカー部で伊東くんと仲いいんです。あの時も……この世界にゾンビが現れたあの日も、私、藤本くと数人のサッカー部メンバーで帰って行くの見ましたから、もしかしたら伊東くんも一緒にいるかもしれないです」

「藤井くんは今どこにいるの？」

「さっきは体育館にいましたけど」

「ありがとう！ 行ってみるね」

加世ちゃんが言い終わらないうちに私は走り出していた。もしかしたら誠がいるかも。心臓がこれまでにないくらい高鳴っていた。どこからこんな力が湧いてくるんだろう、というくらいの全速力。といっても他の人から見たらジョギング程度かもしれない。

「……はあ、待って、くださ……い！」

「……？ 加世ちゃん」

走る速度を緩めて後ろを振り返ると加世ちゃんが私の後を追って

走ってきていた。

「どうしたの？」

「臯月さん、藤井くんのこと知りませんよね？ だから私が一緒に付いて行こうと思って」

「あ……」

広い体育館で顔もしらない人を探すなんて。私は一体どうするつもりだったのだろう。自分の馬鹿さ加減にほとほと呆れた。

「ありがとう……」

「いえいえ。行きましょう」

さつき初めて会った人のために嫌な顔をせず手を差し伸べてくれる。疲れた心に温かいものがじんわりと広がるのを感じた。

「加世ちゃんは、今誰かと一緒にいるの？」

「お祖母ちゃんと一緒にいます。お祖母ちゃんの家これから近くて、あの時も家に寄っていたんです。それから割とすぐにここに避難しました。お父さんとお母さんとは電話で安否の確認ができたんですけど、会えたとしても当分先だろうな……あ、すみません。いろいろなことペチャクチャと……」

くると表情を変えて喋る彼女を見て、とてもさつき初めて会ったなんて思えなかった。そしてそうこうしているうちに体育館の開け放たれた扉の前に来ていた。中は歩くスペースは十分にあるもののやはり人で埋め尽くされている。すいすいと人を避けながら進む加世ちゃんの後ろを付いて行くと、すぐに足を止めた。

「あそこの……あの人は」

彼女がそつと指差す先には壁にもたれて項垂れる男子生徒の姿があった。瞬間、悟った。誠はここにはいない。一向に動こうとしない私を加世ちゃんが心配そうに見てくる。

「そういえば、加世ちゃんはどうしてここに？」

「……仲良しの友達を探しに来たんですよ。でもいませんでした」「そっか……」

暗い空気が私たちの間を流れる。

「お祖母ちゃん、心配してるんじゃない？」

「あ、いや……」

「もう大丈夫。後は頑張って探すね。本当にありがとう」

突き放した言い方になっていないだろうか。でも加世ちゃんとはここでお別れしなきゃいけない。彼女の前で回復の見込みがないほど悲嘆にくれる自信があった。真っ直ぐで優しい彼女にそんな姿を見せたくない。

「私、3年A組の教室にいますので……お力になれることがあればいつでもいらしてください」

彼女は私の気持ちがあったようで優しい声でそう言う。「では」と一礼して静かに去って行った。しばらくして未だ俯いたままの藤井くんに向き直るとゆっくりと彼に近付く。そして少しばかり勇気を出して声をかけた。

「藤井くん？」

反応がなかったのでもう一度声をかけようとした時、ずっと藤井くんが顔を上げた。思わず声をあげそうになった。血の気のない青白い顔に不自然に浮き出る赤く腫れあがった彼の目。表情はトロンとして何を考えているのかわからない。

「伊東の……姉貴？」

そう力ない声で呟く藤井くんには少しばかり驚く。何故私のことを知っているのだろう。

「うん。私のこと知ってるの？」

「あいつ……伊東が、よく話してましたから。写真は見たことなかったけど、イメージにぴったりだし、伊東に似てる。……あいつ、シスコンっスよね……」

藤井君はそう言って弱々しい笑みを見せた。誠、私のこと友達に話してたんだ。涙腺が緩み、今にも情けない顔で泣きそうになる。

「誠、今どこにいるか……わかる？」

遠い目をして斜め上を見上げる藤井くんに恐る恐る尋ねる。彼はこちらにゆっくり顔を向けると泣きそうな顔を見せた。

「一緒に逃げてたんです……でも、後ろから悲鳴が聞こえて。振り返ったらあいつももう一人も血塗れで。噛まれたら助からないの知ってたから……俺……」

「わかった……」

不思議と私は冷静だった。感情に任せて恐怖と後悔に震える藤井くんを責めることなんて思いもつかなかったし、ずっと諦めることができた気がする。

「……あいつを見捨てて逃げた俺のことが、憎いですよね」

「ううん、私も同じようなことたくさんしてるもの……。この世界ではしょうがないことだよ。でも、もし世界がまた元通りになったら……誠のこと思い出してね」

私は静かに立ち上がると藤井くんにさよならを言い、体育館を出た。背中越しに聞こえた藤井くんの嗚咽がいつまでも耳から離れなかった。

第三十四話 姉弟（前書き）

本日九月二十二日、登場人物紹介を更新しました。

この章ではまだ登場人物が増える予定です^^

あともう一本の番外編も今日中に三章の終りに投稿する……予定でしたが間に合わなかったので、またお知らせします^^;

第三十四話 姉弟

体育館を出た途端身体から力が抜け、私はコンクリートの地面に膝をついてしまった。心は感情という感情を殺してしまったかのよう静かなのに、腕も脚も壊れた機械のようにガクガクと震えている。すると急に陰が差し、驚いて顔を上げるとそこには小太りのおじさんが立っていた。いかにも邪魔だと言わんばかりの目で私を見ていたが、私の顔を確認するとさっと表情を変えた。

「お嬢ちゃん、どうしたの？ 気分が悪いのかい？」

「……いえ、大丈夫です」

本当に心配してくれているのかもしれないが、街で出会ったサイコパスたちの笑顔と同じようなものを感じる。今は人の親切を素直に受け止められそうもない。おぼつかない足取りで逃げるように歩きだす――と、後ろから腕を強く掴まれた。

「そんな状態じゃあ危ないよ。保健室に行こうか。こっちだよ」

あなたと一緒にいる方が危ないよ！ とは言えるわけもなく。弱々しくやめてくださいと言っても腕を離さない相手を振り払う元氣もなく。ただ誠を失った悲しみに流されそうになったその時。

「どけよ」

「あ？」

男の人が立っていた。体育館に向かう通路にいた私たちが邪魔になっているようだ。長い前髪から覗く目は無気力で、冷やかだった。彼は何もなかったかのように再び歩きだすと、私たちの横を通

り過ぎざまにドンとおじさんの肩にぶつかつた。

「おいてめえ、やるってのか」

「……そこを動かないっていうんなら婦女暴行罪で自衛官につきだすぞ。和を乱すものはゾンビの餌食になっても構わないって方針だそうだからな」

おじさんは私の腕をぱつと離すと青ざめた顔でそそくさと立ち去って行った。

「……そんな方針なんですか？」

「いや、知らない。その場で思いついた」

しれっとした顔でそう言う彼の様子に思わず笑っていた。彼は不思議そうに私をみると「また変な奴に捕まらないよう早く戻れ」と言い残し体育館に消えた。私はしばらくその場に留まっていたが、どうしても佐伯くんたちのいる教室に戻る気は起きなかった。しかし体育館に出入りする人たちの目が気になり、とりあえずその場を後にすることにした。

校舎の裏側に来ていた。折角あの男の人が助けてくれたのに気まぐずい思いがしたが、今はとにかく一人になりたい。奥へ奥へと進み人の声が届かない場所まで来ると私はゆっくりと地面に腰を下ろした。この辺りは草が生い茂っており着替えたばかりの洋服が湿った土で汚れてしまうが気にならなかった。校舎にもたれかかり力なく正面を見やると、この学園の敷地の端にいますように、綺麗に手入れされた木と木の間に地獄と学園を隔てる高い塀が見える。

『なあなあ母ちゃん。旅行行こうよ、旅行』

ふと昔交わした家族との会話が頭の中に蘇る。昔、と言っても今月のことだから最近か。でも遠い過去のことのような感じがする。

『あんた高校生にもなってまだ家族と旅行なんて行きたいの?』

『えっ……、普通じゃねえの?』

『冗談よ、冗談。何ショック受けたような顔してんの』

お母さんの言葉に時が止まったような顔してたな、誠。

『で、どこ行きたいの?』

『海外!』

『『……はあ!?!???』』

お母さんとその時まで黙って聞いていた私の声が綺麗に重なった。

『そんなうちに余裕あるわけないでしょー。お母さんに無理言うんじゃないの。バカ』

『なんだよ、姉ちゃんだって海外行きてーつってたじゃん!』

『希望と現実の違いです。将来夢ができていいじゃん。若いうちに何でも経験しちゃうとこの先退屈だよー?』

『なんだよ年寄りみたいなこと言っちゃってさ……。だって周りは皆ポンポン行くんだぞー俺も行きたいよ』

『それはあんたが私立行ったからでしょ』

そこからヒートアップして不毛な言い合いが続いた。数年前と違ってお互い手を出すことはないが、結構毎回本気だったりする。

『姉ちゃんもうすぐ二十歳のくせに彼氏いねーんだから家族だけが心の拠り所だろ!』

『うるさいなあっ。それとこれとは関係ないでしょうがっ!』

『……行くかっ』

『『ええっ??』』

妙にすっきりした顔をして立ち上がったお母さんに私も誠もただぼかんとしていた。お母さんはそんな私たちを見てにっこり笑う。

『お母さんも前から行きたいとは思ってたのよ。でも今一步踏み出せなくてね。そんな贅沢できないけど、一回くらい行ってみようか』

『ほんとに?』

『ただし二人で一番快適でなるべく安い調べときなさいよ』

誠と顔を見合わせ、にんまりと笑う。

『やったあー!』

『なんだよおー、姉ちゃんの方が嬉しそうじゃん!』

それから夜は家に一つしかない古いパソコンの前であだこうだ言いながら旅行の計画を立てる日々が続いた。私も誠も機械がそんなに得意じゃないので無い知恵を足し合わせてどうにかこうにか調べ進めた。結局この夏にカナダへ行くことになった。この世界が崩壊する三日前に決まったことだった。

「……うう」

私は幸せだったんだ。今になって思う。私は周囲を気にすること

なくただただむせび泣いた。

どれくらい時間が経ったのだろう。しばらく意識が途切れていたような気がする。もう日が傾いていた。少し肌寒い――むき出しの腕を擦りながら私はよろよろと立ち上がった。……帰ろう。

帰る間際、何気なく右手奥に目をやると、木々に溶け込むように佇む倉庫のような四角い建物が目に入った。あの辺りは周囲と比べ草木も一層生い茂り、普段人があまり訪れない場所なのだろう。気になったのはその建物手前の植え込みだ。明るい紺色の物体がはみ出ている。見方によっては人の足のようにも見える。何となく気になって引き返し、少し近寄って目を凝らす。

――足だ。

そう認識した瞬間、私は駆け出していた。何故だかわからないが、誠であるような気がした。期待を込めてそっと植え込みの反対側を覗く。

「……っ！」

やはり人だった。うつ伏せになった人。ここの生徒らしい、明るい紺の制服のズボンを着ている。そして白かったであろう半袖のシャツ。今は黒に近い赤に染められて、ズボンからはみ出た部分が僅かに元々の白さを残していた。この学園に入れたのだからこれは返り血だろう――黒く変色しパリパリに固まった状態から考えるに、血を浴びてからだいぶ時間が経っているように思える。

「……誠？ 誠だよね」

反応はなかった。でも、これは誠だ。私は確信していた。可哀想に、頭からバケツの水を被ったようだ——もちろんこの場合バケツの中身は血だが。髪の毛一本一本に血が染み付いているようで、ハリネズミのようにツンツンと束になっている。肌には血がまだら模様になって貼りついている。全身から生々しい鉄の臭いを発する彼に手を伸ばし、その頭を撫でる。バリバリと人工芝のような感触がした。

彼が頭をもたげた。力なく見開かれた片目が私をとらえる。

「……姉、ちゃん？」

やっぱり誠だった！ 私は血塗れの誠を引っ張り起こすと、力強く抱きしめた。強烈な臭いが鼻をつくが、そんなことどうでもよかった。誠は呆けた顔でされるがままになっている。

「よかった、生きてて……辛かったでしょう」

「何でここに？」

「誠を探しに来たんだよ！ お母さんも無事だよ。また三人で暮らせるよ」

最後は涙声になってしまい誠が聞き取れたか分からない。

「夢みたいだな……。夢じゃないよね？」

「夢じゃないからっ。まだ夢の中にいるような顔して……。でも本当に私、誠死んじやったのかと思ったよ」

「俺も、死ぬかと思った」

力なく微笑む誠の前歯は少し欠けていて、少し間抜けだった。

「もう……死体みたいな格好して。洗いにくいこう」
「……うん」

私は誠の手を引いて立ち上がった。誠も弱く握り返したのが分かった。

第三十五話 諦め（前書き）

また更新が遅れてしまいました……。今までのように頻繁にはもうできないかもしれないです（＜―＞）

それでも書き続けていくつもりです。頑張ります！

第三十五話 諦め

体育館の外壁に備え付けられた水道の蛇口をひねる。グラウンドに面したそれは普段体育会系の部活動に勤しむ多くの生徒たちが利用していたのだろう。サッカー部員である誠もその一人であったに違いない。日常が失われて4日が経った今の時点ではまだ電気も水も使える。しかし使えなくなる日が来るのは時間の問題。そう遠くないはずだ。

文化祭の準備でペンキを被ったにしてもここまではならないだろう——真っ赤に染まったシャツを脱がせ、誠は血をたっぷり被った頭を洗い始めた。透明の水が誠の頭を伝って排水溝で赤い渦を巻いた。

このシャツは洗っても使い物になりそうもない。臭いがきついし、何より誠が着たがらないだろう。皆がいる教室まで急いで戻った方がいい。そう考えているうちに頭を洗い終えたようだ、手で念入りに水気を落とす誠と目が合った。

「とりあえずここは寒いから部屋に行こっか……。途中で出会った人たち何人かとここまで来たんだけど、皆私が誠を探すのに付き合ってくれたんだよ」

「……やっぱ俺を探すためにここまで来てくれたんだ。すごい危険だっただろ？」

「そりゃあね……」

途中で命を落とした清見さんや寺崎くん、渡部くんの顔が次々と浮かんでは消えた。中には私がこの高校を目指していなければ助かったかもしれない命もある。そうでなくても数々の犠牲の上に成り

立った再会であることは確かだろう。

「ホントにありがと……姉ちゃん」

「誠……」

「俺、正直生きる気なくしてた。苦しすぎて」

喉の奥から絞り出すようにそう言う誠は泣き笑いのような表情だった。

「俺……つぐしゅっ！」

「ほらほら、やっぱ寒いんでしょ。話は後でゆっくり聞くから、まずは校舎に入る。皆誠のクラスの、2年B組にいるから」

その時誠の表情が明らかに強ばった。目を大きく見開き、ゆっくりと首を横に振る。

「いやだ……行きたくない」

「え……？」

「俺行かない。ここにいます」

誠はそんなに人見知りするタイプではない。現に近所に住むおじいさんおばあさんとはすぐに仲良くなり、「まあちゃん」と呼ばれ、飴をもらったりして可愛がられている。ここまで拒否反応を示すのには何か訳があるのだろう。

「とりあえずこのままじゃ風邪引いちゃうから……体育館行こうか」

俯いて黙り込んでしまった誠の手を引き体育館に入り、隅の方に

腰を下ろした。誠は何か恐ろしいことが頭から離れないようで、虚ろな目で血の気のない紫の唇を震わせている。

「いつここに避難してきたの？」

「……昨日」

やはりゾンビ発生からずっと高校にいたわけではないようだ。昨日までゾンビの目を掻い潜りながらやってきたのだろう。改めて再会できたことを幸運に思った。

「それまでどこにいたの？」

「……スポーツショップ。三階建てのビルの二階。キーパーのやつが……グローブ買い換えたいって言ったから帰りに寄って、それきりそこにこもってた」

「サッカー部の友達といたんだよね。藤井くんとかでしょ」

誠は頷くと体育座りして抱えた膝に顔を伏せてしまった。加代ちゃんも誠はあの日六人くらいで帰っていったと言っていた。一緒にいた友達ほとんど死んでしまったのだろう。

「……俺のせいだよ」

誠は顔を伏せたまま小さな声で呟いた。

「あいつら、声に反応するんだろ。俺、逃げるとき皆を励まそうと思って大声出してたんだ。あれがかえってあいつらを呼び寄せてたんだよな」

「……………」

「大量のあいつらに囲まれて、一人ずつ捕まって食われていった。一人襲われる度にあいつらが悲鳴をあげるそいつに集まるから、道

ができて、俺たちは逃げて、また一人が襲われて……。いつの間にか半分になってた」

誠は淡々と喋り続けた。

「いつも馬鹿みたいなこと言って笑ったりさ、時には真剣に大会目指して練習してさ、そんなやつらが……聞いたこともないような恐ろしい声出して食われてったよ。助けてって何度も言われたけど、もう助からないの見ただけでわかるからって自分に言い訳して……怖くて見捨てて逃げた」

「誠……」

「藤井と、キーパーの宮里と、俺が残ったんだ。でもあと高校まで少しってところで宮里が首元を食い千切られて、すごい血が出て……」

誠はそこで一拍置き、続けた。

「でも化け物は一体だけだったから俺、店から持ち出してきた鉄の棒を化け物の首に思い切り突き刺したんだ。化け物は動かなくなっただけど、藤井は血塗れの俺たちを助からないと思ったのか逃げたみたいだった。それから宮里を一人で支えながら高校まで来たんだ」

誠はようやく顔を上げた。意外にも平然とした顔付きだったが、頬には涙のあとがあった。

「でも着いた途端宮里は自衛隊に連れてかれちゃってさ。たぶんあいつダメだったんだろーな……」

「……誠、よく頑張ったね」

「姉ちゃん、俺、生き残ってよかったのかな……」

「何言ってるの」

「俺なんかが生き残っちゃいけなかったんだよ。もうこの世界は終わりだ。死に損ないは大人しく死んだ方がいいんだよ」

「誠を探しにここまで来た私はどうなるの？ 簡単に諦めないでよ」

生きる力を失いかけた誠にどうしても言葉が刺々しくなってしまう。私はお母さんと三人で生き延びたいと思っているのに、誠は全く逆の方向を向いている。なんともいえないもどかしさを感じた。

「おっ、いたいた」

さっと陰が差し聞き慣れた声が降ってきた。見上げるとやはり予想通りの人物がいた。須藤くんだ。

「まったく。飛び出したきりいつまで経っても戻ってこねえんだからよ。ゾンビに喰われに行ったんじゃないって心配したじゃねえか」

「ごめんなさい……」

「バカ、謝るなよ。ほら、戻るぞ」

つっけんどんにそう言うのと須藤くんは私の手首を掴み引き上げようとする。

「いや、ごめん。今は行けない……」

「……………」

須藤くんは静かに手を離した。神妙な面持ちで私を見つめてくる。

「わかったよ。今は一人になりたいよな。ここにいろよ？ また迎えに来るから」

須藤くんは妙に優しい声でそう言うのとふと目を細めた。

彼らしくない。違和感だらけで気持ち悪い。……というかもしれない。横にいる誠に気付いてないのだろうか。いや、たぶん、というか絶対私が弟と再会できなかったと思ってる。

「いや、落ち着いたら私が行くよ。誠連れて」
「あ？」

須藤くんはぽかんとした顔で私をじっと見つめ、それから横へ視線を移した。

「いたのかよ、おい！ 早く言えよ！ よかったなあ！」

須藤くんは興奮した様子でバシバシと私の肩を叩いてくる。大声をあげて喜んでくれるのは嬉しいが、回りからの視線が痛いくらい突き刺さる。当の誠も呆然として何も話せずにいる。

「俺は須藤だ。お前の姉ちゃんとは共に死線をかいくぐってきた仲間だ。よろしくな」

「……伊東誠っす、どうも」

差し出された大きな手を誠はおずおずと握り返す。

「で、何で来れねえんだよ？ 見つかったならいいじゃねーか。みんな喜ぶぜ」

「それは、その……色々あってね。とにかく、後で必ず行くから」

私がそう言うのと須藤くんは軽く溜め息をついた。何を思ったか腕を組み誠をじろじろと観察し始める。彼の射るような鋭い瞳に誠は私に助けを求めるような視線を投げかけてくる。

「ええと……須藤くん？ 誠疲れてるみたいだから……」

「お前、自分のせいで人が死んだと思ってるだろ」

「……え」

須藤くんはやっぱりな、と再び溜め息をついた。

「そんなこと言うならここにいる奴らは皆そうだ。目の前で襲われてるやつを見殺しにしながらここまできた。そうだろ？ じゃなきや今頃骨だけの残骸になってるか肉を求めて外をうろついでるかだ」

「でも……」

「漫画や映画の見すぎなんじゃねえか？ お前はヒーローでもなんでもないんだぜ。ただのガキだ。突然現れたあんな未知のバケモノに、普通の人間が適切な対処できるわけあるか」

誠は何か言おうとしたのか、口を僅かに開けたまま黙りこくってしまった。

「それとも何だ、お前誰かをおとりにでもしてわざと殺したのか？」

「……そんなこと、あるわけないじゃないっすか！」

突然張り上げた大きな怒声に周りの人たちが反応する。誠は相当傷つけられたのかブルブルと震えながら須藤くんを睨んでいる。須藤くんはその勢いに驚いたのか呆けた顔をしている。すぐに冷静さを取り戻した誠がすみません、とまだ不機嫌な態度で謝ると須藤くんはニツと笑った。

「……何がおかしいんすか？」

「いや、十分元気あるなと思ってよ」

この期に及んでも飄々とした態度の須藤くんは誠はあからさまにムツとした表情をした。来てくれたのが佐伯くんだったらな、と失礼なことを考えてしまう。

「悲劇の主人公ぶるなら全てが終わってからにしろ。大切な時は今だ。また母ちゃんと姉ちゃんと三人で暮らしたくねえのか？ そんな調子でいるといつか後悔するぜ」

「……………」

誠は張りつめた表情をふっと解くと俯いてしまった。

「ごめん、須藤くん。今は無理みたい」

「ま、そうだろうな。いいぜ。また後で……」

「行きます」

はっきりした声でそう言うとき誠は顔を上げた。会ったときは別人のような生気の漲る顔だった。

「やっぱ俺生きたいっす。また家族と平和に暮らしたい。サッカーもしたい」

「誠……」

私と目が合うとき誠は僅かに笑顔を見せた。やっぱり同じ気持ちでいてくれたんだ。よかった。

須藤くんはくると背を向けるとつつけんどんに「行くぞ」と言

い残しさつさと体育館から出て行ってしまった。私たちもゆっくり立ち上がるとその後を追った。

第三十六話 安全地（前書き）

やっと書けました！登場人物が増えると大変ですね…

第三十六話 安全地

「臯月！」

教室のドアを開けると真っ先に奈美さんに出迎えられた。後ろに立つ誠の姿をみとめると感極まった様子で私を優しく抱擁してくれた。かなり心配してくれていたようだ。

「弟くん見つかったんだ……本当によかったね」

そう言って鼻をすする奈美さんはほんのり涙目で心から喜んでくれているのがわかった。こんな仲間に出会えて本当に私は幸運だ。

それからとりあえず教室の端に円の形に向かい合って腰を下ろした。やはりまだ皆疲れが抜け切れていないように思える。それもそのはず、つい先ほどまでゾンビに血肉目当てに追いかけまわされていたわけで、高校に到着してからまだ半日も経っていないのだ。

体育座りで緊張した様子の誠に優しく声をかけ上着を被せる相田くん（誠はあれから上半身裸だった）、「歓迎会しましょ」と鞆からお菓子を取り出し手際よく開封していく奈美さん、その様子を胡坐をかいて気だるげに見る須藤くん——そうやって何気なく一人一人を見渡していると佐伯くんの姿がないことに気付いた。

「あれ、佐伯くんは？」

「佐伯なら須藤と一緒に伊東さんを探しに出て行ったままだけど……会わなかったのか？ 大宮さんも一緒だったと思う」

相田くんに言われてそういえば紗莉南ちゃんも思った。きっと

まだ私を探してくれているのだろう。しかしまた行き違いになってしまう可能性が大きいのでここで待つ他ない。それから誠を交えて各々が自己紹介を始めゆったりと時間が過ぎていった。

自己紹介が終わって少しして教室のドアが開く音が聞こえた。

「臯月さん」

急ぎ足でこちらに向かってきた佐伯くんはすぐに誠の存在に気付いたようで、深く安堵の溜め息をついた。

「誠くんだね？ 俺は佐伯義嵩という者だ。君のお姉さんと同じ大学の学生だった。生きていてくれて本当に良かった」

「どうも……姉ちゃんがお世話になってます」

背の高い佐伯くんに見下ろされ、誠がおずおずと頭を下げる。その時佐伯くんの後ろに付き添う紗莉南ちゃんに気付いたようだ。

「あれっ、お前……大宮？」

「……………」

少し二人の間に気まずい時間が流れたように思えたが、特に会話を交わすこともなく二人の再会の時間は終わった。クラスメートだったはずだが、何かあったのだろうか。渡部くんのこともありどうも紗莉南ちゃんに対し不信感が拭えない私は誠にこっそり彼女のことを聞こうと思ったが、相田くんが話し始めたことでそんな気も失せてしまった。

「で、これからどうなるんだ？ 自衛隊がヘリで安全地帯まで運送

してくれるとかいう話だったけど……本当なのか？」

「その話だが」

すぐに反応した佐伯くんは表情がいつにも増して重苦しく、これから話す内容がよい内容ではないことが伺えた。やがて回りに聞こえないよう声を潜めて話し始めた。

「偶然隊員同士の話を立ち聞きしたんだが……安全地帯とされていた北海道の一部地域にも感染者が、ゾンビが侵入したらしい。また安全を確保するまで当分時間がかかるそうだ」

「北海道に……安全地帯？」

「そうだ。山間の中規模の町で、早くから安全が確認されていたようだ。有刺鉄線や頑丈なバリケードで囲まれ、もう既に避難民を受け入れていたらしい」

問題とは別のところに突っ込んで話の流れを滞らせた私だったが、佐伯くんは表情一つ変えず丁寧に答えてくれた。それにしてもゾンビがいない地域なんてあったのか。あの日、普通の人間が突如人を襲うゾンビと化し、恐るべきスピードでその数を増やしていった。その安全地帯にはあの最初の変化が一人も訪れなかったということになる。そんなことあるのだろうか。

「ま、ここでゆっくりして修復を待てばいいんだろ。そんな深刻な面するなよ、気楽にこうぜ」

「家族の無事が確認できてないあたしらは気楽になんかできそうもないけどね」

いつもの調子の須藤くんは僅かに眉をひそめるもすぐに「そうだな」と表情を緩めた。奈美さんも厳しい言葉とは裏腹に須藤くんを非難するような色は込もっていなかった。

自分たちがピリピリしてもどうにもならないことを皆わかって
いるのだ。自衛隊に任せるしかない。それに自衛隊の保護下にいる今、
特に問題はないように思われた。食料の問題などはあるだろうが、
今まで味わってきた危険に比べれば数倍安全だ。自衛隊の活躍を見
守っていればそれでよいのだから。

——そう思う反面。どうしても嫌な予感が頭から離れなかった。
相田くんの屋敷で見た影。知恵のないゾンビを屋敷に招き入れたか
もしれない存在。新たな脅威。あれがまたよからぬ事態を引き起こ
すかもしれない。もしかすると北海道の安全地帯を襲ったのも……。
想像は止まらない。

「臯月さん」

「え！？ な、何、義崇くん」

自分の世界から急に引きずり出され情けない声をあげてしまう。
佐伯くんはそんな私にクスツと笑みをこぼすと真剣な表情に戻り話
を続けた。

「今から少し付き合ってくれないか？」

「あ、うん。いいけど……」

反射的に承諾してしまったが、何の用事だろう。佐伯くんに個人
的な対応をされるのはかなり久しぶりな気がする。意味もなくドキ
ドキしてしまう。

「ねーちゃん？」

「ええっ？　なに、誠」

さっきから挙動不審すぎる。変なところで鋭い誠が何を言い出すのかと内心ビクビクしていると。

「佐伯さんと姉ちゃんて付き合ってたの？」

「なっとな、何言ってるんだか。そんなわけないでしょ」

「何か焦ってるし。だってそれって逢い引きってやつじゃないの？」

「違うってばー！　変な言葉使わないのっ。ごめんね、義崇くん」

恥ずかしくて頭に血が上り、周囲の反応が目に入らない。きっと須藤くんあたりはニヤニヤしているんだろう。当の佐伯くんをチラリと見ると案の定困った顔をしていた。

「誠くん、安心してくれ。君のお姉さんとは……そんなんじゃない。ただ、ちょっと確認したいことがあるんだ」

「あ、いいっすよ。連れ回しちゃってください。ついでに彼女にでもしてやってくださいよ。まだ彼氏できたことないんだから俺不安で……」

「誠っ！」

「やるなあ弟！」と楽しそうな須藤くんたちに囲まれていつの間にか普段の憎まれ口を発するようになった誠に安堵しつつ、気まずくて早くこの場から立ち去りたい気持ちで一杯でいると、それを察してくれたのか佐伯くんが私に行こうと促した。

「義崇さん、行っちゃうんですか？」

教室を出ようとする少し不機嫌そうな紗莉南ちゃんに呼び止められた。

「怖いんです。ずっと一緒にいるって言うてくれたじゃないですか」
「皆がいるから大丈夫だ。誠くんとはクラスメートだろう？」

「義崇さんがいなきゃ……嫌です」

上目遣いで佐伯くんを見る紗莉南ちゃんと優しい目で、声で応える佐伯くん。震える彼女は誰もが守ってあげたくなるほど愛らしくて、佐伯くんもそう思っていると思うと胸の奥が微かに痛んだ。

「すぐ戻ってくるから。さっきから歩き通しだっただろう。ゆっくり休んだ方がいい」

そう言って佐伯くんは彼女の頭を撫でた。

「わ、私。先出てるね」

堪えられなかった。咄嗟に体が動き、逃げ出すように教室の外へ出た。少し涼しい廊下の空気に触れると、キューと締め付けられるようだった心臓から徐々に緊張が抜けていくのがわかった。

「すまない」

「ううん。……で、どうしたの？」

後から出てきた佐伯くんに不自然に冷たい対応をしてしまった気がする。佐伯くんはそれを感じとったのか気まずそうにずっと形のよい鼻先を指の側面で擦ると、姿勢を正し真っ直ぐな視線を向けてきた。

「これから自衛隊員と話をしに行こうと思う」

「話……？ 自衛隊員と？」

「そうだ。相田さんの屋敷で見た……あの得体の知れない生き物の存在を彼らが認識しているか、それを確かめにいく。俺たちの見間違いの可能性もあるが、人類の存続を脅かす危険性を含む情報は伝えるべきだと思う。それに……俺は嫌な予感がしてならないんだ」

しばらく呆然と聞いていた。佐伯くんも全く同じことを考えていたのだ。それを何とも嬉しく思った。

「私も同じことを考えてたんだ。ゾンビなんか出てくる世の中だもの、これから何が出てきてもおかしくないよね」

佐伯くんは私の答えに安心したようで力強く頷いた。

そして私たちは自衛隊の駐在する本館へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0098u/>

死の都市

2011年11月12日19時16分発行